静岡県のウミガメの民俗

―御前崎市・伊東市における一五・六年前の調査をふまえて―

藤井弘章

はじめに

筆者は平成九年（一九九七）ごろから、ウミガメの民俗について関心を持つようになり、現在に至るまで全国的に調査を継続してきた。そのきっかけになったのが、民俗学者・野本寛一氏のウミガメの民俗に関する論考であった。後述するように、野本氏は出身地である静岡県において、ウミガメの生態と民俗のかかわりを取り上げて分析している。筆者は大学院の修士論文において、「龍燈伝説」という海辺の聖地や信仰について取り上げた。博士課程においては、より具体的な民俗を通して、海辺の信仰について考えたいと思案していた。こうしたとき、以前に拝読していた野本氏の論考を思い出したのである〔野本　一九九四など〕。自然環境と民俗とのかかわりを考えるという視点は当時の筆者にとって斬新であった。その後、たまたま訪れた徳島県日和佐町（現、美波町）の浜辺で、アカウミガメの産卵を見たとき、野本氏の論考のように、ウミガメを通して日本人の信仰を考えてみようと思いつき、ウミガメに関する調査を開始することになったのである。このように、野本氏によって取り上げられた静岡県のウミガメの民俗は、筆者にとって思い出深い事例となっている。

その後、筆者も静岡県において調査を行うようになり、平成一〇年（一九九八）に伊東市のウミガメの墓、平成一一年（一九九九）に御前崎市のカメ塚とカメの流木について調査を行うことになった。このうち、カメと流木に

ついては全国的にまとめるなかで取り上げた〔藤井　一九九九a〕。さらに、平成一三年（二〇〇一）、一七年（二〇〇五）にも浜松市、沼津市、焼津市などでカメの墓の調査を行ってきたが、静岡県のウミガメの民俗を体系的にまとめることはなかった。このたび、平成二五年（二〇一三）に、御前崎市、伊東市をはじめとして、静岡県において追跡・補充調査をおこなうことにより、静岡県のウミガメの民俗を総合的にまとめておくことにした。

一　先行研究

遠州地方のカメ塚などは、昭和初期から地元でまとめられた伝説の本で取り上げられることがあった〔小山　一九四二〕。しかし、ウミガメが民俗学の重要な対象であるとして注目されるようになったのは、野本寛一氏の調査を契機としているようである。相良町（現、牧之原市）出身で、当時、静岡県立藤枝高校の教師をしていた野本氏は、地元・遠江や全国各地の民俗調査を精力的に行っていた。野本氏がとくに注目するようになったのが、人々の暮らしと自然環境とのかかわりについてであった。野本氏は自身の調査の中で、御前崎町（当時）をはじめ、ウミガメの産卵地での調査を通じて、ウミガメの生態と民俗のかかわりに注目するようになった。自著『生態民俗学序説』では、序章「人と自然」のなかで「赤ウミガメの回遊と信仰」と題して紹介している〔野本　一九八七〕。その後、相次いで、共著の『静岡県・海の民俗誌』、自著の『神々の風景』、『共生のフォークロア』などでも静岡県のウミガメの民俗について取り上げている〔野本　一九八八・一九九〇・一九九四〕。野本氏は、神がカメに乗って海から上陸したという伝説や、大津波の際にカメに助けられた子どもの伝説などに注目し、また、ウミガメの産卵位置と台風の関係の伝承を採集している。とくに、ウミガメの産卵位置と台風の関係の伝承を用いて、漁民にとってウミガメは恩人であり、人とウミガメとの共生関係が生きていると主張する。このような民俗知識と伝説を合わせて考えることで、日本人が強く抱いている常世信仰は観念的なものではなく、毎年、一定の時期に人々の前

に姿を現すウミガメのような生き物から着想されるものであり、常世信仰の基層的実感を抱かせるものとなっていると指摘する〔野本　一九八八・一九九四〕。

野本氏は、昭和六〇年（一九八五）に発足した静岡県史編さん事業にもかかわることになった。民俗部会長は宗教民俗研究の第一人者であった宮田登であり、このほか、伊豆半島のイルカ漁などに関心を寄せる中村洋一郎氏〔中村　一九八八〕、オオカミなど山の動物の民俗に関心を寄せる石川純一郎氏〔石川　一九八七〕なども参加していた。最近、野本氏に直接うかがったところによると、ウミガメなどの環境の民俗に対する関心は、当時の県史編さん室全体で共有されていたという。

静岡県史の民俗部会では、県史の民俗編を執筆するため、特色を有する集落二〇か所を選定し、総合調査を実施して成果を民俗誌として刊行している。このうち、ウミガメの報告が見られるのは、御前崎市の『下岬の民俗』〔静岡県教育委員会文化課県史編さん室　一九九〇〕、焼津市の『石津の民俗』〔静岡県教育委員会文化課県史編さん室　一九九三〕のみである。とくに、『下岬の民俗』では、野本氏ではなく、調査委員や特別調査委員によって、ウミガメの保護、カメ塚、カメノマクラなどが取り上げられている。県史の民俗部会としては、このほか、伊豆では伊東市富戸、西伊豆町沢田などの沿岸集落も調査されているが、ウミガメに関する報告は見られない。

その後、県史民俗編は遠江、駿河、伊豆という旧国の単位でまとめられた。伊豆の民俗をまとめた『静岡県史資料編二三　民俗　一』では、第一編「人と環境」の第二章「自然との対話」に「ウミガメと台風」という項目が立てられている〔静岡県　一九八九〕。この部分は野本氏の執筆である。ここでは、伊豆半島のウミガメ産卵地での聞き取り結果が記述されており、産卵の位置で台風を予測する、産卵に来たウミガメに酒を飲ませて帰す、死んだウミガメを祀った「亀塚」、などの事例が書かれている。口絵写真には八木洋行氏撮影による松崎町のカメ塚の写真が掲載されている。

遠江の民俗をまとめた『静岡県史　資料編二五　民俗　三』には、第一編「人と環境」の第二章「自然との対話」第一節「動物との交流」に「亀」という項目が立てられている〔静岡県　一九九一〕。この部分は野本氏の執筆である。ここでは、御前崎町における産卵、神社の縁起、「亀塚」、カメと流木、浅羽町の「亀の松」、福田町・浜松市の「亀塚」、産卵場所による台風の予測、などの事例が報告されている。また、第五編「人と超自然」第二章「海と山と里の信仰」二「漁業信仰」に「ウミガメを祀る」、「鰹漁とカメノマクラ」という項目が立てられている。この部分は、石川純一郎氏の執筆である。ここでは、福田町や御前崎町のカメ塚、御前崎のカメノマクラについて、聞き取りをもとにしたより詳しい内容が紹介されている。

このほか、『静岡県史　別編一　民俗文化史』には、第三編「民俗の近代」第一章「地域の開発と民俗」の「海浜環境と民俗」で松崎町岩地が取り上げられ、再び岩地の「亀塚」のことが触れられている〔静岡県　一九九五〕。この部分は、野本氏の執筆となっている。なお、『静岡県史　資料編二四　民俗　二』で駿河のウミガメについては触れられていない〔静岡県　一九九三〕。

その後、宮田登は、静岡県史のメンバーが調査してくる成果を背景に、「黒潮と民俗信仰」と題する論考を書いている〔宮田　一九九一〕。これは、宮田自身も書いているように、柳田国男が提唱した寄り物や海洋生物に関する視点に影響を受けている。柳田が海の民俗への問題意識を喚起したあと、この分野での研究は一部の研究者がおこなってきただけであった。宮田は信仰の面から、この問題に取り組んでいる。「黒潮と民俗信仰」のなかで、宮田は「海亀と流木の民俗」という項目を立て、石川純一郎氏が撮影した御前崎市や磐田市のカメ塚の写真を掲載している。宮田は、県史の記述をもとにしながら、列島の寄り物信仰のなかで、静岡県のウミガメの民俗を位置づけて紹介している。(1)

このように、野本氏や静岡県史編さん室ではウミガメの民俗を相次いで取り上げてきた。しかし、ここで取り上

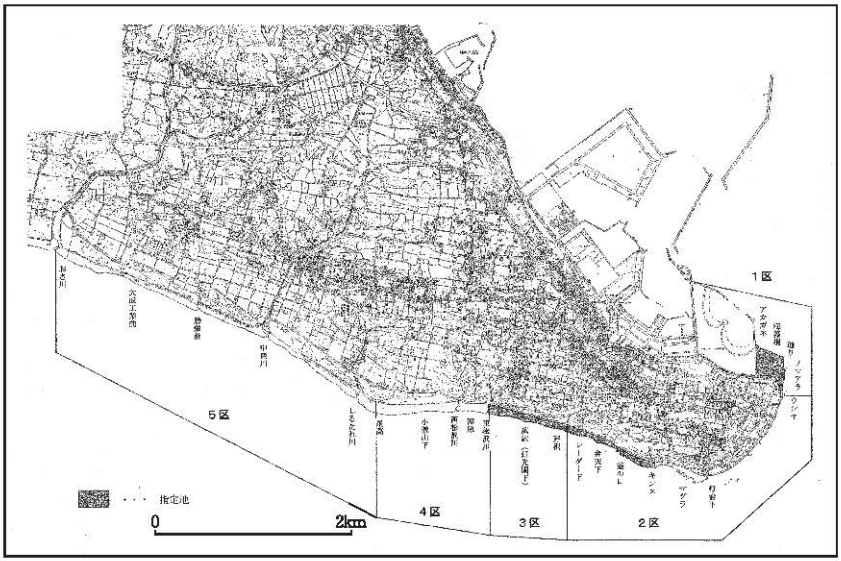
げられたのは、ウミガメの民俗知識、伝説、信仰に関する民俗が中心であった。そのようななか、歴史学者の川崎文昭氏はウミガメの捕獲禁止に関する江戸時代の文書を紹介し、ウミガメの民俗についての再考の必要を主張している〔川崎　一九九九〕。川崎氏は、「人びとの海亀への特別な対応は、単に古くからの海亀観、海亀が常世の国と人間界を往来する動物であり、異郷から人間界かに幸をもたらすとする観念によってのみなされたのではない」とし、「人びとの海亀への対応は生類憐み令によって規制され、同法令廃止後も再び規制強化があり、それを受け入れることによって捕獲、殺生禁止という特別な対応をしてきたといえる」と指摘する。この文書は、きわめて重要な発見であり、川崎氏の指摘も踏まえてウミガメの民俗を再考する必要がある。川崎氏が紹介した古文書については、二章で取り上げることになる。

最近では、東海大学の田口理恵氏が中心になり、魚類供養のデータベースを作成するための全国調査を実施し、静岡県のウミガメ供養塔の事例も取り入れた一覧表をまとめている〔田口　二〇一一〕。このとき、田口氏の学生であった高野梨央氏が、御前崎市の保護活動やカメ塚を現地調査し、筆者の論考も参考にしながら、静岡県のウミガメの文化について卒業論文としてまとめている〔高野　二〇一〇〕[2]。田口氏は、その成果も盛り込んで、御前崎のカメ塚について現代的な視点を入れて、「御前崎におけるウミガメと原発」と題する文書を書いている〔田口　二〇一二〕。

二　遠江のウミガメの民俗

1　御前崎市の概要と遠州灘のウミガメ保護活動

静岡県の遠州灘は日本でも有数のアカウミガメの産卵地となっている。とくに産卵が多いのは御前崎海岸である。これは、産卵に適した砂浜があること、沖合に繁殖に好都合な御前暗礁があること、黒潮が沖合を流れている



地図１　御前崎海岸のアカウミガメ産卵地域（御前崎市教育委員会提供）

こと、などの理由が背景になっているという〔御前崎町教育委員会　一九八三〕。後述するように、遠州灘沿岸で暮らす人々にとっては古くからウミガメが産卵することは知られていた。そのなかでも、産卵を観察・保護しようとする動きが出てきたのは、とくに産卵が多い旧御前崎町であった。今後の説明に大きくかかわるので、ここで、御前崎市の概要について簡単に述べておきたい。

御前崎市は、西から続いてくる遠州灘の東端であり、駿河湾の西端に位置する。遠州灘と駿河湾を隔てる御前崎の岬は静岡県の最南端である。岬の突端地域に旧御前崎村、その西側に旧白羽村があったが、昭和三〇年（一九五五）に合併して旧御前崎町が誕生した。その後も、旧御前崎村は御前崎地区と呼ばれ、上岬、下岬、大山、西側、女岩、広沢の六集落からなっている。旧白羽村は白羽地区として、薄原、中原、白羽、白浜、新神子、新谷の六集落からなっている。御前崎地区は漁業、白羽地区は農業が盛んである。御前崎の漁業は江戸時代からカツオ漁

がおこなわれ、明治時代以降は漁船を大型化して、次第に遠洋に漁場を求めて出漁するようになった。御前崎地区でも、駿河湾に面した下岬、大山、西側、女岩は漁民が多く住み、人家が密集する集落を形成していた。上岬は灯台付近の台地に位置しており、漁業従事者もいるが、農業も盛んである。旧御前崎町は、平成一六年（二〇〇四）に、さらに西隣の旧浜岡町と合併し、御前崎市となった。旧御前崎町は漁業の町として知られていたが、昭和四〇年代をピークに漁獲高が減少し、漁船や漁業従事者の数も減少している状況である。一方、旧浜岡町には中部電力浜岡原子力発電所が建設された。昭和四六年（一九七一）から工事が開始され、昭和五一年（一九七六）に運転が開始されている。現在、御前崎市全体の生業は、漁業よりも原発と農業、さらに周辺地域の会社への通勤などに比重が移ってきている。

写真１　御前崎地区女岩・西側付近（2013年8月撮影）

写真２　御前崎地区下岬の畑（2013年3月撮影）

御前崎市域では、古くからアカウミガメが産卵していたが、保護の動きが起こってきたのは近年になってからである。昭和二九年（一九五四）に刊行された『御前崎村誌』には、駒形神社の伝説としてカメのことが触れられているのみで、海岸や砂浜の説明はあるものの、ウミガメの産卵については記述がない〔大沢　一九五四〕。ただし、現

写真３　御前崎海岸（駿河湾側）（2013年３月撮影）

写真４　広沢の海岸（2013年３月撮影）

在、御前崎周辺でよく目にする「亀まんじゅう」は、かめや（旧浜岡町）の初代店主が昭和二四年（一九四九）の正月に、正月飾りとしてカメ形のまんじゅうを作ったのが最初であったという[3]（写真６）。このように、ウミガメは現在のように御前崎観光の目玉になるようなものではなかったが、人々にとってなじみぶかい生き物であったと思われる。

旧御前崎町でのウミガメ保護活動が開始された経緯については、御前崎市教育委員会にも記録がなくはっきりしたことは分らない。教育委員会に伝わっていることなどから判断すると、昭和四四年（一九六九）に御前崎小学校に赴任した教師の河原崎芳郎氏が関心をもったことがきっかけになっているようである[4]。ウミガメの保護監視は昭和四六年ごろから開始され、昭和四七年（一九七二）、旧御前崎町教育委員会がウミガメ保護監視員を委嘱してから本格的になった。町がウミガメの保護活動を開始した理由は、「①カメの生態及び卵の保護研究をすすめる、②産卵場所としての海浜砂地の確保、③沿岸魚族の増殖、④海中海底の汚染防止」であった〔御前崎町教育委員会一九八三〕。

御前崎におけるウミガメ保護活動は、このようにウミガメそのものへの関心や、保護という側面のみならず、当時大きく変化していた沿岸部の環境変化に対する、町や一部の住民たちによる危機感が影響しているようである。昭和二〇年代までは、駿河湾側の女岩付近でも人家の近くまで砂浜が広がっていたが、昭和三〇年代には大規模な御前崎港が整備され、臨海道路も昭和三八年（一九六三）度に完成し、女岩付近の砂浜は姿を消した。現在、駿河湾側では、岬の先端に砂浜が残っているが、漂着物なども散乱している。遠州灘側も、昭和四〇年代から浜岡原発に通じる道路が建設されたこともあり、砂浜の奥行は狭くなっている。筆者の聞き取りでは、かつては広かった砂浜がなくなってきたことに対する嘆きがしばしば聞かれた。昭和四〇年代から砂浜が狭くなってきたという。ある方は、天竜川の上流にダムができたことによって天竜川から砂が流れてこなくなったからであるといい、別の方は原発道路ができてから砂浜が減っていった、と語る。ウミガメの保護は御前崎の外からやってきた教師が関心をもったことがきっかけであったようであるが、急速に変化してきた御前崎の環境に対する危機感が、御前崎の人々をウミガメ保護に向かわせたと思わ

写真5　御前崎港（1999年2月撮影）

写真6　「亀まんじゅう」(2013年2月撮影)

写真７　天然記念物の看板（2013年２月撮影）

写真８　御前崎の孵化場（2013年８月撮影）

れる。

旧御前崎町が主導して産卵頭数の調査と保護監視活動がおこなわれた結果、産卵頭数の数字が蓄積され、昭和五二年（一九七七）三月には県の天然記念物に指定されることになった。昭和五二年夏には、教育委員会からの提案を受けて、御前崎小学校教師の河原崎芳郎氏が小学校の五・六年生に呼びかけ、ウミガメ観察クラブを結成し、産卵の保護観察を指導することになる。このころから、台風による砂の流失やタヌキの食害から守るために、卵を自然孵化場に移植する取り組みもおこなわれるようになり、小学校の観察クラブでは孵化器による人工孵化に成功している。アカウミガメが集中的に産卵する北限地であることと、長年続く保護活動が認められ、昭和五五年（一九八〇）三月には、「御前崎のアカウミガメ及びその産卵地」として国の天然記念物に指定されることになった〔上島　一九八〇、御前崎町教育委員会　一九八三、御前崎市教育委員会　二〇〇五～二〇一三〕。

その後、保護活動は整備され、御前崎海岸を五区に分けて、御前崎市教育委員会から委嘱された保護監視員が担当区域を巡視し、上陸・産卵頭数の確認調査などをしてきた。このうち、一区は駿河湾に面しているが、二区から

五区は遠州灘に面した海岸となっている。一区から三区は天然記念物の指定地であるが、四区と五区は指定地外となっている。平成二〇年度からは、旧浜岡町の浜岡海岸においても、ウミガメ保護監視員による保護活動を開始した。昭和四七年に二名であった保護監視員は、次第に人数を増やし、平成二四年（二〇一二）には御前崎海岸四名、浜岡海岸三名となっている（御前崎市教育委員会　二〇〇五～二〇一三）。

保護監視員は、毎年五月上旬から毎朝、担当区域の海岸巡視をし、採卵し、孵化場へ移植・埋卵をおこなっている。昭和五九年（一九八四）に、常設の孵化場を建設し、平成二〇年（二〇〇八）には孵化場が改修されている（写真8・9）。保護監視員は、移植後は、孵化場の砂に毎日水をかけて、熱くなりすぎないようにしている。おおよそ二か月後、孵化場で孵化した子ガメは、保護監視員の手で海に放流される。保護監視員は、観光シーズンと重なる上陸・産卵のピーク時における夜間のパトロール、ウミガメに関する記録や調査、海岸清掃をおこない、さらに、産卵観察会、放流観察会を実施している（御前崎市教育委員会　二〇〇五～二〇一三）。

写真9　孵化場で孵化した子ガメ（2013年8月撮影）

このほか、御前崎小学校では、現在でも、孵化が遅れた子ガメを保護監視員から預かり飼育している。御前崎中学校では、平成七年（一九九五）ごろから、「亀バックホーム大作戦」と称する、産卵時期の海岸清掃を行っている。

保護活動によって明らかになっている御前崎海岸でのアカウミガメの生態的特徴を簡単にまとめておく。上陸・産卵は、五月下旬から八月末、ときには九月初めまでみられる。上陸は二一時から四時の間に

写真10　袋井市付近の遠州灘（2013年3月撮影）

多い。一回の産卵で平均一二〇個ぐらいの卵を産む。保護活動開始後は、御前崎海岸での上陸頭数としては毎年一〇〇頭以上の年が多く、平成三年（一九九一）の五一五頭が最も多い。産卵頭数は、昭和六三年（一九八八）の二七三頭が最も多く、一〇〇頭前後の年が多い。平成二四年（二〇一二）には、一区での上陸が一八四頭であり、この年の御前崎海岸の上陸頭数の約五〇パーセントを占めている。浜岡海岸での上陸・産卵頭数は御前崎海岸よりも少ないが、平成二四年には上陸頭数が一六一頭、産卵頭数が九一頭となっている〔御前崎市教育委員会　二〇〇五～二〇一三〕。なお、漂着については、まとまった統計は見当たらないが、毎年、一〇頭ほど漂着しているという。

御前崎以外の遠州灘一帯でも、保護活動がおこなわれている。平成四年（一九九二）には湖西市でカレッタ君のふる里を守る会が結成、平成九年（一九九七）から旧相良町（現、牧之原市）でカメハメハ王国が結成、それぞれ調査をおこなっている。また、浜松市では表浜ネットワークが調査をおこなっている。

2　民俗知識

それでは、ウミガメの保護活動がおこなわれる以前、沿岸部の人々は、ウミガメについてどのようなかかわりや知識があったのであろうか。ウミガメの産卵に関する民俗知識については、野本寛一氏が関心をもって採集している。御前崎市（旧浜岡町）合戸では、台風が来そうなとき、カメの卵を探り、その位置よりも上まで船を上げたと

いう。台風が多い年、強い台風が来る年は、カメはより奥の砂地に卵を産み、台風の来ない年には渚近くに卵を産むという〔野本　一九九四〕。このほか、地曳網が盛んであった掛川市大東町大浜でも、台風が近づくとウミガメの産卵場所を確かめて、それより陸に網船を引き上げたという〔八木　二〇〇七〕。

このほか、御前崎のウミガメに関する記録のなかには、人々が知っていたウミガメに関する知識が散見される。昭和四八年（一九七三）から五四年（一九七九）まで保護監視員をしていた松林甚一氏は、自分が若いころ（昭和初期）には、御前崎海岸は砂浜が一〇〇メートル近くあって、一晩に一〇頭以上のウミガメが上陸していたと語っている〔上島　一九八〇〕。また、漁民の話によると、御前崎暗礁付近で、交尾しているのを見かけるという〔松林　一九八八〕。昭和五五年（一九八〇）から六一年（一九八六）まで保護監視員をしていた松林久蔵氏が、潜水歴五〇年という増田定平氏から聞いた話によると、潜水夫にとっては、御前崎暗礁付近では岩陰でいつも大きなカメが寝ている、春先に潜っていたとき大きなカメが覆いかぶさってきて危険を感じて海面へ逃げた、などの知識や体験談があるという〔松林　一九八八〕。御前崎の沿岸で越冬するカメ（おそらくアオウミガメ）がいることを漁民たちは知っていたようである。

筆者も御前崎市において、保護活動がおこなわれる前から人々がウミガメについて知っていたことを聞き取りした。

御前崎地区女岩の小野田市雄氏（昭和四年生まれ）・ふさ氏（昭和六年生まれ）夫妻は以下のように語る。

海のカメはカメという。オカのカメはドウショウという。カメとはいわない。大事にしない。子どもが山で拾ってきて遊ぶ。食べることはない。

ウミガメと淡水のカメを区別している。ただし、ほかの方からもアカウミガメやアオウミガメというウミガメについての区別は聞けなかった。

上陸・産卵頭数が多かった御前崎地区下岬の下村甚市氏（大正三年生まれ）・和子氏（昭和一九年生まれ）親子は、カメの産卵について以下のように語る。

よくカメが上がった。カメの上がる数は多かった。カメの上へ乗った人もいた。朝まだカメがいることがあった。カメがまだいるといって、和子氏は坂をかけおりて見に行ったこともある。マリンパークのところはずっとカメが上がった。孵化場のすぐオカに下村家の畑があった。芋の畑の中へカメが入って蔓にからまって出られなくなっていた。出してやった。和子氏は芋を掘りに行ったときも、子ガメが海に向ってはい出していくのを見た。小学校のころだった。土手があったのに、それを越して畑へ入って、内側に卵を産んでいた。畑はやわらかい砂。カメが畑へ入るのを喜ぶことはなかったが、いやがることもなかった。

台風が来る年はオカへ産むという。海に向って出やすいところに産んでいる。沖に岩があって、波をよけてくれるところを選んでいる。駿河湾側に上がるカメが多かった。遠州灘は岩場がないので少なかった。

駿河湾のほうで産卵が多かったことがうかがえる。同じく下岬の服部巽氏（昭和四年生まれ）は以下のように語る。

産卵に上がって、畑の中に入り、出られなくなったカメもいた。棒でこじて海に返してやった。

このように、ウミガメがサツマイモの蔓にからまることはしばしばあったようである。御前崎地区下岬在住で白羽地区出身の松林千寿代氏（大正一五年生まれ）は以下のように語る。

ずっと砂浜だった（奥行があった）。子どものとき、海に入るまで、砂浜が熱くて飛んで入った。カメは多くて一五〇個ほど、少なくても八〇個ぐらい卵を産む。一晩に一〇ぐらい上がった。尾高（白羽地区）によう上がった。大きいカメは三尺四方あった。子どものときカメをまたいだ。産みに来るのは早くて夜の一〇時ぐらい。足跡があるので、それをたどっていくと、山の所に掘ったあとがある。きれいに叩いて、砂を平らにして、

草をかぶせている。浜へ上がったカメは日が当たると、いごけん（動けない）ようになるので、押し出してやったと聞いた。船に乗っているとき、カメが浮いてるのを見たと聞いたことがある。船で見るのは珍しい。

遠州灘側でも産卵はみられたことが分かる。しかし、白羽地区でも、すべての人がカメの産卵を見ていたわけではない。白羽地区白浜の増田昭子氏（昭和二年生まれ）は以下のように語る。

カメは灯台の下から下岬のほうにきた。見たことはない。ここらは知らない。尾高（白羽地区）には上がった。お百姓の衆はカメにそれほど関心ない。漁師は藁をもつかむ思いで、カメを頼みに行ってくるかと行った。神頼み。白羽は農業どこ。漁業は地曳網だった。

御前崎地区西側の神代邦夫氏（昭和二一年生まれ）は以下のように語る。

五、六歳のころ、カメが上がった。子ガメをバケツに入れて持ってきた。必ず海のほうに行くと聞いていた。本当に海に向いて行った。

以上のように、昭和四〇年代に保護活動が開始される前にも、御前崎市の人々はウミガメの産卵について日常生活のなかで接することがあり、見守り、ある程度の知識を持っていた。

3　伝説

御前崎市御前崎地区の駒形神社には、神がカメに乗ってやってきたという縁起がある。『ウミガメのふるさと御前崎』などには以下のような縁起が記されている（御前崎町教育委員会　一九八三）。

①御祭神は伊豆から馬で海路を渡ってきた。御前暗礁付近で馬が疲れて海に没したため、神はカメに乗って御前崎に上陸した。駒形様が御前崎にたどり着いたとき、あたり一面は綿の原であった。

②駒形様はワニガメの姿で陸に上がったところ、綿のトゲで目を突いてしまった。それで、御前崎生まれの者

は目が片方小さい。（筆者要約）

この縁起に注目した野本寛一氏は、『生態民俗学序説』などで、「この極めて単純な伝説には、生態民俗学的に見て見逃しがたい問題が含まれている」として、しばしば取り上げている〔野本　一九八七〕。ほぼ同様の伝説は『御前崎村誌』にもみられるが、ここには②の伝説は見当たらない〔大沢　一九五四〕。『御前崎村誌』には、カメが遅かったので、神が「チャッチャッと渡れ」と言ったといい、最初に上陸したところを先社（さっちゃ）と呼ぶ、とある。また、『御前崎町史』には天正五年（一五七七）に書かれたという「駒形明神之縁起」が引用されている〔御前崎町　一九九七〕。ここには「古伝」によるとして、天竺の国の王子が一〇〇頭の馬を船に乗せて熊野

写真 11　駒形神社（2013 年 2 月撮影）

写真 12　駒形神社の神札

に着いた。本宮権現から東に有縁の地があると教えられて着いたのが御前崎であるという。船から馬を陸揚げしようとしたとき、ウミガメが出てきて馬をすべて海中に引込んだ。この部分は、「忽海亀化出して駒を奉道引とて手綱を取て引連悉く駒を海中に引込」と書かれている。その馬が岩になって御前崎の沖に並んでいるという。この縁起は和歌山県の熊野三山の縁起（「熊野の本地」）に類似しており、熊野信仰の影響が考えられる。

筆者も御前崎においてウミガメの民俗について聞き取りをすると、たしかに神がカメに乗って上陸したという伝説は複数の方の語りから出てきた。御前崎地区大山の沢入康夫氏（昭和一〇年生まれ）は以下のように語る。

駒形神社の神は伊豆から九九匹の馬にまたがってやって来たが、御前崎の手前まできて沈んでしまった。それが今の御前岩である。そこから神はカメの背中に乗って御前崎に渡った。

写真 13　御前崎から伊豆半島を望む（1999 年 2 月撮影）

御前崎地区上岬の松林千寿代氏（大正一五年生まれ）は、「駒形様はカメに乗ってたどりついたという。御前崎の衆はカメを大事にする。」という。御前崎地区女岩の小野田市雄氏（昭和四年生まれ）・ふさ氏（昭和六年生まれ）夫妻は、「駒形神社の神様がゴゼンの島からカメに乗ってたどり着いたといういわれがある。御前崎ではカメを大事にした。」という。

以上のように、筆者の調査では、『ウミガメのふるさと御前崎』で取り上げている②の伝説や、『御前崎村誌』のカメが遅かったという伝説、『御前崎町史』記載の内容については聞くことができなかったが、駒形神社の神はカメに乗って海から上陸したという伝説は広く知られ

ているようである。なお、御前崎からは晴れた日には、海の向こうに伊豆半島がよく見える（写真13）。

現在、駒形神社では、伝説をもとにして、カメに乗った神の姿を描いたお札が販売されている（写真12）。平成一一年（一九九九）当時宮司であった服部巽氏によると、明治一九年から三一年に在職した宮司がこのお札の版木を作ったという。

御前崎以外にもウミガメの伝説がみられる。袋井市浅羽町西同笠の伝説は、津波の際にカメを祀ったというものである。この伝説は、『静岡県・海の民俗誌』、『神々の風景』、『静岡県史　資料編二五　民俗　三』で取り上げられており〔野本　一九八八・一九九〇、静岡県　一九九一〕、平成二一年（二〇〇九）には高野氏も調査している〔高野　二〇一〇、田口二〇一一〕。さらに、野本氏は東日本大震災後にも、津波の伝説としてこの事例を紹介している〔野本　二〇一三〕。カメの姿に似た大きな松は、野本氏の調査時には存在しており、『静岡県・海の民俗誌』、『神々の風景』には写真が掲載されている。しかし、平成二一年（二〇〇九）に高野氏が訪れた際には、すでに初代の松は枯れて、二代目の松が植えられていた。筆者が平成二五年（二〇一三）三月に訪れた際にも、二代目の松があった（写真14）。松の横には、初代の松で作った机が設置されていた。この松の伝説は松の前の説明板にも書かれており、野本氏もこの文章を引用している。簡潔にまとめると以下のようなものである。

今から六〇〇年ほど前、大地震によって津波が村を襲い、多数の村人が行方不明になった。村一番の好青年も妻と幼い子が津波にさらわれた。嘆き悲しんだ青年は、村の鎮守に祈った。その夜、家に帰って床についたと

写真14　カメの松（表1 No.6）（2013年3月撮影）

き、美女が訪ねてきて、あなたの子どもが海辺にいるから案内しましょう、という。青年が女の案内で海辺まで来ると、女は消えてしまった。そこには、流れ着いた木端の山があり、その上に行方不明であった子どもの姿があった。その木端の下には大きなカメが死んでいた。妻が津波の中でカメに化身して我が子を助け、鎮守の神が木端で子どもを守ってくれた、と男は感謝し、一本の松を植えてカメを葬り、木端の一部を鎮守に祀った。その後、松はカメの姿に似ているため、カメの松と呼ばれ、漁師が船で伊勢参りをするときには船の安全を祈ったという。（筆者要約）

現地に立っている説明によると、六〇〇年ほど前であるといい、永和年代（一三七五～一三七九）のことか、と記されており、野本氏などもそのまま引用している。しかし、六〇〇年ほど前に袋井市付近の遠州灘沿岸を大津波が襲ったのは、明応七年（一四九八）八月二五日の明応地震のときであった。また、時代は下がるが、安政元年（一八五四）一一月四日の安政東海地震のときにも大津波がこの地域を襲っている。あくまで伝説であるために、検証はできないが、本稿では明応、もしくは安政の津波のときを想定しておきたい。

このほか、浜松市にも、津波の際にウミガメによって助かったという伝承がある。『庄内地区愛称標識　なまえとその由来』（愛称標識設置委員会　一九九二）、『わが町文化誌　碧い湖と緑の半島庄内』（浜松市立庄内公民館・わが町文化誌編集員会　一九九五）には、次のような言い伝えが記されている。

昔、浜名湖のほとりにあった堀江村に大津波が襲った。そのとき、一匹のカメが手招きしているのを見つけた村人たちは、カメのおかげで無事に避難できた。カメに助けられた人たちは喜び、カメに酒を飲ませて帰した。数年後、そのカメが病にかかりこの地にたどりついた。村人は助けてくれたお礼に介抱したが死んでしまった。そのカメを祀ったのがこのカメ塚である。（筆者要約）

浜松市館山寺町には文政五年（一八二二）に建立されたカメ塚が残っている。供養習俗の項目で取り上げるが、

カメ塚の石碑には碑文が刻まれている。この碑文には漂着したカメを埋葬したということだけ記されており、津波の際に助けられたという内容はみられない。しかし、カメに助けられたという伝承は相当古いものであるようである。江戸時代、佐浜村庄屋であった古橋家の文書（「浜松藩領佐浜村庄屋古橋家文書」）には、「彼大雨洪水之時、雖二郡没崇神仏之威力依、亀任為知随古板漸漂游此里実得天命廻出シ」と記されている。[5] 洪水の際にカメのおかげで助かったというのである。これは、永正九年（一五一二）に書かれた文書の控えに記載されている。[6] ここでいう「大雨洪水」とは、永正七年（一五一〇）六月であるとし、同年八月には地震により浜名湖と海がつながって「今切」ができたとある。古橋家が浜名湖の北の方へ移住したのは明応七年（一四九八）の大津波のときであったという説もある〔浜松市立伊佐見公民館・わが町文化誌編集委員会　一九九七〕。『静岡県史　別編二　自然災害誌』によると、明応七年八月二五日の明応地震と、永正七年八月二七日の高潮災害によって、浜名湖の入り口が大きく開いたという〔静岡県　一九九六〕。また、永正七年の高潮被害のことを津波と書いている記録もあるという。いずれにしても、古橋家の先祖は、明応の大津波もしくは永正の高潮の際にウミガメの勧めにしたがって、浜名湖の東北部沿岸に漂着して住み着くようになったという言い伝えとなっている。

写真15　浜名湖（2007年5月撮影）

さらに、『近世善悪華報録』という江戸時代の仏教説話集にもカメに助けられた話が出ている〔菊池　一九九八〕。この説話集は、熊本延寿寺の月感が編集したもので、遠江のカメの話は、慶安年中（一六四八～一六五二）に起こったできごとを、明暦二年（一六五六）に聞いたという。以下に引用しておく。

某甲雲州ニ逼塞ノ中明暦二年ノ春予カ伴尊悦上京セシムルニ備之前州ノ内片神ト云町ニ一宿セリ亭主市郎兵衛悦ニ語テ云慶安年中ニ商売ノ為ニ江府ヘ趣ク時遠州前ヘ坂ノ入江ノ浜ニテ有テ人ト海敝亀ヲ一頭提テ帰ルニ逢リ当日ハ某甲ガ父ノ命日ニ当リケルユエ買取テ海ニ放チケリ翌年上京セシ時キ件ンノ江ヲ渡ルニ俄ニ悪風起テ予カ乗シ舟ヲ覆合舟ニ人モ不残死タリ我命モ危カリシニ忽ニ潮ノ中ニ岩ノコトクナルモノ浮来レリ予則陞レリ見レハ敝亀ノ集リ重ナルニゾ有リケル漸々岡ヘ近キテ了ニ浜ニ上リヌ其ノ群敝亀ハ散リ沈テ見ズナリニキ只タ一頭ノ□ノミ残リ居テ頭ヲ出シ暫ワレヲ□□□□□テ居沈ミ失ケリコレ則チ予□□□□□ヘキト必セリト語リケリ悦下国シテ予□告ケリコノ感唐ノ毛宝カ放テル亀ノ縁ニ能ク似。

備前（現、岡山県）の人が、江戸に行く途中、遠江の前坂の浜（現、浜松市西区舞阪町）において、ウミガメを持ち帰る人に出会い、カメを買い取って放したところ、翌年に同地で遭難しかけたとき、ウミガメの群れが現れて助かったという内容である。「悦ニ語テ」とあるから、話者の市郎兵衛は月感に興奮した様子で語ったと思われる。遠い昔の説話ではなく、実際にカメにつかまって助かったという人物からの聞き取り内容を書いているために貴重な記録といえる。月感が述べているように、カメに助けられるという説話は、中国にも類話がある。しかし、日本でも『日本霊異記』や『今昔物語集』にも類話がある。いずれも、以前にカメを助けていたためにカメに助けられるという報恩説話となっている。ところが、南西諸島には、カメを助けたためにカメに助けられるという「報恩」ではなく、とくに理由はなくカメに助けられる伝承が多数みられる〔藤井　二〇一二c〕。ウミガメに接触する機会が多い地域では、現実味を帯びて語られる伝承となっている。『近世善悪華報録』の内容は、遠江ではそれだけウミガメと出会うことが多かったということも示しているといえよう。

このほか、掛川市南西郷には、江戸時代に亀甲村という地名があった。享和三年（一八〇三）に成立の『遠江古蹟図絵』には、以下のような伝説が記されている〔神谷　一九九一〕。

天文二十年壬辰、当時の開山海辺に至り、漁師一疋の亀を捕り殺さんと云ふ。この僧参り合ひ値を出し亀を求め、海に放ち、経を読みて寺に帰る。その夜、住持の夢に彼の亀来りて告げて曰く、今日、貴僧の助けに逢ひし亀なり。この謝礼に、明朝また海辺に来たまへと告ぐる。夢覚めて始めの海辺へ行き見れば、遥か沖より亀一疋およぎ来り、甲に観世音の霊仏を一体のせ来り、僧の前へ直す。取上げよく見れば、黄金にて鋳し仏なり。これ全く龍宮より到来せし仏なりとて寺に持ち帰り、そのまま本堂に安置す。それゆゑに村を亀甲村と云ふ。天神の宮地に有れば、今は天神の宮へ入れ、一所に安置して前立の尊像となす。俗、これを唱へ違へて亀甲天神となづけ、天神の像、亀の甲に乗りしと心得居る。まことは亀の甲観音と唱へてよし。

天文二〇年（一五五一）、カメを助けた僧侶が、カメが持ってきた観音を祀るようになったという伝説である。この僧侶がいた寺は、長福寺という真言宗の寺院であったが、江戸時代には万福寺という曹洞宗の寺院になっていた。現在はこの寺はない。亀甲村は掛川市の市街地に近い場所であるため、僧侶がカメに出会った浜辺は掛川市周辺の遠州灘であったと思われる。

4　食用習俗

御前崎では、江戸時代にウミガメを捕獲することがあった。先述した『近世善悪華報録』によると、（現、浜松市西区舞阪町）の人が、ウミガメを持ち帰ろうとしていたとある。これは慶安年中（一六四八～一六五二）のことであった。また、伝説ではあるが、『遠江古蹟図絵』によると、天文二〇年（一五五一）にも掛川市付近でカメを捕って殺そうとしていた人がいたという。これらは特別な例ではなく、遠江の沿岸部では中世から近世にかけて、ウミガメを捕獲し食用にする習俗は広がっていたと考えられる。また、御前崎では、江戸時代にウミガメ捕獲禁止令が少なくとも二回出ていることから、それだけウミガメ捕獲は盛んであったことがうかがえる。川崎文昭氏が紹

介した文書のうち、ウミガメに関する部分のみ引用しておく〔川崎　一九九九〕。

「指上申手形之事」

一　海亀取申義堅ク御法度被仰渡、得其意候、今より以後沖ニても又者くがへあがり候かめ一切ころし申間敷候事

「一札之事」

海亀殺候事堅御禁制之趣御申付承知仕候、沖ニ而亀取候義ハ不及申、陸江上り申節殺候事堅仕間敷候、若隠候而亀殺候事御聞及被成候ハゝ本人之儀者不及申、五人組共ニ何分之越度ニ茂御申上可被成候

一　亀殺候者見付候ハゝ早々御注進可仕候、為御褒美銭三百文可被下旨是又承知仕候、為後日一札如件

前者は貞享五年（一六八八）八月二八日、後者は寛延三年（一七五〇）六月一五日の文書である。前者は、遠州榛原郡上御崎村の組頭や小前百姓たち四九人が連名して、上御崎村の本郷であった榛原郡地頭方村（現、牧之原市）の庄屋など村役人に提出した請書となっている。幕府が出した生類憐み令に関するもので、五か条になっている。前半には犬や馬に関する一般的な条項が並んでいる。川崎氏も指摘するように、生類憐み令に関して、ウミガメを対象とした条文があるのは珍しい。

後者の文書は、上御崎組組頭以下五九名、下御崎組組頭以下三九名の合計九九人が連名で、地頭方村の庄屋に提出したものである。ウミガメの殺生禁止を順守し、殺生した者を見つけ次第届け出ることを約束し、その際には褒美の銭をもらうことが書かれている。宝永六年（一七〇六）の徳川綱吉の死去によって、生類憐み令は廃止されているため、この一札は生類憐み令との関係はないと思われる。また、貞享の文書は、犬や馬と並んでウミガメ捕獲が禁止されていたが、寛延の文書はウミガメのみの禁止令となっている。

以上二点の文書からは、以下のようなことがうかがえる。江戸時代中期までは御前崎でウミガメを捕獲し、食用

にすることが行われていた。捕獲方法としては、海上での捕獲と上陸した際の捕獲があった。[7] 一度禁止令が出されても、隠れて捕獲する者があった。

しかし、御前崎のウミガメ捕獲はなくなったわけではなかったようである。明治時代の記録にもウミガメを食用にした資料がある。明治三六年（一九〇三）、大阪市天王寺で開催された第五回内国勧業博覧会において、静岡県からは「鮑缶詰」とともに「正覚坊缶詰」つまり、ウミガメの缶詰が水産加工物として出陳されている〔藤原一九七三〕。[8] これを出したのは、御前崎村の下村勝次郎であった。下村勝次郎は、明治三〇年（一八九七）から三八年（一九〇五）に御前崎村の村長をしており、また、静岡県において初めてとなる機械船（駒形丸）を明治四〇年（一九〇七）に造船した人物である。ウミガメの缶詰がどの程度継続したのかは不明であるが、御前崎の漁業発展に尽力した村の中心的な人物が、ウミガメの加工品を生産していたということになる〔大沢　一九五四、御前崎町　一九九七〕。

このように、御前崎では明治時代までウミガメを食用にすることがあった。しかしながら、聞き取り調査ではウミガメを捕獲したり、食用にしたという事例は確認できなかった。筆者が御前崎市で聞いたところでは、カメは神様なので、絶対に食べない、という語りが多かった。ただし、御前崎市の漁民も、他地域の漁民との交流でウミガメを食べる習俗があることは知っていた。たとえば、小笠原の船にも乗ったことがある御前崎地区女岩の小野田市雄氏（昭和四年生まれ）によると、「小笠原ではカメを食べる。御前崎の衆は知らんふりをしていた。」と語る。夫が漁師をしていた御前崎地区上岬の松林千寿代氏（大正一五年生まれ）によると、「カメは小笠原の人が食べた。殺すと罰が当たると、その人は怒られた。」という。昭和時代には、御前崎ではウミガメを食べることは知っていても、食べようとしなかったようである。

聞き取り調査で確認できるのは、卵の食用である。野本寛一氏は、ウミガメの卵を茹でて食べる習慣があったこ

とも報告している。ただし、ひとつの産卵した穴からすべての卵を採り尽くすことはなく、せいぜい全体の半分を採って、余りはもとのように埋めておいたという〔野本　一九八七〕。

筆者の調査でも、御前崎市の複数の方から卵を採って食べたという話を聞いた。白羽地区中原の増田義雄氏（大正七年生まれ）は、「昔は掘って食べた。カステラへ入れると聞いた。」と語る。御前崎地区上岬（白羽地区出身）の松林千寿代氏（大正一五年生まれ）は以下のように語る。

子どものころは卵を採った。卵はみんな掘りに行った。女の子も行った。カーバイトをつけて夜に行った。なかには売った人もいる。白身は煮ても固まらん。黄身だけ出してやると半熟になった。いいカステラができるといって売る人もいた。卵は臭かった。自分はあんまり食べなかった。

御前崎地区大山の沢入康夫氏（昭和一〇年生まれ）は、「卵は戦後、値がよく売れた。お菓子の材料にも使った。カステラなどにも混ぜた。」という。御前崎地区下岬の下村和子氏（昭和一九年生まれ）も、「カメの卵はおいしかった。すごい濃い黄身。」という。白羽地区新谷の高塚清氏（昭和二二年生まれ）からは、野本氏の聞き取りと同じように、卵を半分残したという話を聞いた。

松林になっていて、カメは越えて卵を産んだ。卵を採って食べた。近所のおじいさんが、朝採って配ってくれた。近所、親戚に配っていた。卵は一〇〇ちょっとある。全部は採らなかった。半分ほど残した。利口で採り切ることはしなかった。とりの卵がないので食べた。生で食べたり、半熟で食べたりした。ゆがいても固まらんという覚えがある。おいしかった。食べるもんがないので。カメはここにもけっこう上がった。岬とここに上がった。

白羽地区新谷の高塚みち氏（昭和二年生まれ）・高塚みさ氏（昭和一〇年生まれ）は以下のように語る。

カメを食べることはなかった。卵を採る人はいた。あんまり食べん。ぶよぶよしている。みち氏もみさ氏も食

べたことはない。ここらにも上がった。浜があったので。砂浜がずっとあった。泳ぎに行くのに、砂浜が熱くて駆けた。

ところが、御前崎でも卵を食べないという人もいた。白羽地区白浜の増田昭子氏（昭和二年生まれ）は以下のように語る。

卵を食べたことはない。神様だからもったいないと思う。息子が子どものころ、友達と卵を採りに行きたがった。神様だで、そんなことするもんでないと、やめさせた。卵を採って食べるなんてもってのほか。行くじゃないといった。子ども同士で行くことはあった。

御前崎地区の西側、女岩付近でも食べないという人が多かったようである。女岩の小野田市雄氏（昭和四年生まれ）・ふさ氏（昭和六年生まれ）夫妻は、以下のように語る。

カメは岬の前にきた。この辺りにも来た。市雄氏は卵を食ったことはない。岬（御前崎地区下岬）の衆は卵を食べた。岬は船主がわりあい少ない。女岩は食べない。孫は産むところを見に行った。

西側の松尾長作氏（昭和五年生まれ）は、「卵は食べる人はなかった」、西側の神代邦夫氏（昭和二一年生まれ）は、「カメの卵は食べたことはない。マリンパークよりも向こうには上がった。キャタピラの跡みたいなのがあるから上がったのが分かる。」と語る。増田氏は、白羽地区在住であるが、もとは御前崎地区在住で、夫はカツオ漁船の漁撈長であった。つまり、カツオ漁の役をする家では意識して食べないということがあったようである。地元の人が食べるほか、静岡市や浜松市あたりから買いに来る人もいたようである。

5　放流習俗

網にかかったり、産卵のために上陸したウミガメに酒を飲ませて放すという習俗は遠州一帯に広がっていたよう

である。磐田市福田町では、地曳網にかかったカメに、漁師が酒を飲ませて海に帰したことはたびたびあった〔福田町史編さん委員会　一九九九〕。

このほか、御前崎市のウミガメに関する記録のなかには、ウミガメを放す習俗についても散見される。昭和五五年（一九八〇）から六一年（一九八六）まで保護監視員をしていた松林久蔵氏は、畑のサツマイモの蔓に甲羅が引っかかって動けなくなったカメがいると、地元の人たちがカメに酒を飲ませて海へ戻してやったと語っている〔上島　一九八〇〕。

筆者の調査では、御前崎市において複数の方からこの事例を聞いた。御前崎地区下岬の下村甚市氏（大正三年生まれ）は以下のように語る。

下に船主のお宅があった。そこのおばあさんは、カメが上がると、どんぶりに酒を一杯持ってきて、カメに酒を飲ませていた。帰るときに飲ませていた。漁をするようにやった。よだれを出したり、涙を流したりした。かわいそうだと思った。

下岬の吉村孫俊氏（昭和一七年生まれ）は、「カメは船主の家の衆が酒をくれて帰した。下村の家は船主だった。今の当主の孫ばあさんのとき、カメが上がると酒を飲ませていた。」と語る。また、御前崎市ウミガメ保護監視員の高田正義氏と鈴木紀捷氏も、「下村のおばあさんはカメが上がれば酒を飲ませていた。」という。特定の船主の家のおばあさんがカメに酒を飲ませて放していたことが分かるが、カメに酒を飲ませるのはこの人だけではなかった。

御前崎地区上岬の松林千寿代氏（大正一五年生まれ）は以下のように語る。

連れ合いの親は、カメに酒をくれたら涙を流したという。苦しくて出したか、うれしくて出したか分らない。卵を産みに上がったカメであった。家までは連れてこない。

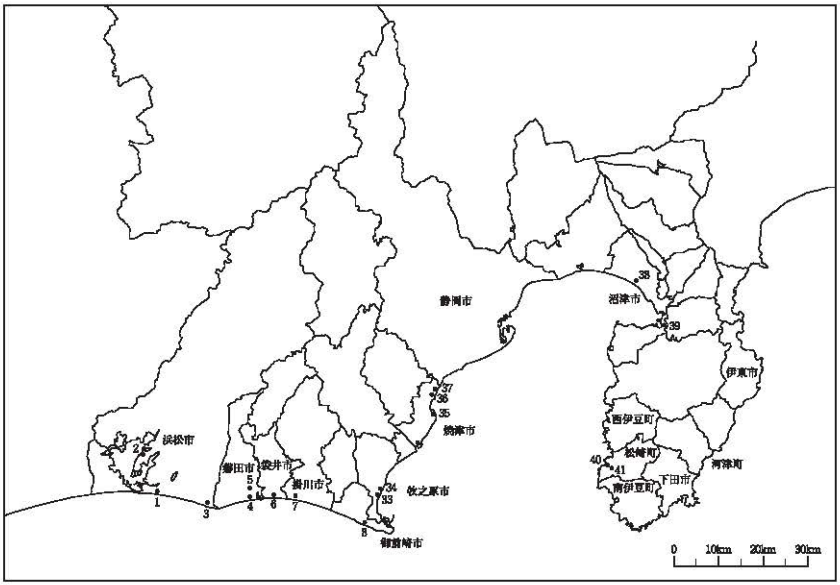
白羽地区中原の増田義雄氏（大正七年生まれ）は、「地曳網に一回カメがかかったことがあり、酒を頭からかけて放したことがある。」という。御前崎地区大山の沢入辰美氏（大正五年生まれ）・由枝氏（大正九年生まれ）夫妻は、「産卵に上がったカメには酒をもっていって飲ませた。酒飲みのことをカメのような、といった。」と語る。御前崎地区下岬の鈴木圓司氏（大正一一年生まれ）は、「上がってきたカメに酒をくれてやって、棒で押し出したこともある。涙を流して帰って行った。」という。白羽地区薄原の小野田武氏（昭和一四年生まれ）は、「卵を産むときつかまえて酒を飲ませたことがある。涙を流すが、それをありがたがって涙を出したといった。」という。白羽地区新谷の高塚みち氏（昭和二年生まれ）・高塚みさ氏（昭和一〇年生まれ）は、「カメは酒が好きという。涙を流すという。苦しくて出すか、うれしくて出すか知らんが。」という。

このほか、中部電力浜岡原子力発電所で聞いたところでは、旧浜岡町でも漁民はウミガメに酒を飲ませて放していたという。

6　供養習俗

a　浜松市

浜松市坪井の東光寺（臨済宗）の境内には、江戸時代に建立されたカメ塚がある（表1 NO. 1、写真16）。この事例は、『静岡県・海の民俗誌』、『静岡県史　資料編二五　民俗　三』、『浜松市石造文化財所在目録』で紹介されている（野本　一九八八、静岡県　一九九一、浜松市石造文化財調査会　二〇〇一a・b）。また、浜松市の「石造文化財調査個票」にも記録がある。[9] 昭和三五年（一九六〇）に書かれた「お寺さん縁起帳」の東光寺の紹介文には、カメの墓については一切触れられておらず、忘れられた存在であったようである。[10]『静岡県・海の民俗誌』には、カメの姿を刻んだ供養碑がある、と記され、『静岡県史　資料編二五　民俗　三』には、カメ形石造物の写



地図２　静岡県のカメ塚・カメの墓（地図中の数字は表１の番号）

真が掲載されている。筆者は平成一三年（二〇〇一）に調査を行った。山門を入ってすぐの六地蔵の横にカメ塚はあった。『静岡県史』の写真では、カメ形石造物が台座に載っているだけであったが、筆者の調査時には、カメ形石造物の背中に六角形の石碑が載っていた。『静岡県史』の写真をあらためて見ると、カメ形石造物の後ろに六角形の石碑が落ちているようである。この六角形の石碑には、以下のような碑文が刻まれている。

南海霊亀碑

文化八辛未八月一日　東光見鎮州誌

爰文化七庚午初秋口夜疾風雷電鳴于空棒雨怒涛鼓於海村浦驚而検点舩楫之次大亀登沙汀偶然而死矣於是奇言遥聞東武乃為主君長久懇需予放追享因命石工彫亀形図経巻負背上以記其乙二而己　銘曰万年之亀被業風吹拘必有死可哀可思

この碑文からは、文化七年（一八一〇）の秋に死んでいたカメを葬り、翌文化八年に供養碑を建立したことが分かる。次に、東光寺の鈴木育子氏

に話を聞いたことを紹介しておく。

坪井は半農半漁の村だった。寺から浜まで歩いて一〇分ほど。あるとき、カメが弱って上がってきた。元気になるように酒をあげたが死んでしまった。なきがらを寺まで運んで埋め、記念に碑を建てた。碑を建てたのは今から四代前の住職のとき。カメは神聖視されていた。カメの背中の石塔は、巻物の経巻を象徴しているという。本か新聞に出ていた。平成七年（一九九五）に本堂を建てたとき、カメの供養塔も移動した。それまでは草むらの中に埋もれていて、忘れられていた。石垣のような段の上に立っていた。日の当たる場所に出してきた。とくに祀ることはない。

写真16　東光寺のカメ塚（表1 No.1）（2001年5月撮影）

鈴木氏の話から、『静岡県史』の調査段階ではカメの供養碑は放置されていたが、その後、移動して目立つ場所に置かれたということが分かった。

・東光寺のカメ塚（表1 NO. 1）

石碑高さ　四五cm
　　幅　一六cm
カメ形高さ　一四cm
　　長さ　四六cm
　最大幅　三五cm

写真17　舘山寺のカメ塚（表1 No.2）（2008年5月撮影）

台座高さ　二二cm

浜松市舘山寺町にも江戸時代に建てられたカメ塚がある（表1 NO. 2、写真17）。この事例については『静岡県史』などには載っておらず、浜松市博物館の宮下知良氏から教えていただいた。地元でまとめられた『庄内地区愛称標識　なまえとその由来』、『わが町文化誌　碧い湖と緑の半島　庄内』や、『浜松市石造文化財所在目録』には取り上げられている〔愛称標識設置委員会　一九九二、浜松市立庄内公民館・わが町文化誌編集委員会　一九九五、浜松市石造文化財調査会　二〇〇一〕。また、浜松市の「石造文化財調査個票」にも記録がある。

筆者は平成二〇年（二〇〇八）に現地を訪れた。浜名湖の湖岸を走る道路の脇にカメ塚はあった。カメ塚は道路から一段低い地面にあり、また、道路脇にはガードレールが設置されているため見つけにくくなっている。カメ塚の前には、「亀塚」と書かれた木の標識が倒れていた。しかし、花筒には新しい花が供えられていたため、参る人はいるようである。石碑には以下のような碑文が刻まれている。

（右側面）

皆文政五龍宿壬午載仲春建立焉

（正面）

古語曰甲虫三百六十而亀為之長且王者之嘉瑞世然而有一亀漂出平堀江渚則不幸而繫于刳腸之湿焉其村中見之雖

有欲救之善子等既己不及惜哉依埋□甲骨而樹之牌以為後鑒有爾

（左側面）

背上法天地玄文五色傳　甲中長□者□六自由全

銘文によると、カメ塚は文政五年（一八二二）春に建立されている。カメが漂着して死んだために埋めたということが分かる。文政八年のカメ塚は、先述した津波と直接関係するものではなく、古くからカメに助けられたという言い伝えがある土地で、たまたま死んでいたカメを祀ったということではないかと考えられる。

・舘山寺のカメ塚（表1 NO. 2）

石碑　高さ　四六cm
　　幅　二二cm
台座　高さ　九cm
枠台　高さ　一九cm

写真18　「正覚坊亀様」（表1 No.3）（2013年3月撮影）

浜松市松島町に「正覚坊亀様」と呼ばれる地蔵が祀られている（表1 NO. 3、写真18）。この由来は、『遠州浜』、『わが町文化誌　太陽と潮風　五島遠州浜』、『浜松市石造文化財所在目録』に紹介されている〔でんでんむしの会　一九八〇、浜松市立五島公民館・わが町文化誌編集委員会編　一九九八、浜松市石造文化財調査会　二〇〇一〕。また、浜松市の「石造文化財調査個票」にも記録がある。この事例についても浜松市博物館の宮下知良氏から教えていただいていた。筆者は平成二五年（二〇一三）三月に調査した。現在、遠州浜団地の東のはずれ

の松林の中に「正覚坊亀様」は祀られている。すぐ東側の道に、「亀様通り」と書かれた木の道標が立っている。コンクリートで作られた祠の中に、地蔵が祀られている。筆者は関係者の話を聞くことはできなかったが、これまで紹介されている内容を要約すると以下のようになる。

昭和二〇年の夏、松島海岸に上陸したカメを若者七人が殺して食べた。ほどなく、そのうちの四人が相次いで怪死してしまい、驚いた仲間が近くの観音堂におすがりした。観音堂（中町にあったが、現在は絶えている。）の当主が供養堂を建てるよう指示し、この地にカメの命を祀った石をすえて供養した。その後、石地蔵を建てて堂を作った。

・「正覚坊亀様」（表1 NO. 3）

地蔵　高さ　四三cm

台座　高さ　三二cm

b　磐田市

磐田市福田町のカメ塚については、『史跡をたずねて　私たちの福田』、『静岡県・海の民俗誌』、『静岡県史　資料編二五　民俗　三』、『福田町史　資料編　民俗』、『海と列島文化』などで紹介されている（福田町史編集委員会　一九八三、野本　一九八八、静岡県　一九九一、宮田　一九九一、福田町史編さん委員会　一九九九）。平成二一年（二〇〇九）には高野氏も調査している（高野　二〇一〇、田口　二〇一一）。

海岸からほど近い向岡集落の寺田家の敷地内に一つのカメ塚がある（表1 NO. 4、写真19）。『史跡をたずねて　私たちの福田』には、曾祖母の時代から祀っていると記される。したがって、江戸時代に作られた可能性がある。この付近は「亀塚屋敷」と呼ばれており、大きな松があった。カメ塚の前の道は、前島や新道などの地曳網の

写真19　寺田家のカメ塚（表1 No.4）（2013年3月撮影）

写真20　観音寺のカメ塚（表1 No.5）（2013年3月撮影）

漁師たちが浜小屋へ通うだけで、あたりは一面、桑畑や川跡の池が残る未開地であったという。カメ塚については、沖で瀕死の大カメを見つけ、あわれに思って、豊漁や安産の願いをこめてこの地に祀ったという〔福田町史編集委員会　一九八三〕。『静岡県史』、『福田町史』の記述もほぼ同じであるが、『福田町史』には、天竜川の堤防が決壊した際、大水でアカウミガメが死んだため、水害のない小高い地に葬り、松の木を植えた、という説もあると記されている〔福田町史編さん委員会　一九九九〕。

いずれにしても、このカメ塚は、漁師が浜へ出る際に通る道端にあり、漁師の海上安全と大漁満足、安産を祈願する塚であったようである。人々は通りがかりや、盆、彼岸などに供養していたという。その後、昭和二四年（一九四九）に、寺田家がこの場所へ引っ越した際、塚が屋敷内に取り込まれることになった。さらに、昭和四二年（一九六七）に、観音寺住職による回向によって、現在のカメ塚の石碑が建てられた。現在はカメ形の上にカメ塚の石碑が載っている。石碑建立時の寺田家の当主は昭平氏であったようである。

福田町福田の観音寺（曹洞宗）の境内にも、寺田家と同じく昭和四二年に建てられたカメ塚の石碑がある（表1 NO. 5、写真20）。刻まれた文字を見る限り、寺田家のカメ塚と形態も建立者もほぼ同じである。ただし、寺田昭平氏の名前のみ、観音寺のカメ塚には見られなかった。先代の住職が建てたものということで、現在の住職の深川一成氏は建立の経緯は詳しくはご存じではなかった。ただし、境内のカメ塚の背後には、「亀塚碑建立のいわれ」という説明板が建てられており、以下のようなことが書かれている。

アカウミガメは、古くから福田の漁師たちの守り神として祭られてきました。福田の海岸へ産卵に来てお産後の疲労で、帰るべき海の方角も分からなくなり松林の中や砂浜の丘であえなく死んだ数多くの海ガメの霊をなぐさめる為と航海安全を祈願して建立されています。（一部のみ引用）

・寺田家のカメ塚（表1 NO. 4）

（正面）亀塚（ただし、亀は象形文字）

（裏面）奉納　寺田昭平
寺田宝平
寺田竹市
寺田均之
寺田宗男
昭和四十二年九月吉日
為供養建之　大應成典

石碑高さ　六〇cm
幅　四八cm

奥行　二二cm
カメ形石造物高さ　一二cm
長さ　一四八cm
・観音寺のカメ塚（表1ＮＯ．5）
（正面）亀塚（ただし、亀は象形文字）
（裏面）奉納　寺田宝平
寺田竹市
寺田均之
寺田宗男
昭和四十二年九月吉日建立
大應成典
石碑高さ　七二cm
幅　四〇cm
台座高さ　一九cm

c　掛川市

掛川市大須賀町新井のカメ塚（表1ＮＯ．7）は、『静岡県史　資料編二五　民俗　三』で取り上げられている（静岡県　一九九一）。ただし、「亀塚の分布」という図に記されるのみで、詳細は分らない。その後、平成二一年（二〇〇九）に高野氏が調査を行っている。近くの人に確認をし、小高い山をカメ塚といい、大漁祈願のためにカ

メ塚にボーグイ（棒杭）を立てた、今は漁をしないのでカメ塚には参らない、ということを報告している。この時点では、ボーグイは見当たらず、カメを埋葬したことも確認できていないようである〔高野　二〇一〇〕。筆者はこのカメ塚については調査をしていない。

d　御前崎市

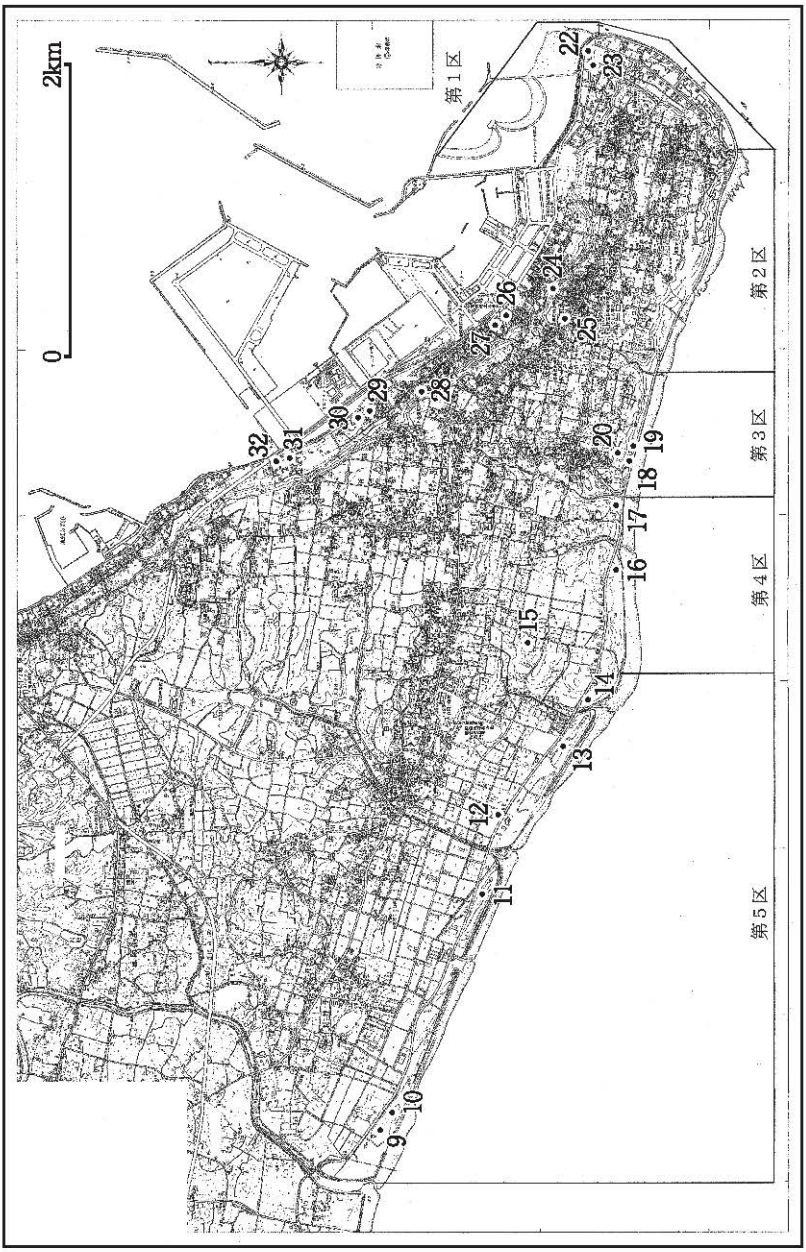
旧御前崎町では早くから複数の「亀塚」が把握されていた。[11] ところが、ウミガメ関連の記録では、旧御前崎町内には死んだカメを葬るカメ塚の風習がある、とされるだけで、具体的なことは紹介されていない〔御前崎町教育委員会　一九八三など〕。『静岡県史』や『浜岡町史』などでは具体的な事例について紹介されているものの、断片的にいくつかの事例が報告されるだけであった。このうち、『下岬の民俗』では、表1 NO. 15、NO. 24〔静岡県教育委員会文化課県史編さん室　一九九〇〕、『静岡県史　資料編二五　民俗　三』では表1 NO. 15、NO. 24、NO. 26、NO. 27が報告されている〔静岡県　一九九一〕。筆者は平成一一年（一九九九）二・三月に、『静岡県史』記述の事例をもとに、表1 NO. 15、NO. 24、NO. 26、NO. 27の事例を調査した。この調査の際、旧御前崎町教育委員会から「カメ塚所在地」（以下、「カメ塚所在地」）と書かれたカメ塚の所在地を示した地図を提供いただいた。この地図には、「一九八六年一〇月一三日現在」と記されており、一二か所のカメ塚を示した黒丸がつけられている。

その後、平成一三年（二〇〇一）五月一〇日付の中日新聞には「共生の時代へ　ウミガメを追う　第2部　亀塚①　守護神」として、「御前崎町の亀塚分布」という地図が掲載されている。[12] ここには、一八か所の「亀塚」地点が地図上に黒丸で記されている。これは、当時の御前崎町教育委員会が把握しているカメ塚の情報をもとにしており、筆者が平成二五年（二〇一三）に御前崎市教育委員会から提供いただいた「カメ塚資料」の中に、まったく同

じ一八か所の黒丸を記した地図が見られる。

その後に発刊された『浜岡町史』では旧浜岡町の事例のほか、旧御前崎町では女岩（めいわ）、白羽（しろわ）、久々生（くびしょう）（白羽地区新谷のなかの地名）にカメ塚があると記し、「久々生の亀塚」の写真が掲載されている（表1 NO. 32）〔浜岡町史編さん委員会 二〇〇四〕。『静岡県史』や『浜岡町史』の情報をもとに、平成二一年（二〇〇九）に東海大学の田口氏、高野氏などが調査を行っている。田口氏、高野氏は御前崎市教育委員会の協力を得て調査を行っているが、この段階では、教育委員会が把握している亀塚は表1 NO. 13、NO. 15、NO. 26、NO. 32の四か所であったようである。そこで、筆者は、かつて調査できなかった事例も含めて、平成二五年（二〇一三）二月、三月、八月に御前崎のカメ塚を再度調査することにした。今回の調査では、先述したように御前崎市教育委員会から「カメ塚資料」（以下、「カメ塚資料」）を提供いただいた。これは、「御前崎町のカメ塚を訪ねて」と題するカメ塚所在地を示した地図と、カメ塚の写真が並べられている二枚の紙であった。これは、掲載されている写真などから判断して、昭和六二年（一九八七）～平成五年（一九九三）ごろに作成された資料であると推測できる。なお、原本は見当たらないといい、教育委員会には白黒のコピーのみが保管されていた。

旧浜岡町にある中部電力浜岡原子力発電所の敷地内のカメ塚（表1 NO. 8）については、『浜岡町史』に写真入りで紹介されている〔浜岡町史編さん委員会 二〇〇四〕。明治一六年（一八八三）に、地元の漁師が建立したものであることは分かるが、原発敷地内にある理由や現状などは記されていない。その後、高野氏や田口氏が平成二一年（二〇〇九）に調査を行い、由来や現状について報告している〔高野 二〇一〇、田口 二〇一一・二〇一二〕。筆者は平成二五年（二〇一三）二月に、中部電力浜岡原子力発電所総務部総務課副長の赤掘秀樹氏の案内で原発敷地内のカメ塚を調査した。入り口からほど近い駐車場（かつてはテニスコート）の横の林の中にカメ



地図3　旧御前崎町のカメ塚（御前崎市教育委員会提供の地図をもとに作成）

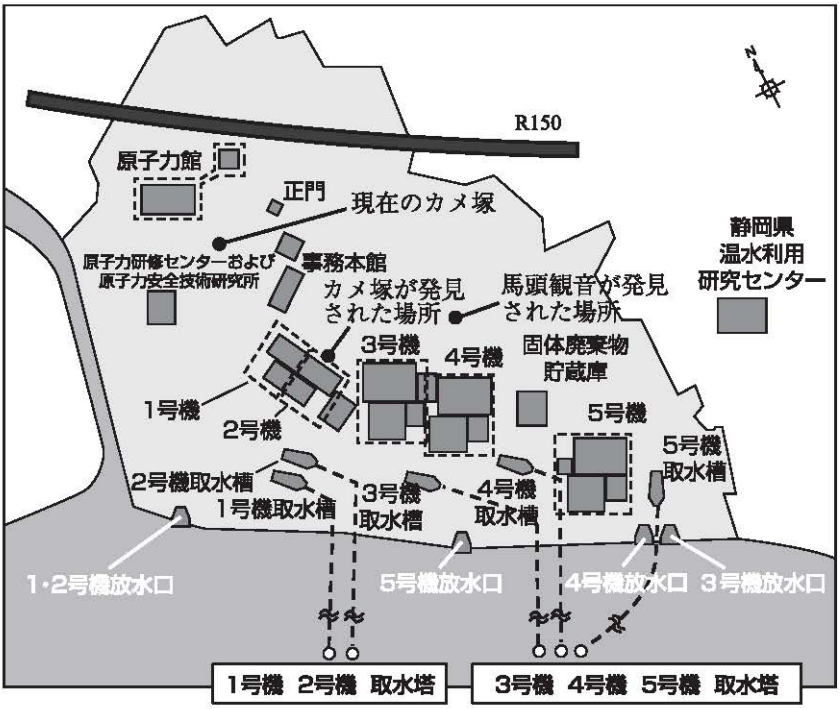
塚はあった。カメ塚の辺りはもともと森であったという。原発では、敷地の五〇パーセントを緑地にしようとして木を植えているという。目立たない場所であるが、カメ塚の下に関連会社の建物ができてからは駐車場からの通路がカメ塚の近くを通るようになった。このために、人の往来が頻繁になり、目立つようになっている。カメ形石造物の上に「亀塚大明神」と書いた石碑が載っている（写真21）。その左側に馬頭観音、その左側に五輪塔を祀っている。カメ塚の入り口には由来を書いた説明板が立っている。赤堀氏から提供いただいた説明の文書も同一の文章であった。以下に引用しておく。

当、佐倉地区でも漁業が盛んな頃、大きな海亀が浜で殺されているのを通りがかりの漁師達が見つけ、その場に海亀を埋めて漁に出たところ、やがて、この漁師達の船だけが不漁続きとなりました。不思議に思った漁師達は、いつかの海亀の祟りではないかと思い、塚を築き「亀塚大明神」として祭ったところ一転して大漁が続き、その後、この話を聞き付けた近郷の漁師達から豊漁祈願の神様として、崇められました。その後、漁業が衰退するにつれて参拝する人の数も少なくなり、いつしか忘れられてしまったのですが、一号機建設中の昭和四六年春、現在の二号機タービン建屋北側で砂に埋もれていたものを発見し、現在の場所に移し祭ったものです。

明治時代に漁民によって建てられたカメ塚が、原発の建設にともなって、再発見され移設されて原発で祀られるようになったということである。赤堀氏の説明によって、カメ塚移設の経緯を補足しておく。

昭和四六年の春に一号機の工事をした。工事現場（現在の二号機タービン建屋北側）で墓石を見つけた。発見したときに地元の人に聞いたら、「亀塚大明神」というのがこの辺りにあったと聞いた。当時、地元のだれに聞いたのか、という記録はない。墓石と台座だけ出てきた。建屋を立てるのに移した。カメ形は移設時に設置した。カメ形の背中に空いている穴は分らない。

その後、昭和五七年（一九八二）一月、三号機の敷地造成工事中の現場（現在の個体廃棄物貯蔵庫一号棟の西側



地図4　中部電力浜岡原子力発電所敷地内のカメ塚の位置（中部電力浜岡原子力発電所提供の図をもとに作成）

の山中）で馬頭観音が見つかった。赤堀氏によると、地図4にある貯蔵庫ではなく、四号機の北側辺りに、小さな貯蔵庫があり、その西側にあったという。馬頭観音は、旧佐倉村の鴨川亀市（原発の旧地主）の愛馬を祀ったもので、明治三〇年九月に建てられたものであった。原子力発電所では、この馬頭観音もカメ塚の隣に移設し、祀るようになった。馬頭観音についても、カメ塚と同じ説明板に由来が記されている。

ところが、平成一三年（二〇〇一）から一号機の配管機器のトラブルが続いたため、五輪塔を新たに作った。そのときに、亀塚、馬頭観音も一緒に枠を作ったという。高野氏の報告によると、トラブルが続いた際、亀塚や馬頭観音に対する供養が足りな

写真 21　中部電力浜岡原子力発電所内の明治時代のカメ塚（表 1 No.8-1）(2013 年 2 月撮影)

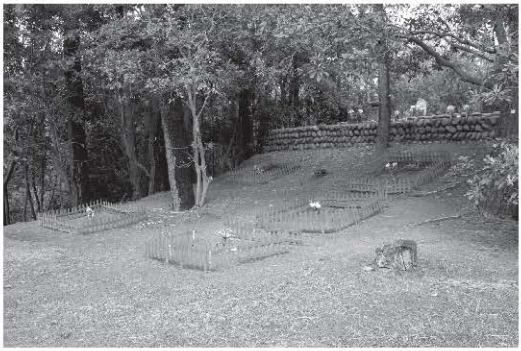


写真 22　中部電力浜岡原子力発電所の近年のカメ塚（表 1 No.8-2）(2013 年 2 月撮影)

いのではないか、という意見が出て五輪塔を作ったという〔高野　二〇一〇〕。

翌年の平成一四年（二〇〇二）から、カメ塚、馬頭観音、五輪塔の供養を行い、原子力発電所の安全運転を祈願するようになった。その後、毎年一月と七月に供養祭をするようになった。地元の佐倉地区の竜泉寺（曹洞宗）と官長寺（曹洞宗）に交代で来てもらうという。赤堀氏によると、以前は二つの寺から同時に来てもらっていたが、今は、交代で来てもらっているという。一月は竜泉寺、七月は官長寺となっている。供養祭のときには、一部の人だけ参列するという。テーブルを並べて、ネギ、カボチャ、スルメなどの供物を並べたが、住職の助言で今は餅だけを並べている。東日本大震災による福島第一原発の事故後、国の要請により平成二三年（二〇一一）五月から浜原原発の原子炉はすべて止まっているが、供養祭は季節行事として続けているという。なお、原発の安全祈願としては、一月と七月に池宮神社へも行っているという。

ところで、原子力発電所では、明治時代に建てられたカメ塚を祀るだけでなく、最近でもウミガメを埋葬するこ

とがあるという（写真22）。赤堀氏の説明を紹介しておく。

冷却するために大量の海水がいる。一号機から五号機までそれぞれ冷却装置を設置している。それぞれ沖合六〇〇メートルに取水塔を設置している。冷却用の海水は、海底トンネルの配水管を通して持ってきて、砂を沈殿するために水槽でためている。そこにウミガメが入っていることがある。ときどきある。生きていることのほうが多い。大きな網ですくって引き上げて海へ帰す。生きていれば酒を飲ませて放す。漁師さんは網にかかったウミガメに酒を飲ませて放すと聞く。原発でも酒を飲ませて帰している。地元の風習があるので、参考にさせてもらって、とどさないようにやっている。プールに入ったウミガメが死んでいると埋めて祀る。カメ塚などを祀った周辺に埋めて祀っている。すべてがカメではない。ムジナなどもある。タヌキは防火水槽で死んでいることがある。場所が足りないので、カメ塚の反対側にも埋めている。かつては弓道場があった場所に埋めている。今は原子炉が止まっているので、海水を取ってないため、ウミガメは入っていない。

地元の漁民が祀ってきたカメ塚を、安全運転のために祀るというだけではなく、冷却装置によって死んでしまったウミガメを埋葬しているのである。ウミガメ供養習俗のなかでは、大変珍しい事例といえる。赤堀氏に、原子力発電所でなぜウミガメを祀るのか、と質問すると、以下のように答えてくれた。

原発は地域の協力でできたので、地域の皆様が作られたものを、粗末に扱うことはできない。地元への感謝の気持ちが根底にある。やめていくわけにはいかない。

・浜岡原子力発電所のカメ塚（表1 NO. 8）

（正面）　亀塚大明神

（右側面）　明治十六年未五月三十日

（台座正面）当村本船中

石碑　高さ　四九cm
　　幅　二五cm
　　奥行　一八cm
台座　高さ　九cm
　　幅　三六cm
　　奥行　三七cm
カメ形高さ　二一cm
　　幅　一〇二cm
　　長さ　一五七cm

「カメ塚所在地」には、白羽地区の遠州灘側の西端辺りにカメ塚の印が一つつけられている。「カメ塚資料」には、「新神子浜（しんかんご）」と題する祠の写真も掲載されているが（写真23）、これまでこの事例についての報告はなかったようである。このカメ塚については、高野氏の調査で初めて報告された〔高野　二〇一〇、田口　二〇一一〕（表1NO．9）。場所は白羽地区の新神子になる。高野氏と田口氏の報告には若干違う記述がみられるが、総合すると以下のような内容になる。

ウミガメ監視員をしている大池良一氏は三二歳のころ、母親が浜でアカウミガメの死体を見つけ、魚籠にウミガメを入れて母親と二人で家まで運んで埋葬した。祠や石碑は建てず、石を置いておくだけであったが、毎日、朝晩に花や線香を供えて祈っていた。近所の人も参りに来た。そのうち、キツネの骨壷も一緒に埋めて「浜田稲荷」として、鳥居一〇本も立てて熱心にお参りしていた。母親が亡くなってからも、大池氏の奥さんが祀ってい

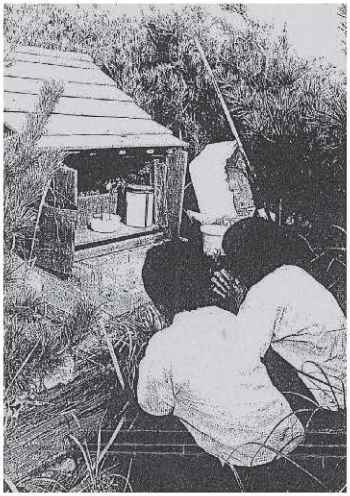


写真 23　浜田稲荷(表 1 No.9)(1987～1993 年ごろ撮影か、御前崎市教育委員会提供)

写真 24　浜田稲荷跡（表 1 No. 9）（2013 年 2 月撮影）

た。浜岡原子力発電所の建設時に、コンクリート骨材（砂や砂利）を畑に納入したのでカメ塚が地中に埋まってしまい、自然になくなった。

大池良一氏は、昭和八年（一九三三）ごろの生まれで、平成三年（一九九一）からウミガメ監視員をしていた方である。平成二五年（二〇一三）の筆者の調査時にはすでに亡くなっておられた。現在の当主である大池茂夫氏によると、自分の山にキツネなどを祀ったところが二か所あるが、ウミガメのことは聞いていない、という。御前崎ではキツネの穴があると祠を建てて祀る習慣がある。大池氏のところでは、ウミガメとキツネが一緒になっているようである。茂夫氏によると、浜側のほうがウミガメで、陸側のほうがキツネではないか、というが、今となっては、そのあたりの区別ははっきりしない。高野氏や田口氏の報告にある「浜田稲荷」は二か所を指しているのか、どちらか一方を指すのかも不明である。ただし、大池良一氏が祀っていたカメとキツネには、御前崎のカツオ船や焼津のサバ船の衆がお参りにきていたことが分かった。良一氏の母親は、焼津から静岡に切干し芋などの行商に行っていたという。母親などの口伝えでカメやキツネを祀る情報

も広まったのかもしれない。今は祠もないが、参りに来ていた漁民の船もなくなったので、参りに来ることはなくなっている。

「カメ塚所在地」、「カメ塚資料」にはない事例であるが、平成二五年（二〇一三）三月、筆者の調査において、これまで把握されていなかったと思われるカメ塚について由来を聞くことができた（表１ＮＯ．11、写真25）。白羽公民館長の斎藤正敏氏の案内で、白羽地区の白浜に住む増田昭子氏（昭和二年生まれ）を訪ねた。増田氏は、表１ＮＯ．18の事例にもかかわっていた方であったため、表１ＮＯ．11・18両方の内容を聞くことになった。

夫はカツオ船に乗っていた。第一日光丸。夫は漁撈長をしていた。

カメは二回拾った。二とこいけた（二か所に埋めた）。ひととこは広沢。サーフィンをやってるとこ。広沢から海へ降りる道の近く。畑道。今の川沿いの道よりも灯台より。原発道路ができる前だった。ひととこはここらへんの浜。白浜になる。カツオ節工場のあたりになる。カメをいけたのは広沢のほうが先だった。

写真25　白浜のカメ塚付近（表１No.11）（2013年３月撮影）

広沢は住職を頼んでお経をあげてもらった。海福寺のおじいさんのころだった。「かめの墓」と書いた柱を立てた。（教育委員会が持っていた「広沢原発道路南側」の「かめの墓」の写真（写真26）を見せると）これが自分たちの立てた墓。（写真にはもうひとつ横に小さい柱が写っている）同じ日光丸だが、ほかの船が立てたものがあった。五一日光か。お参りに行ったときは二つ参った。白浜のほうはそのまま。山こさえて、花立てて、自

分たちで拝んだだけ。印も覚えていない。やったかどうだか。お花を持ってお参りに行ったが。

四〇年も前になる。昭和四〇年前後ぐらい。春ぐらいだった。二回ともシラスが始まるころだったと思う。シラスの衆の網にかかって死んだんじゃないか。増田氏は実家が近いし、夫が船長をやっていたので、カメが寄っているのを教えてくれた。「カメ寄ったで、どうだい、拾っちゃあ」、と電話で言ってくれる。自分で見つけたわけではない。百姓の衆が見つけた。

漁師だもんで、カメに頼む。お参りをする。磯ばたに上がっていた。松原にいけた。海よりちょっとオカへ上がった松原。重いもんで、遠くへはいけんので。遠州灘は（駿河湾側の砂浜と違って）砂の量が違う。西の風が吹くと舞うような山。じゃまにならんところへいけてやった。波もこんし、自分たちが担ぎ上げるのがえらいし、あそこがいいか、といけた。よたよたして担いだ。女の人だけで担いだ。役持ちの奥さんを頼んだ。

大きなカメだったので四人で担いだ。女衆でいけた。船長さんとか、役持ちの人が行った。縄と棒を持って、四人ぐらいで担いだ。旗は立てなかった。派手なことはしない。お花持って、お水持って、行って、拝んでくるぐらい。

（カメはなぜ大事にするという言い伝えはあるか、という問いに）あの船は、カメを拾っていけたそうだ、わしらもそんなにするか、そんな程度。

明けても暮れてもお参りに行った。漁を授けてもらうため。漁と航海安全を願う。お参りは

写真 26　広沢のカメ塚（表 1 No. 18)（1987 ～ 1993 年ごろ撮影か、御前崎市教育委員会提供）

写真27　広沢のカメ塚付近（表1 No.18）（2013年3月撮影）

白羽神社、駒形神社、桜池（旧浜岡町の池宮神社）に行った。神子に三つぐらいお稲荷さんがあった。大池さんのカメ（筆者注：表1 NO．9）は知らない。車で回った。それが仕事だった。お籠りは船が出たとき三日間ぐらい行った。また、台風が来たとき、助けてもらわないとと、お籠りに行った。大きいお宮さんへ参った。夕方、三時半か四時ごろ。小さいろうそくを持って行って、終わるまで拝んで帰った。お参りは気が向けば行く。毎日どこかへ行った。順番や行く場所は決まっていない。お稲荷さんやカメなど。カメに行ってくるか、というぐらい。丁寧なことはいわない。広沢のカメといった（筆者注：表1 NO．15）。カメで参ったのは自分たちがいけた、広沢と白浜（筆者注：表1 NO．11・18）。松尾長作さんのところ（筆者注：表1 NO．27）には参った。船は違うが同じ日光丸だった。ほかの船が祀っていると、悪いような気がして行かない。人のなわばりだから行っちゃ悪い。曽根さんのカメは知らない（筆者注：表1 NO．26）。生き物で参るのはカメとキツネぐらい。ネズミ塚はあるけど、行ったことはない。

マグロ船はカメを拾ったりしない。カツオ船は一日を争う商売なので。三日で満船することもあれば、一月ぐらいかかるときもある。マグロ船は航海が長い。

夫が船長をやっていたときは、カツオとマグロを合わせて五一か五二ハイの船があった。昭和四〇年前後。夫が船をやめたのは昭和六一、二年か。オカへ上がってから、カメにもお参りには行かなくなった。あとの人に

譲った。今も日光はやってるけど、ここらへんの方は乗っていない。セケン（他地域）の人が乗った。今はイカ船、マグロ船。カツオはないと思う。セケンの人だと参りにも行かない。

増田氏の話からは、御前崎の漁民がカメ塚を作る経緯がよく分かる。要点をまとめると、以下のようになる。カツオ漁業が盛んであった時期に、死んで漂着したウミガメを祀ることがしばしばあった。船ごとに行っていた。ウミガメを祀るのは女衆であった。とくに、船の役をしている家の女衆が祀った。死んだカメがあると、船の役をしている家に連絡があった。カメを祀ったところに参るのは女衆であった。基本的には自分の船で祀ったカメに参った。ほかの船が祀ったカメはあまり知らない。カメのほかにも、神社やキツネを祀ったところなどに参った。

写真28　亀松亭のカメ塚（表1 No.12）（2013年3月撮影）

表1 NO. 11・18ともに、平成二五年（二〇一三）三月に斎藤正敏氏の案内で訪ねたが、いずれも見つけることはできなかった。表1 NO. 18のほうは、原発道路沿いの駐車場の西の端に上へ上がる昔の道がある。その入口に海難供養の墓とカメ塚があったという。場所的には到達できたが、写真26のようなカメ塚は見当たらなかった。表1 NO. 11については、おそらく、増田氏などが参らなくなってから、砂や草に埋もれて、カメ塚へ行く道もなくなったと思われる（写真27）。

白羽地区白浜の原発道路の陸側、亀松亭というレストラン跡の前にもカメ塚がある（表1 NO. 12、写真28）。「カメ塚資料」にはこの位置に印がついている。現在、亀松亭はグループホームになっているが、カメ塚は残っている。このカメ塚建立の経緯については、日本作家ク

ラブの江崎惇が書いた「亀塚の碑　建碑由来」と題する文章が、御前崎市の教育委員会に残されていた。[13] これによると、亀松亭というレストランの女将でレジャー開発会社の社長であった海野千代女が、日本作家クラブの会長・陣出達朗と、御前崎のカメのことなどを話していたときに建立を思いついたという。海野千代女の意図としては、亀松亭だけの所有物ではなく、御前崎全体の観光の共有物として、また、日本のアカウミガメ全部の産卵地の供養碑としたいということであった。陣出達朗が書いた碑文には、「小亀　その数いく千万なるをあわれみ　ここに一冢を建て供養せんとす　あわれはらからの　いけにえとなりし　嬰亀孩亀の霊」とあり、子ガメの供養のために建てたことが分かる。また、斎藤正敏氏によると、亀松亭のカメ塚を作るとき、白浜のカメ塚（表1 NO. 11）から砂を持ってきたという。

・亀松亭のカメ塚（表1 NO. 12）

（正面）亀

高さ	一三七cm
幅	一七八cm
奥行	一五cm
石碑高さ	八八cm
幅	七〇cm
カメ形石造物　長さ	一二五cm

白羽の海岸にもカメ塚がある。「カメ塚所在地」、「カメ塚資料」ともに記載はないようである。この事例は、高野氏が平成二一年（二〇〇九）六月に調査を行っており、高野氏、田口氏の報告に取り上げられている〔高野　二

写真 29　白羽のカメ塚（表 1 No.13）（2007 年ごろ撮影、御前崎市教育委員会提供）

写真 30　白羽のカメ塚（表 1 No. 13）（2013 年 2 月撮影）

〇一〇、田口　二〇一一）（表１ＮＯ．13）。この段階では、「大圓鏡智　奉為海亀霊位供養之塔」と書かれた木の墓標が立っており、「平成二十年　御亀大明神　御礼拝　第七光照丸」と書かれた赤い幟旗が立ち、花なども供えられていた（写真29）。第七光照丸の関係者が祀っているようであるが、高野氏、田口氏の報告にはカメ塚を祀った経緯は記されていない。平成二五年（二〇一三）二月、筆者は御前崎市教育委員会の鈴木和明氏、坂本浩長氏の案内で現地を訪ね、墓標がまだ立っていることを確認した。しかし、赤い旗は見られなかった（写真30）。高野氏、田口氏の報告には、このカメ塚の場所は、白羽地区の尾高としているが、正確には白羽地区の白羽になる。筆者の調査でも、残念ながら、このカメ塚のことを知る方に出会うことができなかった。

・白羽のカメ塚（表１ＮＯ．13）

（正面）大圓鏡智　奉為海亀霊位供養之塔

高さ　一五五 cm

幅　六 cm

奥行　六 cm

しるたれ川の東側にもカメ塚があったようである。

写真31　白羽のカメ塚入り口（表1 No.13)(2013年2月撮影)

「カメ塚所在地」、「カメ塚資料」ともに印がついている。現在はまったく確認できなかったが、白羽公民館長の斎藤正敏氏は以下のように語る。

昭和五〇年代、漁師がウミガメを埋めて祀るのを見た。場所は中原の尾高のあたり。砂原浜（すかばらまー）という場所。今は白羽海岸という。ガードレールができている。松が小松で、松をよけながら歩いた。今は入れる状態でない。埋めたのは日光か光照のどちらか。何人かが海福寺の和尚さんと歩いて行ったので、なんだろうと思った。あとで、ウミガメを埋めたと聞いた。

「カメ塚所在地」、「カメ塚資料」の位置と、斎藤氏の見たカメ塚が完全に一致するものかどうか不明であるが、斎藤氏の案内で現地を回ったところ、おおよそ同じ場所であるようである。これを表1 NO. 14とした。

白羽地区の中原の亀塚は、慶応二年（一八六六）建立であり、御前崎市で最も古い事例である（表1 NO. 15、写真32・33)。この事例は、『静岡県史　資料編二五　民俗　三』に取り上げられており（静岡県　一九九一)、旧御前崎町教育委員会作成の「カメ塚所在地」、「カメ塚資料」にも印がついている。ただし、県史には詳しい記述はない。高野氏も平成二一年（二〇〇九）に調査を行っているが、聞き取りは行っていないようである。筆者は平成一一年（一九九九）三月に、中原の増田義雄氏（大正七年生まれ）から聞き取りを行っていたため、以下に紹介さ

写真 32　中原のカメ塚（表 1 No.15）（2013 年 8 月撮影）

写真 33　中原のカメ塚（祠の中）（表 1 No.15）（1999 年 3 月撮影）

せていただく。

朝、浜回りをする。寄り物がないか見て回る。昔、カメが寄って死んでいたのを見つけて、持ってきていけた（埋めた）、と聞いた。地曳網の船の衆が共同でいけたと思う。漁に関係する。甚兵衛、彦八は地曳網の船であったが、いつのころか合併して甚兵衛だけになった。戦後も地曳網はあったが、戦後直後になくなった。今はここでは地曳網はしていない。ジンベエ、ヒコハは屋号として今も残っている。古いカメだけでなく、あとからもその場所に小さいカメをいけたと聞いているが、それもいつのことかは知らない。

カメ塚が山の中にあるときから、遠洋の衆（御前崎）の奥さん連中は参っていたが、地元の人はあることは知っていたが参ることはなかった。いけっぱなしで何も祀っていなかった。遠洋の衆の奥さんたちはお礼参りや、出港のときに参っていた。キツネの穴にもアブラゲを持って参った。そこらじゅうに参っていた。新しく祠ができてからも、カメの形のお菓子を供えにきていた。

個人山ではなく、仲間山なのでここにカメをいけたという。タンクの西に、幅二〇間くらいの山が

写真 34　中原のカメ塚の移設（1993 年 10 月 13 日撮影）（増田義雄氏提供）

写真 35　中原のカメ塚の移設（1993 年 10 月 13 日撮影）（増田義雄氏提供）

あった。カメ塚はその中にあった。平成五年に県に売って潅漑用水のタンクを作ることになり、山を削り、カメ塚も移動した。この山は共有の山であった。増田氏は管理者の一人。数人の山の管理責任者だけでは建設費が足りないので、甚兵衛、彦八の船に関係した人たちを回って祠の金を集めた。三〇数万円かかった。町に造ってくれと頼んだが、町内にカメ塚は五、六か所あるので、中原だけ作るわけにはいかないと断られた。基壇だけは県が作ってくれた。一尺五寸ほど下からカメの骨が出て来た。辺りは砂浜であったので乾燥していて残ったのであろう。白い布を基礎に敷いて、骨を納め、上に祠を建てた。カメ塚を掘り出したのは平成五年一〇月一三日で、「亀塚大明神」の落成式は平成六年一月二三日。塚をこしらえてからも幟は立てていた。

この山にはかつて松やイマメがあった。子どものころ、よくゴ（松の落ち葉）をかけにいく、といって松の落ち葉を集めに行った。芋の切り干しをこしらえるのに、芋を煮るとき、たくさんの燃料がいったが、そのときに使った。イマメは利用しなかった。子どものころ（一〇歳くらいのとき）、落ち葉をかきに行ったとき、この辺

写真36　中原のカメ塚の移設（1993年10月13日撮影）（増田義雄氏提供）

写真37　中原のカメ塚の移設（1993年10月13日撮影）（増田義雄氏提供）

りでカメの骨らしいものを見た。今、骨を掘り出して見ると、そのとき見たものはカメの骨だったように思う。

増田氏の語りから、地曳網の仲間でカメを祀ったことが分かる。地元・白羽の人よりも、御前崎の遠洋漁業の妻たちがキツネの穴などとともに参っていたことも分かった。なお、増田氏からは、平成五年（一九九三）にカメ塚を移転した際の写真も提供いただいた。貴重な写真なので、ここに掲載させていただく（写真34・35・36・37）。なお、『下岬の民俗』には、祠が建てられる以前の中原のカメ塚の写真が掲載されている（静岡県　一九九〇）。

・中原のカメ塚（表1　NO．15）

石碑（正面）亀塚大明神　慶応二寅年六月十六日廿三日

（左正面）彦八舩　甚兵衛舩

石碑高さ	四七cm
幅	二三cm
奥行	一五cm
台座高さ	一一cm
幅	三四cm
奥行	三〇cm

祠（後ろ）平成五年十月吉日建之

祠高さ　一八九cm

増田義雄氏（大正七年生まれ）は、以下のようにも語っている。

薄原の浜にもカメの塚がある。これはいつだれが埋めたということは知らない。ドザエモンではない。松沢（マンザ）川の河口近く。新谷にもカメの塚があると聞いている。以前は幟を立てて祀っていた。赤白の、船の名前を書いた幟が立っていた。

写真38　薄原のカメ塚か（表1 No.17）（2013年2月撮影）

写真39　薄原のカメ塚付近（表1 No.17）（2013年2月撮影）

松沢川の河口で薄原の浜にもカメ塚があるという。筆者が平成二五年（二〇一三）に調査した際には、駐車場の山手に墓標らしき木柱の残骸が見られた（写真38）。増田氏が語っていたカメ塚の名残という可能性がある。なお、新谷のカメ塚は、後述する表1 NO．32のことではないかと思われる。

昭和五五年（一九八〇）から六一年（一九八六）まで保護監視員をしていた松林久蔵氏が昭和六三年（一九八八）一月にまとめた『御前崎で産まれたアカウミガメ』の中に、「亀塚」という項目がある〔松林

一九八八）。御前崎における死んだウミガメを埋葬するカメ塚の風習について述べたあと、ごく最近見聞きした具体的な事例を挙げている（表1 NO. 21）。昭和六二年（一九八七）一二月一六日、浜辺を散歩していた松林氏は堤防から少し離れたところに真新しいカメの墓標を発見した。鈴木作一氏と下村甚市氏が大きな死んだカメが漂着しているのを見つけ、家の者や隣近所の手伝いを得て土手近くまでカメを担ぎ上げ、酒を口元から頭部、甲羅一面にかけ、きれいな砂で埋めてやったものであったという。鈴木氏は若いころには大型漁船に乗り組んでカツオ漁の経験もあった漁師であった。松林氏がカメラを取りに戻って再び訪れたときには、新しい花が供えられ、カメ塚の両脇には、「伝説に駒形様の御使亀　静かに守れ故里の海」、「万年の歳重ねし亀の霊　静かに眠れ富士を仰ぎつ」という句が書かれた短冊があり、一人の媼が線香を立てて合掌していたという。

平成二五年（二〇一三）三月、筆者は斎藤正敏氏の案内で、御前崎地区下岬の下村甚市氏（大正三年生まれ）を訪ねた。松林氏がカメを埋葬したと記した方である。下村氏は表1 NO. 23のカメ塚についてはご存じであったが、自身がカメ塚を作ったのは記憶がないという。下村氏は漁師ではなく、自宅も台地の上にあるため、手伝った

写真40　孵化場裏のカメの墓（表1 No.22）（1986年12月6日撮影、御前崎市教育委員会提供）

写真41　孵化場裏の子ガメ塚（表1 No.22）（2013年2月撮影）

程度であったのかもしれない。

孵化場の裏側（孵化場と海岸の間）に子ガメ塚が作られている（表1NO．22）。毎年、五月上旬のウミガメ保護活動を開始する直前、子ガメ塚の前で、孵化できなかった子ガメの供養祭を行っている。御前崎地区の海福寺（曹洞宗）住職が読経し、保護監視員たちが参列する（写真42）。毎年、地元紙で紹介されており、ウミガメ保護活動の幕開けを告げる年中行事となっている。昭和六二年（一九八七）一月二五日に「カメの墓」と書かれた木柱の墓標が建てられたが（写真40）、平成一四年（二〇〇二）に石碑に建て替えられた[14]（写真41）。

・孵化場の裏の「子亀塚」（表1NO．22）

（正面）子亀塚

石碑高さ　九〇cm
　　幅　二一cm
台座上　高さ　一五cm
台座下　高さ　六cm
カメ形　高さ　一一cm
　　長さ　二五cm

写真42　子ガメ塚での供養祭（2014年5月8日撮影、御前崎市教育委員会提供）

下村甚市氏が記憶にあったカメ塚は、現在の孵化場の近くにあったようである（表1 NO. 23、写真43）。下村甚市氏、和子氏は以下のように語る。

カメは元根の山にカメを埋めた。下岬区の山だった。松林があった。埋めたところに木の棒を立てていた。船主の家族がお参りしていた。お墓だで、そこを踏んではだめといった。

この船主の家とは、放流習俗で触れた、カメに酒を飲ませていたおばあさんの家であった。船主の息子である下村政道氏（昭和三三年まれ）に話をうかがった。

父親は遠洋漁業をしていた。はまゆうの隣のオレンジの家と、木村さんの家の間ぐらいにカメ塚があった。父はうちの土地だといっていた。木の柱があったような気がする。うちで祀ったかどうか知らない。女岩にもあったと思う。小学校のころにカメ塚があった。カメ塚は四〇年以上前になくなった。小学校のころに埋めた記憶がある。一時、カメがすごい死んだ。船が廃油を海へ捨てた。コールタールの塊が海岸に寄った。そのころにカメがたくさん死んだ。カメ塚ではおっつかんので、そのまま埋めた。カメ塚はもうちょっと前か。

現在はカメ塚はまったく見当たらないが、孵化場近くに船主の家が祀ったカメ塚があったことが分かった。

写真43　元根のカメ塚跡（表1 No.23）（2013年3月撮影）

『静岡県史　資料編二五　民俗　三』には、御前崎地区大山の波切不動のかたわらに「亀塚」があるとしている〔静岡県　一九九一〕(表1NO．24、写真44)。石碑に刻まれた年号から明治三六年（一九〇三）のものであることがうかがえる。平成一一年（一九九九）二月に筆者は御前崎地区大山の大山不動を訪ね、沢入辰美氏（大正五年生まれ）・由枝氏（大正九年生まれ）夫妻に聞き取りを行った。

大山不動にある亀塚は寄ったものか、沖から拾ってきたものかは知らない。いけて（埋めて）祀ってあった。もとは不動もカメ塚も浜（御前崎工務所付近）にあったのを現在地に上げたという。戦争中にやられた船の碑がある。そこにあった。おそらく明治に現在のところに移った。幸左衛門の家は船主であった。船の人が信仰していた。毎月一五日に参る人がいる。今は沢入康夫氏が祀っている。

写真44　大山不動のカメ塚（表1 No.24)(1999年2月撮影)

大山の沢入康夫氏（昭和一〇年生まれ）にも聞き取りを行った。

沢入家は不動を祀っている。昭和三五年ごろ建て替えた。津波でやられるので上げた。カメ塚も下にあった。その後、高野氏が平成二一年（二〇〇九）に調査したときには、カメ塚は大山不動とともに沢入康夫氏の敷地に移っていたという。このとき、高野氏が沢入康夫氏から聞いたところによると、平成一三年（二〇〇一）から、沢入康夫氏の敷地で不動、カメ塚を稲荷とともに祀っている。風が強く、カメ塚と不動が傷む恐れがあったために移転したという。高野氏の写真によると、カメ塚の石碑は以前のものと同じようである。不動については、祠を移転したのではなく、不動明王石造物を屋外に安置しているようである。毎月二八日を祭日としていたが、沢入家に合

祀したのが二三日であったために、その後は二三日を祭日にして祀っている。漁をしていたころは漁師の人がカメ塚と不動に参っていたが、今では漁師は来ない。ただし、近所の人はお参りに来るという。

・大山不動のカメ塚（表1 NO. 24）

（正面）亀塚　明治三十六年六月六日　納主沢入幸左衛門船中

高さ　五八cm

最大幅　四六cm

奥行　約一八cm

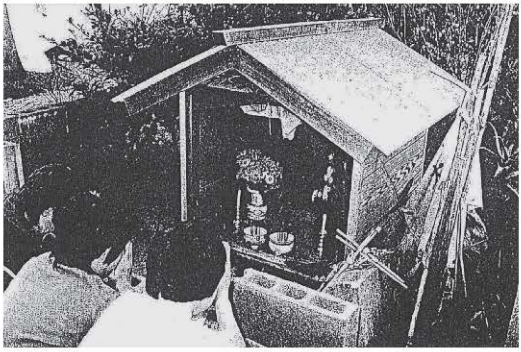


写真45　曽根家のカメ塚（表1 No.26）（1987～1993年ごろ撮影か、御前崎市教育委員会提供）

台座高さ　約二五cm

御前崎地区西側の曽根家の事例については、『静岡県史　資料編二五　民俗　三』に詳しい記載があり〔静岡県　一九九一〕、旧御前崎町教育委員会作成の「カメ塚所在地」、「カメ塚資料」にも印が見られる（表1 NO. 26、写真45・46・47）。『静岡県史　資料編二五　民俗　三』には、「大洲霊神」の前でおばあさんたちが拝んでいる写真も掲載されている。これは石川純一郎氏が撮影したものであった。写真45は、県史の調査後に撮影されたと思われる。筆者は平成一一年（一九九九）二月に現地を訪ね、カメを祀る祠を確認することができた。しかし、カメの埋葬にかかわった方への聞き取りはできなかった。平成一一年の段階では、祠の中には「大洲霊神」

写真47　曽根家のカメ塚（表1 No.26）(2013年8月撮影)

写真46　曽根家のカメ塚（表1 No.26）(1999年2月撮影)

と書いた木の板と、カメ形の置物を安置、前に賽銭箱を置き、花筒にはサカキが供えられていた（写真46）。その後、高野氏が平成二一年（二〇〇九）に調査したときには、カメの埋葬にかかわったおばあさんは亡くなっており、曽根家は引っ越したあとで、祠のみが屋敷跡に残っていた。高野氏の写真では、祠は残っているが、花筒にはサカキは見当たらない。平成二五年（二〇一三）八月に筆者が再度訪れたときにも祠は残っていたが、サカキなどは見当たらず、祭祀が継続しているかどうか分からなかった（写真47）。以上のような状況のため、県史の報告は貴重なものとなる。以下、県史の記述を引用しておく。

昭和三七、八年ごろの夏の大シケのあと、ハママワリをしていた当主の母が渚に寄っている大きなウミガメを発見した。だいぶ弱っていたので轆轤を用いて引きあげたが、まもなく死んでしまったので、供養のために屋敷に埋めた。その後、大須賀町（現、掛川市）岡崎の信心家に伺いをたてたところ、「そのカメは劫を経て神通力があるから祀りゃいいことがあるし、祀らにゃ禍がある」との御託宣があったので、塚の上に祠をたて「大洲霊神」として祀った。毎月一五日を祭日として一〇人ばかりのおばあさんたちが寄って祭文や般若心経をよみ、真

言を唱えて信心し、大漁祈願を行っている。

曽根家の女性がウミガメを発見して祀ったことが分かるが、信心家の託宣によって「大洲霊神」という名前をつけて祀るようになったとのことである。ただし、この報告だけでは、曽根家が漁業に関係する家かどうか不明であった。平成二五年（二〇一三）八月の筆者の調査では、曽根家の隣の神代邦夫氏に聞き取りをすることができた。神代氏によると、曽根家の明治生まれのおばあさんがカメを拾ってきて祀ったという。また、曽根家はカツオ漁にかかわっていたようである。

・曽根家のカメの祠（表1 NO. 26）

高さ　一一一cm

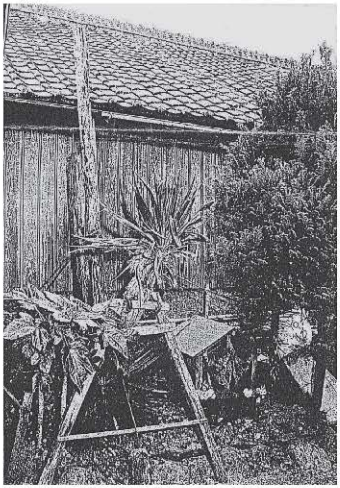


写真48　松尾家のカメの祠とカメノマクラ（表1 No. 27)(1987 ～ 1993年 ごろ撮影か、御前崎市教育委員会提供）

松尾長作氏の家のカメ塚については『静岡県史　資料編二五　民俗　三』に記述があり〔静岡県　一九九一〕、旧御前崎町教育委員会作成の「カメ塚所在地」、「カメ塚資料」にも印がついている（表1 NO. 27、写真48・49・50）。県史には松尾氏がどのようにしてカメを祀るようになったのか、詳しい記述がある。その後、筆者は平成一一年（一九九九）二月に松尾氏から聞き取りを行い、高野氏も平成二一年（二〇〇九）に聞き取りを行っている。松尾氏の事例は、ウミガメとともに流木を拾い上げて祀った点に特徴がある。筆者はカメの流木について取り上げた際にこの事例も報告させていただい

写真49　松尾家のカメの祠とカメノマクラ（右側）（表1 No.27）（後ろに横たえられている木はボーグイ（1999年2月撮影）

写真50　松尾家のカメの祠（表1 No.27）（2013年8月撮影）

たことがある〔藤井一九九九a〕。しかし、紙数の関係もあり、聞き取りの内容については紹介していなかった。本稿では、松尾長作氏（昭和五年生まれ）からの聞き取り内容をここにまとめて紹介させていただく。

昭和三二、三年の夏、中硫黄島の西三〇マイルほどのところでキヅキのナブラを発見し、三〇〇〇貫（約一〇t）ものカツオを釣った。当時の第八日光丸は一万貫（約三三t）で満船であった。釣り終わって、流木に近づいて見ると、大きなアオガメ（アオウミガメ）が流木に乗っかって休んでいた。初めから祀るつもりではなく、思いつきで、漁をさせてくれたので拾ってみようということでカメと流木を上げた。カメはタモ網ですくい上げ、流木はカギで引っかけてロープで縛り、皆でやーやー言って引き上げた。漁が終わって、流木などを拾うには二、三〇分かかり、燃料もそれだけ余計にかかるため、魚撈長が認めないとできない。乗組員は面白がってカメをつついたりしていたが、カメは途中で死んだ。漁を授けてくれたということでカメは持ち帰り、松尾家の庭に埋めて祀った。流木もそのかたわらにおいた。流木はだれがいうともな

く、カメがとっつかまっていたのでカメノマクラというようになった。もともと長さは同じくらいであったが、幅は倍くらいあった。藻が生えていて、小魚が集まり、小魚を追ってカツオがついていた。

当時は父親作十氏が漁撈長（昭和四二年に六三才で亡くなる）で、長作氏が船長をし、乗組員は四五、六人いた。父から船持ちになった。昭和三八年から日光水産と分かれて日光漁業とガソリンスタンドを経営していたが、昭和四二年に父が亡くなって、長作氏は漁師をやめ、ガソリンスタンドだけを経営するようになった。

今の祠は三、四回目のもの。傷んでくれば作り替えた。最初はカメを埋めた上に石をおいていただけであったが、それじゃかわいそうだということで二〇年ほど前に祠を建てた。今道路になっているところは砂の土手で、その手前には畑があり、砂浜が家の近くまで続いていた。カメを埋めたところは、桜ケ池の観音から引き抜いてきたボーグイ（棒杭）を立てていた。海が見えるところということで立てただけで、とくに意味はなかった。今は朽ちたボーグイが祠の後ろに横たえられている。今は松尾家だけで祀っており、正月、盆には洗米や餅を上げ、普段でも花が枯れると新しいものに変え、線香を立てている。漁をしているときは、漁師も参ったが、とくに決まった日はなかった。乗組員だけでなく、聞き付けて他の船の人たちも参りにきた。安全や大漁祈願をした。出港前には乗組員は氏神へ参るが、カメには参らなかった。

聞き取りの内容は、県史や高野氏の報告とほぼ同じである。ただし、高野氏によると、長作氏は、「カメノマクラと一緒に引き上げたアオウミガメを埋葬した」と語るとともに、「自分たちが漁に出ている間に、母親が浜辺でカメを拾って埋めた、というお話も聞いた」という。平成二五年（二〇一三）八月にも筆者は松尾長作氏を訪ねたが、この点は確認できなかった。ほかの事例と比較すると、長作氏が海上で拾った以外に、母親が浜辺で拾ったカメを埋葬したこともあったのかもしれない。平成二〇年ごろに母親が亡くなってからは、長作氏の奥さんがカメ塚を祀っているという。

・松尾家のカメの祠（表1 NO. 27）

高さ　六〇cm

幅　五〇cm

奥行　五〇cm

「カメ塚所在地」、「カメ塚資料」ともに、御前崎地区女岩（めいわ）の小野田一磨氏旧宅付近に印がついている（表1 NO. 28、写真51）。地元ではこの事例も把握されていたと思われるが、これまでどこにも報告されたことはないようである。平成二五年（二〇一三）三月の筆者の調査では、斎藤正敏氏の案内で、女岩の小野田市雄氏（昭和四年生まれ）・ふさ氏（昭和六年生まれ）夫妻を訪ねた。ふさ氏はウミガメ埋葬にかかわった方であった。

写真51　栄福丸のカメ塚跡（表1 No.28）（左側が船主の家跡）（2013年3月撮影）

ふさ氏は、死んだカメをいけた（埋めた）ことがある。昭和四五年に亡くなったおばあさん（市雄さんの母親）がいたころであった。岩の間に寄って死んでいた。苗を入れるナエボウラ（丸くて竹で作っている）にカメを載せて、ふさ氏とおばあさんの二人で天秤棒で担ぎ上げた。重かった。カメに酒をくれてやれといって、急いで酒を買ってきて、カメの口を開けてついでやった。女の人だけでいけた。隣の姉さんと、小野田一磨氏（栄福丸の船主の家、現在の当主は一磨氏）の母親と三人で行ったと思う。おばあさんが指図していた。男衆はみんな船で行っているので。若いころだった。昭和三三年の台風よりも前だったか。船主の家（小野田一磨氏の家）の下に、カメノマクラとボーグイが立っていた。その前にいけさせてもらった。カメノマクラは板のようなもの

だった。長さは一メートル五〇センチぐらいか。一磨氏の家の道具を入れるところなどがあった。その前だった。カメをいけたときは坊さんを呼んでいない。穴を掘っていけただけ。ボーグイ、カメノマクラの前にいけた。踏まないようにした。石も柱も立てなかった。カメ塚とはいわなかった。「ボーグイのお籠りあるで」、などといった。ボーグイ、カメノマクラ、カメをいけたところは、三つセットだった。船が出るとお参りをした。船をやめるまでおこもりを続けた。カメはうっちゃらかしてはおかん（ほったらかしてはおかない）。ふさ氏がいけたのは一回であった。おばあさんはかすりの袢纏を着ていたと思う。寒い時期だったか。カメをいけるのはコリョウ（小漁）船はやらない。男の人はカメには参らない。

栄福丸の船主や乗組員の家の女衆でウミガメを埋葬したことが分かる。この事例の場合、カメ塚よりも前に、カメノマクラやボーグイ（棒杭）が船主の家の下に立っていたようである。その前にカメを埋葬している。ボーグイとは、観音の御開帳のときに観音の境内に建てる木の杭である。船主が奉納することになっており、昭和三〇年（一九五五）に栄福丸が上げたという。御開帳が終わると、ボーグイを抜いてきて、船主の家で賑やかにお祝いをする。栄福丸ではカメノマクラのところへ立てていた。したがって、船主の家の近くに、大漁や航海安全のために、カメノマクラ、ボーグイ、カメ塚を祀っていたことになる。小野田一磨氏によると、毎日夕方、カメ塚で、船頭、船子のおばあさんたちが、お籠りといってお参りしていたという。しかし、このカメ塚は現在は残っていない。一磨氏によると、昭和五一年（一九七六）に道路の拡幅にあたって移転せざるをえなくなり、本宅へ持ってきたという。ちょうどそのころ、遠洋漁船が減ってきて、船が合併して会社組織になった。船がなくなってくると、信仰心もなくなってくるといい、住職にお経をあげてもらってカメ塚を撤去したという。

白羽地区の駿河湾側の西の端にもカメ塚がある。『浜岡町史』で「久々生（くびしょう）の亀塚」として紹介されている事例で

写真52　新谷のカメ塚付近（表1 No.29・30）（2013年3月撮影）

写真53　新谷のカメ塚（表1 No.32）（2007年ごろ撮影、御前崎市教育委員会提供）

ある（表1 NO、32、写真53・54）。林の中に、「海亀霊位供養之塔」などと書かれた木の杭が立ち、幟旗が立っている光景の写真が掲載されている。地元の漁師衆が祀ったもので、出漁や帰港の際に参詣する、という記述があるだけで、詳しいことは分からない。その後、御前崎市教育委員会の案内で、高野氏は平成二一年（二〇〇九）六月・一二月に調査を行っており〔高野　二〇一〇〕、田口氏の報告にも掲載されている〔田口　二〇一一〕。この段階では、木の杭は立っていなかったようである。ただし、「奉納　御亀大明神　平成二十年度　御礼拝　第八光照丸」などと書かれた赤い旗が立っていた。平成一八年から二〇年までの旗が確認されたといい、第七光照丸の旗も見られたという。高野氏の論考には写真も掲載されており、赤い旗も写っている。なお、平成二一年（二〇〇九）一二月二二日に調査した際には、二一年度の旗はまだ立っていなかったという。平成二一年には、御前崎の遠洋漁業の大型漁船は、光照丸と日光丸のみであった。毎年一二月下旬に、その年の大漁や安全航海を感謝してお参りし、赤い旗を供えているというが、高野氏の調査では光照丸の船主は、「亀塚」へのお礼参りは知らなかったという。

筆者は平成二五年（二〇一三）二月、教育委員会の鈴木

写真55　新谷のカメ塚入り口（表1 No.32)(2013年2月撮影)

写真54　新谷のカメ塚（表1 No.32)(2013年2月撮影)

氏、坂本氏の案内で現地を訪れたが、旗も立っておらず、祀っていないような雰囲気であった（写真54)。このカメ塚の由来を知っている方からの聞き取りもできなかった。これまで、このカメ塚の所在地は久々生とされていたが、厳密には白羽地区新谷（あちや）のエイゴという地域になることが分かった。同年三月、斎藤正敏氏の紹介で、このカメ塚を祀り始めた方が分かり、高塚みち氏（昭和二年生まれ）と息子の高塚清氏（昭和二二年生まれ)、近所の高塚みさ氏（昭和一〇年生まれ）から以下のような内容を聞くことができた。

カメは昭和三五、六年に拾った。はっきり覚えていない。そのときは漁がなくて一生懸命だった。カメ様が助けてくれると思って拾った。漁を授けてもらいたいと思ってやった。カメをいけた（埋めた）ときはみち氏の夫が役をもっていたから一生懸命だった。清氏のおばあさん（みち氏の夫の母親）がやった。カメは死んで上がっていた。拾っていけた。夏だったと思う。寒い時期ではなかった。寄るものは秋ぐらいか。年寄り衆が拾った。寄ってるというので、若い衆も見に行った。清氏は見ていない。イカイ（大きな）カメだった。隣のおじいさんも手伝ったと思う。男衆はいないので、年寄りか女衆が行った。年寄り衆がお祀りした。みち氏は尾高にも

カメを祀っていると聞いている。行ったことはないけど。昔からカメを祀るところがあると聞いている。漁の調子がよくないので、祀ればよくなると思って祀った。いけたのは区の山。

去年（平成二四年）の暮れに船を解散した。年の暮れにオイアゲといって、お礼参りに行く。勘定をして区切りをする。カメにも旗を持って回った。柱を立てていた。太い木で縄をつけていた。清氏も覚えている。オッサマ（住職）に作ってもらった。ボーグイを拾ってすぐには立てていなかった。しばらくして立てた。最初は石を置いて盛っていた。宗心寺（曹洞宗）から来てもらった。柱にはカメ様などと書いてあった。

カメを埋葬して祀り始めた経緯は以上のようなことであった。埋葬した当事者は亡くなっているが、中心になっていた方の義理の娘と孫、および近所の方に話を聞くことができた。みち氏の夫は船長、漁撈長などをしていたために、その母親が船に漁があるようにということで漂着したカメを祀ったようである。その後も、光照丸の女衆が毎年お礼参りなどをしていたが、船が解散するにともなって、カメ塚の祭祀もおこなわなくなった、ということが分かった。

写真 56　波津のカメの墓跡（表 1 No.33）（左側に海岸、右側に線路跡がある）（2013 年 8 月撮影）

e　牧之原市

牧之原市波津にカメの墓があることは、『さがらの伝説百話』に「亀の墓」として紹介されている〔相良町文化財専門委員会　一九六九〕（表１ＮＯ．33）。この本によると、静岡鉄道駿遠線（軽便鉄道）の波津駅から南に

三〇〇メートルほどの辺りカメの墓があった。[15] 国道が開通する前は、この辺り一帯は松林であった。カメの墓は、松林の中にあり、小さな土饅頭になっていた。漁師が大漁祈願のために立てた、赤い布で作った幟も立っていた。この辺りは、カメが卵を産みにきたところであった。線路を越えて上がったカメが、海に帰るときに列車にはねられて死んだことがあった。翌朝、カメの死骸を見つけた村人が葬ったという。確かなところは分からないが、後述する大江地区でカメを祀ったあと、同じように列車にはねられて死んだカメを祀るようになったとも考えられる。平成二五年（二〇一三）の筆者の調査では、牧之原市教育委員会の長谷川倫和氏に案内いただいたが、カメの墓の痕跡をみつけることはできず、カメの墓に関する話を確認することもできなかった。

写真 57　大江のカメの墓（表 1 No.34）（右側が萩間川、左側に線路跡がある）（2013 年 8 月撮影）

牧之原市大江にもカメの墓がある（表１ＮＯ．34、写真57）。これは、『遠江の伝説』、『さがらの伝説百話』に、「亀のホロリ涙」として取り上げられている〔小山　一九四二、相良町文化財専門委員会　一九六九〕。要約すると以下のようになる。

太田浜には大雨になるとカメが産卵に上がったという。駿遠線の線路を越した「大亀」が引き返すときに終列車がカメをひき殺した。それから、終列車が通ると、線路に女が立っていて、汽笛を鳴らしても動かない。しかし、停車すると女の姿は消えている。このようなことが三か月も続いたので、祠を建てて祀ると、女は現れなくなった。カメの祟りであろうといわれた。祠は漁師が信仰している。（筆者要約）

牧之原市教育委員会の松下善和氏の案内で、平成二五年

（二〇一三）に太田浜を訪ねた。萩間川の河口付近に、大正八年（一九一九）と書かれたカメを祀った石碑が立っていることを確認した。太田浜は大江という集落の小字である。軽便鉄道の跡は歩道になっている。線路跡と荻間川の間に道路がある。松下氏によると、この道路の部分にカメの祠は立っていた。二〇年ほど前、道路を広げたために、祠の中の石碑だけを横に移したという。

松下氏は、昭和三年生まれの祖母からこの話を聞いていたという。松下氏の祖母は、カメが軽便鉄道にはねられたと語ったが、女の人が立っていたということは言わなかったという。この辺りの軽便鉄道は大正七年（一九一八）に開通したというため、カメを祀ったのはその翌年ということになる。大江には昭和五〇年代までは漁師がいたが、現在はほとんどいないという。なお、筆者の調査後、平成二五年（二〇一三）一一月に日本ウミガメ会議が牧之原市で開催された。このとき、編集された『日本ウミガメ誌二〇一三』には大江のカメの墓が掲載されている〔亀崎　二〇一三〕。

・大江のカメの墓（表1　NO．34）

（正面）亀　大正八年七月□日

高さ　六五・五cm

幅　二八cm

奥行　一三cm

f　遠江のウミガメ供養習俗のまとめ

以上のように、ウミガメの供養習俗は、浜松市から牧之原市までの遠江一帯に点在しており、とくに御前崎市にとくに集中していることが分かった。ただし、死んでいるウミガメを埋葬するだけで、とくに墓などを作らない場

合も多かったようである。『下岬の民俗』には、カメの死体を見つけたときは、海水のこないところへ埋めて手近な石を置いてお神酒をあげるだけで、そのあとはとくに拝みに行かないというのが普通であるが、ときにはカメ塚を作る場合もあった、と記されている〔静岡県教育委員会文化課県史編さん室　一九九〇〕。また、死んでいるウミガメがいると必ず埋葬するというものでもなかった。御前崎では、漁民やその家族が大漁を願って、死んだウミガメを供養するという形態が多かったようである。漁民のなかでも、コリョウ（小漁）船と呼ばれる近海漁業ではなく、遠洋でカツオなどを対象とする漁民とその家族がとくに祀ってきた。とくに、漁民の母親や妻など、留守を預かる女性たちが祀る場合が多かったようである。ウミガメ供養は船単位でおこなっており、自分たちが埋めたウミガメ以外には参らないし、知らない、という場合が多いようである。ところが、どの船でもウミガメを祀るわけではなかった。夫が漁師であった御前崎市上岬の松林千寿代氏（大正一五年生まれ）は、「シビト（水死体）は拾うが、死んだカメは聞いたことがない。」という。御前崎の漁民たちは、水死体も漁を授けてくれるということで拾い上げて祀ってきた。御前崎では、海で漂っている漂流物、海からやってくる漂着物を拾い上げて利用したり、祀るという習俗もあった。ウミガメの死体も、海からの漂着物であるが、とくに漁を授けてくれるものという意識があった。このほか、御前崎では漁場を教えてくれるということでキツネを祀る風習もある。

しかし、保護活動が盛んになってくると、死んだウミガメがあっても、漁民は自分たちで埋葬せず、役場に連絡するようになった。御前崎市下岬の吉村孫俊氏（昭和一七年生まれ）は、三〇年ぐらい前、カメを松林にいけようと（埋葬しようと）したことがあったが、役場に連絡すると、引き取っていった、という。平成一二年（二〇〇〇）から一五年（二〇〇三）に教育委員会に勤務していた斎藤正敏氏によると、昭和五〇年代ごろからカメ塚は作られなくなったという。死んだウミガメがいると教育委員会に連絡が入る。すると、役場の職員とウミガメ保護監視員が死んだカメを担いで上げて、孵化場の辺りの浜で波を越さないようなところを選んで葬るように

写真59　松尾氏が拾い上げたアルミ製のブイ（1999年2月撮影）

写真58　松尾長作氏（1999年2月撮影）

なった。

7　流木の習俗

海を漂う流木に魚群がつくことは民俗知識として漁民に知られている。御前崎市ではこれをキツキ（木付き）と呼んでいる。こうした流木にウミガメも一緒に漂っていることがある。こうした場合、ウミガメが枕にしていたという意味で流木のことを、御前崎市ではカメノマクラと呼んでいる。御前崎市のカメノマクラのことは、『ウミガメのふるさと御前崎』などで触れられている〔御前崎町　一九八三〕。ただし、一般的な紹介のみであり、具体的な事例としては紹介されていない。『下岬の民俗』、『静岡県史　資料編二五　民俗　三』には、具体的な事例として、御前崎地区西側の松尾長作氏のカメノマクラが報告されている〔静岡県教育委員会文化課県史編さん室　一九九〇、静岡県一九九一〕。松尾氏の事例については、ウミガメ供養の項目においてすでに取り上げたが、今一度みておく。平成一一年（一九九九）の筆者の調査時には、カメの祠の右側にカメノマクラが横にして置かれていた（写真49）。このときの実測では、流木の現在の長さ一六〇cm、最大幅二五・六cmであった。平成二五年（二〇一三）の調査時には、ほと

んど朽ち果てていて、確認できなかった（写真50）。先述した松尾氏からの聞き取り内容からすると、松尾氏が流木に出会ったのは、カツオ漁のときであった。流木にカツオの群れがついていたので喜び、流木と、流木とともに一緒にいたウミガメを拾い上げていた。松尾氏の語りからは、まずは、キツキという現象、つまり、流木に魚群がついていて大漁に恵まれた、という状態を喜んでいることがうかがえる。松尾氏はキツキについて次のようにも語る。

ナブラは水面がざわついており、波の濃い方に進んで行く。群れの頭に船をもって行くと魚が沈んでしまうため、頭を押さえないように船をもって行く。また、魚を風下に見るように船を進めないと、釣ることができない。流木はナブラの中心に浮いているため、流木を抱え込むようなかっこうで船を進める。木に船をつけると魚は沈んでしまう。

潮のよどみには黒潮の本流や支流が流れており、水温の境目に魚はいる。サメ付き（コロ付きともいう）といってジンベエザメに付くこともある。サメは泳ぐのが遅い。鯨につくことはあまりない。その後、昭和三三、四年にもほとんど同じところで一〇〇〇貫ほどのカツオを釣った。このときは、米軍の水上機を係留するアルミ製のブイ（長さ一六〇cm）が逆さになって漂っていて、これに魚がついていた。このときも、カメのときと同様、面白半分で上げた。今も庭に飾っている（写真59）。

このように、流木やウミガメでなくても、海上を漂流していて大漁させてくれた漂流物を拾い上げている。御前崎の漁民がカメノマクラを大事にする意味はここにあるといえよう。

筆者の調査では、御前崎において、ほかの事例についても確認をした。御前崎地区下岬の鈴木圓司氏（大正一一年生まれ）は次のように語る。

カメが乗って寝ている流木をカメノマクラギ（亀の枕木）と呼び、見つければ縁起物として拾った。そう当た

るものではなく、貴重なもの。見つけると、魚を取るよりもこれを上げることが先。昭和一三年から昭和五〇年まで、沢入市夫の船（日吉丸）で乗組員として漁業をしていたが、カツオの一本釣りをしていたとき、三陸沖で二、三回見たことがあり、二回ほど拾った。とくにそのとき大漁をしたことはなかった。カメと流木だけで、周辺に漂っているものもなく、魚もついていなかった。カメの大きさはいろいろ。見ても上げないこともあるが、板切れでも拾うときもある。船長など偉い人が上げようといわないと拾わない。拾ったのは戦後であるが、いつかははっきり覚えていない。浮いているのでカタギでもない。ロープで輪を作って、カギで木の両側からかけて引き上げた。拾うと、カワチ（代わり）に船にある木を何でもカメにやる。カメはどこかに行ってしまうが、カメには洗米を撒いた。船へ上げると、人が踏んだりしないようにコバへ縛っておいた。船主の家の庭にあった稲荷様の横に立てた。はしけのオカ（砂浜の海岸）に立てたこともある。各船はそれぞれ自分の付け場があるのでそこに立てた。水揚げしてから、オキアガリといって船主の家で一杯飲むときに祀っていた。フナカタは手を合わせるだけ。出港のときは、全員そろって氏神の駒形神社に参り、すぐに出るため、船主の家には行かない。流木はタチッキといって、立ってぶくぶく浮き沈みしている方がよい。ブイで大漁したこともある。船には御前崎の人だけ乗っていた。

鈴木氏の語りからは、日吉丸でもカメノマクラは何度か拾っていたことが分かった。カメは洗米を撒いただけであったという。拾い上げたカメノマクラは船主の家で祀っていたことが分かる。松尾氏の事例よりも大々的に祀っていたようである。このことは、御前崎地区下岬の服部巽氏（昭和四年生まれ）も知っていた。ただし、日吉丸の船主の家は二〇年くらい前に新築し、代替わりして、今はないという。

白羽地区中原の増田義雄氏（大正七年生まれ）によると、宝永丸もカメノマクラを拾い上げていたという。

カメは流木に乗っかって休むらしい。これをカメノマクラという。流木には小さい魚がついており、そこに大

きな魚がよってくる。キヅキという。木を見ると漁をしたので、カツオ船の衆は流木を探した。流木を見ると漁をした。子どものころ、宝永丸の船主（滝氏）の家に同級生がいたのでよく遊びに行った。そのとき、その庭にカメノマクラが立っているのを見た。長さ二間、幅一尺五寸ほどの杉の木であった。正月前に、漁を切り上げる。そのときにオヒマチをする。船主の庭に寄って、神主さんに頼んで拝んでもらっていた。そのときに御幣を立てて、大漁祈願をしていたように思う。

滝さんの親は源兵衛。大正の初めごろか、昭和になってからか。キヅキで漁をすれば発信機をつけてまた漁をした。自分が釣った場所は言わない。これで漁が終わりになると拾ってくるかもしれない。

宝永丸は一〇〇トンぐらいの船だった。カツオの一本釣りをして、小笠原からトラック諸島まで出漁していた。監視艇をしながら漁をしていた。

写真 60　小野田市雄氏（左側）・ふさ氏（右側）（2013 年 3 月撮影）

増田氏の子どものころの記憶であるが、日吉丸と同様に祀っていたようである。しかし、宝永丸は終戦後漁業をやめている。代も代わり、家も立て替え、カメノマクラは今はないという。滝花枝氏（大正一〇年生まれ）にも確認したが、聞いたことがないという。

御前崎地区女岩の小野田市雄氏（昭和四年生まれ）もカメノマクラを拾い上げていた。

カメが流木にとっつかまっとると、板を投げて交換する。流木のことをカメノマクラという。小野田氏も拾ったことがある。拾うと大漁する。航海中に見ると必ず拾った。何回もある。カメノマクラ

は有名だった。持ってきて祀った。船主の家の表に立っていた。小野田氏が子どものころからあった。船主の家で大黒柱ぐらいの太い柱を立てて祀っていた。

小野田氏が乗っていたのは栄福丸である。船主の家では、カメノマクラとともにカメ塚も祀っていた。これについては、先に触れたところである。現在は、船主の家の屋敷はなく、カメ塚、カメノマクラともになくなっている。ところが、小野田氏からは、川口佐七氏の家でもカメノマクラを祀っていることを教えていただいた。川口氏の家は昭鵬丸のち、海鵬丸の船主であった。川口氏の家では、現在もカメノマクラが立っている。屋敷の中のお稲荷さんの横に祀っている（写真61）。

写真61　川口佐七氏の家のカメノマクラ（2013年3月撮影）

・川口佐七氏の家のカメノマクラ

高さ　三三〇cm

直径　二四cm

実際に拾い上げて祀らなくても、御前崎ではカメノマクラのことは広く知られていたようである。ただし、次第にカメノマクラを拾い上げることはなくなっていったようである。白羽地区薄原の小野田武氏（昭和一四年生まれ）は次のように語る。

カメはゆっくり泳いでいるとき、流木と一緒に泳いでいることがある。それをカメノマクラという。それはカメが枕にしているので、へこんでいるという。カメノマクラは小さな木。キヅキの木のように大きくはない。新しい木ではない。昔は拾うとよく祀ったという。

自分も見たことがある。カメは潜る。実際に拾ったこともあるが、持ってきたことはない。暇だから拾っただけで、自分たちの世代ではそれをありがたがることはなかった。遠洋の人がよく拾った。

大正生まれや昭和初期生まれの方は、喜んでカメノマクラを拾い上げていたが、昭和一〇年代生まれの世代になると、知ってはいるが、遊び半分で拾い上げる程度で、祀ることはなくなっていたようである。

8　剥製

御前崎市の松尾長作氏は自宅にタイマイの剥製を飾っている（写真62）。これは、ジャワ沖でマグロをとっていたときに、サメのはらわたの中からベッコウガメ（タイマイ）が出てきたことがあり、これを持ち帰ったものであるという。しかし、遠江では、ウミガメの剥製を飾ったり祀ったりする習俗はあまり確認できなかった。

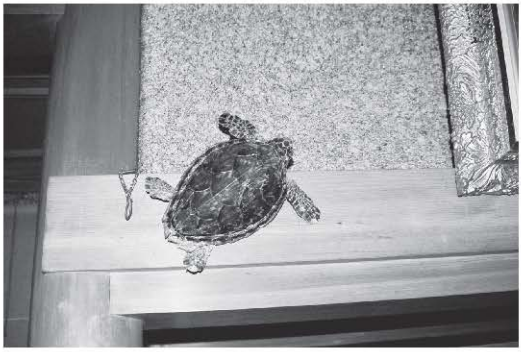


写真 62　松尾長作氏宅に飾られるウミガメの剥製（1999 年 2 月撮影）

三　駿河のウミガメの民俗

1　生態と歴史

現在、駿河でのウミガメの産卵は調査されておらず、正確な情報は分からない〔亀崎　二〇〇二〕。しかし、次に紹介する江戸時代の記録によると、静岡市付近でもウミガメは産卵していたようである。

江戸時代に編纂された『駿国雑志』にはウミガメに関する記述がある。これは、旗本・阿部正信が駿府（現、静岡市）に赴任した際に調

査を開始し、天保一四年（一八四三）に完成した地誌で、内容は地理、歴史、風俗、人物伝記、動植物等々多岐に渡っている。『駿国雑志』の「介甲」の分類の中に「亀」という項目が立てられている〔阿部　一九七七〕。

伝云。有渡郡久能浦、亀多し。其大成は二三間、小成は八九尺に及べり。夏日汀砂の内に卵を産み、毎日其辺に来て、是を守る。人若誤て其砂上を踏み、或は是を拾ふ、忽讎し、其人を捕へ、沖に到て、嫩殺し、又もとの所に連来て、是を捨つ。肯て食ふ事なし。云云。又云。清水の海にどん亀と称する亀あり。若網に懸りて揚る事ある時は、必酒を呑ましめ、放ち遣る。然せざれば、讎して其日猟なし。土俗是を号て海神と云へり。云云。里人云。川亀は、味ひ石鰲に勝れり、酒家四時ともに是を調理し肴とす、佳也。

現在ではウミガメの産卵は確認されていない地域であるが、久能浦（現、静岡市駿河区）でも産卵していたことが書かれている。ただし、このウミガメは卵を踏んだり採ったりした者を沖へ連れ去り殺してしまうという恐ろしい存在であったという。また、清水（現、静岡市清水区）では、ウミガメが網にかかると、必ず酒を飲ませて放していた。このようにしないと漁がないといわれていた。静岡市周辺では、ウミガメは「海神」と呼ばれ、恐れられる存在であったようである。

2　食用習俗

焼津市はカツオ漁が盛んな地域であった。焼津のカツオ船では、イルカやマンボウは食べるが、基本的にはウミガメは縁起物として食べなかった。カメの肉を食べると出世しない〔静岡県教育委員会文化課県史編さん室　一九九三〕、カメを食べると漁がなくなる〔焼津市総務部市史編さん室　二〇〇三〕、などといわれた。反対にマンボウは捕らないと漁がないといわれ、船を止めてでも捕った〔焼津市史編さん委員会　二〇〇七〕。筆者が聞き取りをした、浜当目（はまとうめ）の山田常吉氏（大正一四年生まれ）は以下のように語る。山田氏は事代丸の船主であり、自身も

カツオ漁に出ていた方である。

うちの衆はカメを食わない。土佐の衆はカメを食べる。カメは縁起もんという。鶴は千年、亀は万年という。カメを大切にする。

ところが、カツオ船では、網にカメがかかると食べることもあったようである。大正三年（一九一四）生まれのカツオ漁師の語りでは、「コガメは煮え湯に突っ込むと甲羅が抜けるので刻んで醤油で食べた」という〔焼津市総務部市史編さん室　二〇〇四〕。

石津では、ウミガメの卵は食べる人と食べない人がある〔静岡県教育委員会文化課県史編さん室　一九九三〕。浜当目では、カメの卵を採った話が詳しく報告されている〔焼津市総務部市史編さん室　二〇〇三〕。要約すると以下のような内容である。

写真 63　石津の浜（2013 年 8 月撮影）

写真 64　浜当目の浜（2013 年 8 月撮影）

カメの卵は滋養があるといって病人に食べさせた人もいた。カメは夏の夜に産卵する。カメが歩いた跡がついているので、明るくなるとすぐに見つけられる。早いもの勝なので、朝一番に浜へ行って採った。中には

売った人もいた。

浜当目の山田常吉氏（大正一四年生まれ）は、「卵を食べたけど、うまくなかった。ざらざらしている。」と語る。

3　放流習俗

焼津市でもウミガメが上陸すると、酒を飲ませて返す習俗が広がっていた。地曳網が盛んであった和田では、網にカメが掛かることがあった。カメが掛かると、カメに酒を飲ませて海に返した。そのとき、カメは涙を流すといわれていた〔静岡県教育委員会文化課県史編さん室　一九九三〕。石津の浜には戦前まではよくカメが産卵に上がった。「産後のカメは酒をくれてでも返してやれ」といわれていた〔静岡県教育委員会文化課県史編さん室　一九九三〕。浜当目の浜にもカメは産卵に上がった。ここでも酒を飲ませて海に返した〔焼津市総務部市史編さん室　二〇〇三〕。平成二五年（二〇一三）八月の筆者の調査では、山田常吉氏（大正一四年生まれ）から以下のような話をうかがった。

堤防ができる前は砂浜だった。一〇〇メートルぐらい砂浜だった。海まで行くのに、熱くて飛んで行った。そのじぶん、カメが時期になると卵を産みにきた。アカガメか。一五〇から二〇〇の卵を産んだ。カメが上がるのは見たことはない。上がった足跡は見た。見た衆はカメに酒をくれたという。飲まないだろうが、かけたのか。砂浜が長かったので、いくつも上がった。カメは上がると足跡がついている。

カツオ船では、カメが泳いでいるのを見つけると、船からカメに向かって酒と洗米を撒き、甲板にいる全員で拝むことがあった〔焼津市史編さん委員会　二〇〇七〕。カメを船に引き上げて酒を飲ませて海に戻すこともあった〔静岡県教育委員会文化課県史編さん室　一九九三〕。

4　供養習俗

焼津市石津では、死んだカメは浜に埋葬する習俗があった。『石津の民俗』には、ウミガメの墓について三か所に記述がある〔静岡県教育委員会文化課県史編さん室　一九九三〕。第一章（p一五二）には、①乙女ヶ浜の北側にあった埋め場に納めた、第五章（p一八〇）には、②竹の柵で囲ったカメの墓があって盆には僧侶を招いて供養もした、第五章（p二一九）には、③ハチベエサンの石碑の近くに埋葬したが、とくに石碑は建てなかった、とある。『焼津市史』では、このうち②と③について触れている〔焼津市史編さん委員会　二〇〇七〕。この記述を見る限り、カメの墓が複数あるのか、同じものを指すのかは分からない。

写真 65　八千代丸・三国丸のカメの墓（表 1 No. 36）（2005 年 10 月撮影）

写真 66　八千代丸・三国丸のカメの墓（表 1 No. 36）（2013 年 8 月撮影）

筆者は平成二五年（二〇一三）八月の調査で、石津浜公園の北側と南側において、複数の方にお話をうかがったが、ウミガメを埋めた墓についてはだれも知らなかった。石津浜公園の北側には、第五福竜丸が捕ったマグロを埋めた場所がある。ここにはいろんなものを埋めたらしいということを、五〇代の男性に聞いた。石津浜公園の南側に

写真67　事代丸のカメの墓（表1 No.37）（2013年8月撮影）

写真68　山田常吉氏（右）と薮内駿河男氏（左）（2013年8月撮影）

は、波除地蔵とハチベエサンが祀られている。地蔵の前を掃除していた八〇代ぐらいの女性もカメは知らないという。公園で談笑していた六〇代から九〇代ぐらいの六人ほどの女性もカメは知らないという。したがって、カメの墓が複数あったのか、一か所であったのか、ということは分からなかった。

『浜当目の民俗』には、焼津市浜当目にウミガメを祀った墓が二か所あることが報告されている〔焼津市総務部市史編さん室　二〇〇三〕。事代丸と七右衛門丸が昭和二八年（一九五三）に建てた石碑（表1 NO. 37、写真67）と、八千代丸と三国丸が昭和六二年（一九八七）に建てた祠（表1 NO. 36、写真65・66）である。筆者は平成一七年（二〇〇五）に現地を訪ねたが、このときは関係者に聞き取りをすることができなかった。平成二五年（二〇一三）八月に再び現地を訪れたときには、事代丸の船主であった山田常吉氏（大正一四年生まれ）から聞き取りをすることができた。以下、山田氏の語りを紹介する。

亡くなったカメを石垣の下へ埋めた。今までおまつりをした。最近、かかりのおじさんが亡くなったのでやめた。山田氏は、今でも毎日、水をあげている。コウバナ（シキミ）もあげる。山田氏は、カメを埋めたとき、洋上にいたので知らない。カツオ漁だった。父と七右衛門丸で埋めた。死んでよさってた（寄っていた）のか。拝んでくれたのは弘徳院のオッサン（住職）。今は息子。今の住職は拝みに来たことはない。一年に一ぺん、五月の建てた日にオッサンを呼んで、お経をあげてもらって、あげものあげて、石碑の前にござを敷いていっぱいやった。七右衛門はあんまり来なかった。両方の船で建てたけど、あんまり出て来なかった。ほかの人は来ない。船元関係だけ。通りがかりの人が賽銭をあげてくれることもある。カメの墓という。カメ塚とはいわない。これは塚というものとは違う。石碑の下にある土台は最初はなかった。土台は山田氏が作った。カメのかっこうにしている。石碑の隣の木もカメのかっこうにしている。カメの墓の横には船小屋があった。後は畑。船小屋では、年寄りが船へ持って行く道具をこしらえたりしていた。小船を中へ入れていた。

山田氏は漁に出ていたときに祀られたものであるというが、船主が死んだカメを祀ったものであった。当番の方が亡くなって祭祀はやめたというが、山田氏は個人的に拝んでおり、形状にも変化はない。一方、八千代丸と三国丸はいずれも船をやめており、浜当目にはいないということで聞き取りはできなかった。平成一七年（二〇〇五）に訪ねたときには、祠の右側にカメの形の石造物があったが、平成二五年（二〇一三）にはカメ形石造物は見当たらなかった。

このほか、浜当目では、死んだウミガメの首や手などを船内に祀るフナダマ様に供えると豊漁になるともいわれた〔焼津市総務部市史編さん室　二〇〇三〕。

・八千代丸・三国丸のカメの墓（表1 NO. 36）

高さ　五〇cm

台座高さ　六〇cm
台座（下）高さ　七cm

・事代丸のカメの墓（表1 NO. 37）

（正面）南無八大龍王眷属亀之霊供養墓
維時昭和廿八年五月十九日
施主　事代丸　七右衛門丸

石碑高さ　一二二cm
幅　三三cm
奥行　一三cm
カメ形高さ　一〇cm
長さ　一一〇cm

『沼津市史』などに、沼津市松長の林の中にカメを葬ったという事例が出ている〔沼津市教育委員会文化振興課一九九九、沼津市史編さん委員会・沼津市教育委員会編　二〇〇二〕（表1 NO. 38）。松長は駿河湾に面し、単調な砂利の浜が続いており、半農半漁の地曳網漁が盛んであった地域である。沼津市松長は江戸時代までは駿河国駿東郡に属していたため、この事例は駿河に分類しておく。『沼津市史』などには、昭和六年（一九三一）生まれの男性が語ったこととして、小さいころには、カメが上がると、漁があるからと、林の中に葬ったと記されている。ただし、沼津市歴史民俗資料館では、カメの墓は把握しておらず、筆者も現地調査を行っていないため、現状は不明である。

駿河では焼津市と沼津市で供養習俗を確認することができた。焼津市には複数の事例が確認できるが、その他の地域では今のところ確認できていない。遠江と同様、供養習俗は、死んでいるウミガメがいると必ずおこなわれるものではなく、流行性があるようである。

5　流木の習俗

焼津市にも、ウミガメがまとわりついている流木を拾い上げて祀る習俗があった。北浜通りの漁民がまとめた『漁方雑話』には以下のように出ている〔北原　一九九二〕。

亀が流木にまつわり付いている時は、代わりの木を亀に与えて流木を拾い上げると大漁すると言う。此れを亀の枕木と言って、古い船元の家の神棚や床の間に大切に飾ってあるのを見たことがある。

北原氏の住んでいた北浜通りは船元が多い地域であった。筆者は実際に焼津市で流木を祀っている事例を確認することはできなかった。

石津でも、カメノマクラギの風習があった。カメが流木につかまっているのを見かけると、船元などがその流木を拾い上げ、縁起物として床の間などに飾った〔静岡県教育委員会文化課県史編さん室　一九九三〕。なお、浜当目ではこの習俗は報告されておらず、筆者も聞き取ることができなかった。

四　伊豆地域のウミガメの民俗

1　生態

伊豆でのアカウミガメの産卵については、下田市の下田海中水族館による調査が報告されている〔亀崎二〇〇二〕。一九九〇年代、下田市の三か所の浜で調査されているが、上陸回数は多くて年間四回となっている。

遠州灘のように長大な砂浜がないため、ひとつひとつの砂浜での上陸・産卵頭数としては多くはないようである。しかし、野本氏によってウミガメの産卵に関する民俗知識が採集されており、筆者も松崎町、南伊豆町、伊東市での産卵を聞き取ったため、下田市に限らず、伊豆各地の砂浜でアカウミガメが産卵してきたと考えられる。

写真69　南伊豆町の弓が浜（2008年12月撮影）

2　民俗知識

伊豆では野本氏によってウミガメの産卵に関する民俗知識が複数報告されている。下田市白浜では、ウミガメが六月ごろに産卵に上がった。カメは神様と語り伝え、産卵の邪魔をするのを避けたという〔野本一九八七〕[16]。下田市吉佐美の大浜では、六月末から一一月まで地曳網を引いた。その間の六月から八月まではウミガメの産卵期と一致するので、折々アカウミガメを見かけたという〔静岡県　一九八九〕。西伊豆町仁科の大浜にもアカウミガメが上がった。ここでは、「カメが多く上がる年は台風がない」といわれる〔静岡県　一九八九〕。河津町今井浜にはミツメノアカガメとよばれる大きなアカウミガメが上がったという〔静岡県　一九八九〕。河津町見高では、カメが上がると、人々は「オカへ産んだか」、「オキへ産んだか」と会話をしたという。カメがオカへ卵を産んだ年は台風が大きく、オキへ産んだ年は台風が小さい、という。また、カメが卵を産んで一週間たつとシケがくるともいう〔静岡県一九八九〕。

筆者は、南伊豆町、松崎町、伊東市において、ウミガメについて人々が知っていたことを聞いた[17]。南伊豆町子浦

で漁業をおこなってきた小久保安治氏（昭和五年生まれ）は次のように語る。

南伊豆町の弓が浜には毎年、何頭か来る。最近は大きくならしてから放している。保護している。子浦でも何回か上がったという。くれば、浜にあとがついているので分かる。

カメは文句を言わないし、暴れないし、おとなしいもん。網を破られることはない。小久保氏は、水面に浮いているのを見るだけ。その年によって、全然見ないこともあったり、あちこちで見かけることもある。沖合いで見かける。年によって数は違う。サケみたいに、産まれた棲みかが自然に分かっている。寒くなって、北西の季節風が吹く一一月ごろから、沖合いに行かなくなる。一二月まで静かで、正月から風が吹き出すこともある。海が静かな四月から一〇月、一一月ぐらいに沖へ出る。このときに、カメを見る。青いカメと赤いカメがいる。二種類ぐらいしかわからない。カメは昔ほど見掛けない。（岬の下によく浮くポイントはないか、という問いに）捕って食べようという人がいないので関心がない。知らない。

松崎町岩地の斎藤氏（昭和二三年生まれ）は次にように語る。

岩地の浜にもカメは産卵にきた。二か所ぐらいに卵を産む。岩地の浜は四つに分かれる。南が小浦浜。その北は西の田。田んぼがある。その北は谷地（やち）。一番北がゴウドの浜。産卵するのはゴウドの浜が多かった。母はゴウドの浜のあたりが実家だった。母親が子どものころはいつも来ていたという。親が酒をあげたり、応援した。カメは涙を流していた。孵化して帰った。孵化して帰るところを見たという話は聞かない。一五年ほど前、砂浜の真ん中に設置している温泉船（温泉を入れた船）のところで産卵した。ニュースになった。当時の区長が、柵をして保護した。それ以外は来ていない。

伊東市新井の石井英雄氏（昭和二年生まれ）は以下のように語る。

カメは卵を産みに来ることもあったらしい。西の浜は砂浜だった。岩がなくて、純粋の砂浜であった。広い浜

であった。卵を食べた話はないと思う。東は砂浜がなかった。松原はカメが上がった。

以上から、伊豆半島南部のみならず、北部の砂浜でもウミガメの産卵はみられたようである。産卵地の人たちは、ウミガメの産卵に関する知識を持っている。また、漁業に従事している方は、海で見かけるウミガメのことも知っていた。このほか、伊東市八幡野の太田小千代氏（明治四一年生まれ）は、「この辺りで卵を産んだことは聞いたことがない。死んだカメは見たことがない。」という。しかし、後述するように、ウミガメが流し網にかかることがあるのは知っている。このように、産卵する砂浜がない地域でも、網にかかるウミガメのことは知っていることが分かる。

3　食用習俗

古代、ウミガメの甲羅を焼いて占う亀卜をおこなう人々が伊豆にいた。『延喜式』には、対馬、壱岐とともに、伊豆からも亀卜をおこなう卜部を五人選ぶとしている。ただし、ウミガメの捕獲・食用習俗が盛んであったのは、伊豆半島ではなく、伊豆諸島であった。伊豆諸島では昭和時代でもアカウミガメやアオウミガメを捕獲する技術があった。したがって、亀卜をおこなった人々は、伊豆半島ではなく、伊豆諸島の出身ではないかと思われる〔藤井　二〇〇六〕。

伊豆の人たちが食べた記録ではないが、江戸時代末期に、下田に来航したアメリカ人がウミガメを食べたという資料が残っている。『ペルリ提督日

写真70　アメリカ人がウミガメを解体する図（「下田絵巻」一般財団法人　黒船館所蔵）

本遠征記』には以下のようなことが記されている〔土屋　一九五五〕。ペリー艦隊が下田に滞在中、遅れて到着したマセドニアン号が小笠原諸島でウミガメを捕ってきた。「同船のもって来た立派な海亀の肉は大いに歓ばれ、艦隊内の数艦に分配されて盛んに賞味された」とある。「日本人が一般に信じてゐる仏教と人民の単純な習慣との結果、食用として手に入れ得る動物が殆どないために、下田の市場には新鮮な肉が充分になかった。」ということで、アメリカ人は魚や野菜以外は、ビスケットと塩漬け牛肉を食べていたという。日本側の資料である「下田絵巻」によると、「料理方如此御役方乗船ノ節御馳走ニ料理シ、玉子エ白砂糖ヲ添、応接方エ出ス黒川殿一ツ給ル、其外ハ不残不喰由、ペルリヘモ出ス、血ニテ煎物致ス、切動ク処ヲ直ニ砂糖ヲ付喰ス」と書かれており、ひもで首を縛って吊り下げられたウミガメをアメリカ人が切っている様子が描かれている[18]（写真70）。日本人にもウミガメ肉や卵が振る舞われたが、浦賀奉行組頭の黒川嘉兵衛のみ卵を一つ食べただけで、あとの者は食べなかった。

伊豆の人々がウミガメを食べることもあったと思われるが、昭和時代になると、伊豆ではほとんどウミガメを食べていないようである。筆者が聞いたところでは、南伊豆町で昭和三〇年代にウミガメを食べるところを見たという方がいた、という程度であった。食用の習俗がほとんどないため、食用に関する報告も少ないが、沼津市内浦ではカメの肉は食べないと報告されている〔沼津市歴史民俗資料館　一九七六〕。

しかし、他地域の人がウミガメを食べることはあった。伊東市八幡野の太田小千代氏（明治四一年生まれ）は以下のように語る。

カメは食べない。お神酒を飲ませて海に帰す。疎開の人が城ケ崎の海岸でカメを焼いて食べたと大騒ぎになったことがある。海女が食べたのは聞いたことがない。

漁民は他地域の漁民との交流のなかで、ウミガメを食べる習俗は知っていた。『松崎町史だより』には、松崎町岩地の斎藤伝吉氏の語りが記述されている〔松崎町教育委員会町史編さん委員会　二〇〇〇〕。

斎藤氏はカツオ船の乗組員であった。土佐の人が船頭であったとき、カメを発見すると銛を持ってカメを捕えようとしたことがあった。伊豆では、カメは大漁と幸福をもたらすと信じられ大事にするが、土佐の人はカメを見つけたら食べないと大漁しないという。船中大騒ぎして、船頭を納得させてカメは捕らずにすんだという。（筆者要約）

南伊豆町子浦の小久保安治氏（昭和五年生まれ）は以下のように語る。

子浦の船でも、九州、八丈の船と仕事を通してかかわりのある船が何隻もあった。大分の津久見の人は、カジキ専門に船団を組んでくる。どこで漁があると分かっている。ここから気仙沼へ行く。メカジキを追いかけていく。伊豆七島の人もやっている。そうした船と懇意になって、一緒に漁をした。話で聞いたところでは、土佐の漁師はカメを見ると、食用に捕って食べたらしい。ここでは捕らない。土佐の人はアカを食べる。カメを捕る本業ではないけど、突きん棒の船は、カメを見つけると本業をやめて捕るという。解体しているところを見たことはない。

写真 71　南伊豆町子浦の港（2013 年 8 月撮影）

ウミガメの卵を採取して食用にすることはあったようである。南伊豆町の弓が浜ではカメの卵を採って、結核の病院に売っていたという。しかし、松崎町岩地の斎藤氏（昭和二三年生まれ）によると、卵は食べたことはないという。古くは伊豆でも広範囲で卵を食べていたと思われるが、昭和時代には、産卵地すべてで卵を食べていたわけではなさそうである。

4　放流習俗

伊豆でもウミガメに酒を飲ませて放す習俗が広がっていた。これまで報告されている事例もある。沼津市内浦では、カメを捕ったとき、カメに酒をやると魚がたくさん捕れる、という〔沼津市歴史民俗資料館　一九七六〕。沼津市静浦では、ウミガメとイルカが大漁をもたらすものとして喜ばれ、ウミガメには酒を飲ませて放した〔沼津市歴史民俗資料館　一九七七〕。沼津市の報告では、どのようなときにウミガメに酒を飲ませて放したのか明確ではないが、内浦や静浦での産卵は報告されていないため、おそらく網にかかったときに放したということであろう。下田市吉佐美の大浜では、地曳網の漁師たちがカメの産卵を見つけると、産卵を遂げさせてやり、帰りには酒を飲ませて帰した〔静岡県　一九八九〕。

写真 72　川奈の集落遠景（2013 年 8 月撮影）

筆者の調査でも伊豆の各地で放流の習俗を聞いた。伊東市川奈の杉本藤五郎氏（大正六年生まれ）は後述するように、死んだウミガメの供養をしてきた方である。以下は、平成一〇年（一九九八）にうかがった内容である。

カメさんのことは龍宮さんと呼ぶ。網に入るとお神酒を飲ませて帰す。口を開けるときは裏返す。足で前足を踏んで押さえ、のどを引っ張って飲ませる。これは昔からの習慣。「お使いご苦労様でございます。海上安全、大漁満足」といって放す。そうすると三日間ぐらいの間にお礼がくる。特別な漁がある。昔は甲羅に「海上安全、大漁満足」と墨で書いて放したが、今はやらない。

平成二五年（二〇一三）の調査時には、藤五郎氏は亡くなっていたが、

息子の杉本正仁氏（昭和二二年生まれ）に話をうかがった。

年に五、六頭はある。生きていればお神酒を飲ませて逃がす。甲羅に文字は書かない。茶色のカメが入る。黒いのはいない。大きいのも小さいのも入る。定置網は一年じゅうやっている。カメが入る時期は関係ない。カメが入って、酒を飲ませたり、土に埋めたりすると、一週間から一〇日ぐらいの間に、魚を捕らせてくれる。漁をさせてくれる。

杉本氏は親子ともに定置網をおこなってきた。自分の網にかかったウミガメに酒を飲ませて大漁を願ってきたということになる。杉本氏親子の聞き取りから、現在でも酒を飲ませて放す習俗がおこなっていることが分かった。ただし、甲羅に文字も書く習俗については、現在はおこなわれていないという。

伊東市新井の石井英雄氏（昭和二年生まれ）も、父親が死んだウミガメを供養していた方である。

写真 73　新井港（2013 年 8 月撮影）

伊東ではカメを大切にする。ほかでは、カメが上がると、見せたり、売ったりするが。新井には定置網があった。今はやめた。年に何回か網にカメが入る。必ずお神酒を飲ませた。二合瓶を買ってきて、背中を下にして、口を開けさせて、酒を飲ませた。海に放した。甲羅に文字は書かなかった。手を合わせて、漁守ってくれという気持ちを伝えた。カメは口をぱくぱくしているので、子どもが噛まれて指を一節取られたことがあった。浜へ寝かせてお神酒もってこいとやってるときであった。子どもはいたずらをしたのか、噛まれた。年寄りは、カメの口に手をやってはだめだと言っていた。

写真 74　石井英雄氏（2013 年 8 月撮影）

石井氏の父親はボウケ網（棒受網）をおこなう蛭子丸の船元であった。このボウケ網とは敷網の一種であり、海面に突き出した棒から網を張り出して、集魚灯で集めた魚をすくいとるという漁法であり、石井氏によるとカメが入ることはあまりないという。ところが、ほかの人たちがやっていた定置網にウミガメはかかったという。石井氏が子どものとき、定置網にかかったウミガメに酒を飲ませて放す光景を見たことがあるということであった。

伊東市の杉本氏、石井氏はいずれもウミガメ供養をしてきた家の方であったが、こうした漁民以外でもウミガメに酒を飲ませて放すことはおこなわれていた。伊東市新井の坂下治衛氏（大正一四年生まれ）は以下のように語る。

定置にカメがかかると酒を飲ませて放した。酒を口へ突っ込んだ。魚を連れて来いと話した。そうすると漁がある。当時、ボウケをやっていた。沖へ行くと漁がある。カメは漁の神さんだと聞いていた。丁寧に扱う。

漁業をおこなっていない方も、放流習俗について知っている。伊東市八幡野の太田小千代氏（明治四一年生まれ）は以下のように語る。

房州（千葉県南部）へサンマが来たらどこからか連絡が入る。そうすると、ここから大島までの間で流し網をする。流し網でサンマ、アジ、ムロをとっていた。その網にたまたまカメが入ることがある。カメを港まで連れてきてお神酒を飲ませて沖へ帰す。「あーよかった」と皆で見届ける。「鶴は千年、亀は万年」といい、おめでた

い生き物。カメは神聖なもの、神様に近いものという。

伊東市川奈の三嶋神社宮司・稲葉一氏（大正三年生まれ）も以下のように語る。

カメは漁の神ということで、酒を飲ます。甲羅が赤くなり、涙をこぼす。酒が嫌いなので涙を流すという人もいた。

伊東市以外の漁民からも同様の話を聞いた。南伊豆町子浦の小久保安治氏（昭和五年生まれ）は以下のように語る。

昔の人は、カメが網（定置網）に入っても、オカへ打ち上げられていても、酒を飲ませて海に帰すという習慣があった。若いころ、年寄りの人たちがやっていた。縁起もん。「また元気で戻ってこいよー」などと言っていた。

また、ウミガメの産卵がみられた松崎町岩地の斎藤氏（昭和二三年生まれ）によると、同じく岩地の生まれであった母親は産卵に来たウミガメに酒を飲ませて放すところを何度も見ていた、という。

写真75　三津のカメ塚（表1 No. 39)(2013年8月撮影)

5　供養習俗

『沼津内浦の民俗』には、第四章「漁業信仰」のV「漂着神など」の2「漂着神」に、「大亀」という項目があげられている。ここには、「三津の駒形神社の登り口に漂着した大亀が埋葬されている。」と記されている〔沼津市歴史民俗資料館　一九七六〕(表1 NO. 39)。筆者は平成

写真77　三津の港（2013年8月撮影）

写真76　駒形神社（2013年8月撮影）

一七年（二〇〇五）と二五年（二〇一三）に訪れた。二五年八月一〇日は、たまたま駒形神社の祭礼の日であった。祭りの屋台に出て来ていた七〇代ぐらいの男性四人ほどにうかがったが、もともとのカメを祀った由来は分からなかった。現在は、駒形神社の社の右側にカメに乗った観音を祀る堂が作られている（写真75）。これは、土屋絹子という女性が三津に移住してきてから建てたものである。神社の境内にこの由来が立っている。それによると、この方は、三津に移住する前に、カメが夢枕に立ち、自宅で観音を祀っていた。老後に三津に移住した際に、カメの墓があることを知った土屋氏はカメの縁による導きと考えて観音堂を建てたという。

・カメ観音（表1NO．39）

観音　高さ　九三cm
カメ　高さ　一八cm
　　長さ　七〇cm
　　幅　四八cm
台座　高さ　一八cm

祠の前の石（左）
（正面）亀塚

（裏面）供　島郷　植建造園

祠の前の石（右）

（正面）亀乗観音

（裏面）供　三津　山本建設

伊豆半島東海岸南部の松崎町にもカメ塚がある。松崎町岩地の日和山の頂上にカメ塚があることは、『静岡県・海の民俗誌』や『静岡県史』に記述がある〔野本　一九八八、静岡県　一九八九〕。『静岡県史』には口絵写真でも紹介されている。ただし、いずれもカメ塚があるという情報だけで、詳しい内容は記されていなかった[19]。筆者は『静岡県史』の情報をもとに、平成一〇年（一九九八）に松崎町史編さん室にカメ塚について問い合わせを行った。筆者の問い合わせに答えるために、編さん室が調べてくれた結果、

写真 78　岩地の集落と日和山（2013 年 8 月撮影）

写真 79　日和山頂上のカメ塚（右から表 1 No. 40-1、No.40-2、ひとつ飛んで No.40-3、奥に石の祠が見える）（1998 年 3 月撮影、松崎町史編さん室提供）

カメ塚は四基あり、いずれもカツオ漁の際に拾ったカメを祀ったものであることが判明した。その後、編さん室では『松崎町史だより』に「岩地の日和山の亀塚」と題する報告をまとめている〔松崎町教育委員会町史編さん委員会　一九九九〕[20]。平成二一年（二〇〇九）には高野氏が現地調査を行い、その結果を高野氏、田口氏が報告している〔高野　二〇一〇、田口　二〇一一〕。ただし、高野氏の調査では、カメ塚は三基しか見いだせなかったといい、田口氏の報告にも三基のみ記されている。そこで、筆者は平成二五年（二〇一三）八月に現地調査を行った。その結果、松崎町史編さん室の調査の通り、四基のカメ塚を確認することができた。以下、松崎町史編さん室の調査の結果をもとに、筆者の調査の成果を盛り込んでまとめておく。

日和山は岩地と石部の境に位置する標高五四・八メートルの山である。西海岸の見晴らしがいいため、ボラ漁の見張りなどに利用したという。岩地の集落の前から広がる砂浜が尽きるあたりに日和山が位置している（写真78）。日和山の登り口に弁天の社がある。その左側にカメ塚が一基ある（表1 NO. 41、写真83）。町史編さん室の調査によると、これは大日丸が建てたものであるという。そこから、段々畑の脇を通って日和山の頂上に至ると、石の祠や青峰観音の石造仏などとともに、カメ塚が三基並んでいる。最も南側に建っているのが「万年塚」と刻まれたカメ塚である（表1 NO. 40－1、写真80）。昭和一二年（一九三七）六月、八幡丸船中と刻まれている。『松崎町史だより』には、当時乗組員であった斎藤伝吉氏（大正六年生まれ）の語りが紹介されている〔松崎町教育委員会町史編さん委員会　一九九九〕。以下に引用しておく。

航海中、八丈島付近で五尺ぐらいのカメの死骸が浮かんでいるのを見つけた。若い乗組員は嫌がったが、年配者の主張が通り、しきたりにしたがって岩地で供養することになった。カメを起重機で船に上げ、岩地まで運んだ。大変臭かった。大カメを四人がかりで半日かけて日和山まで上げた。埋葬した場所は、昔からカメを葬っていた場所である。万年塚の万年は、「鶴は千年、亀は万年」にちなむものである。埋葬後は船主の阿波屋の人々

写真80　日和山頂上のカメ塚（表1 No.40-1）（2013年8月撮影）

写真82　日和山頂上のカメ塚（表1 No.40-3）（2013年8月撮影）

写真81　日和山頂上のカメ塚（表1 No.40-2）（2013年8月撮影）

や、船頭などの船の役員の家族などが参っていた。

（筆者要約）

筆者の調査では、八幡丸の網元の家（阿波屋）であった斎藤氏（昭和二三年生まれ）に話をうかがった。

ウミガメははえ縄にかかったり、ペラで傷めたりすると助ける。死んじゃうと、神様ではないけどたてまつる。紀伊半島のほうでは食べるみたいだけど、ここでは食べない。食べての供養ではない。供養してやろうということで、海の見える日和山の見晴らしのいいところへ担いで行く。

斎藤氏の祖父・斎藤伊勢衛門は生き物に感謝する人だった。カメと巡り合って、魚が捕れれば感謝する。近海でサンマ、カツオを捕っていた。秋はサンマ、春先から秋口まではカツオ。土佐沖から千葉沖まで行った。船の用事でよそへ行くと、いろんなことを見てくる。カメを供養することも聞いてきたか。関心がないと、情報も入ってこない。カメは賛同する人もいた。自分が二〇歳ぐらいのときまではカメを祀っていた。

現状では、八幡丸が昭和一二年に建てた万年塚が最も古い事例となるが、岩地ではそれ以前から日和山にウミガメを葬る習慣があったようである。筆者の調査では、万年塚以外のカメ塚については、詳細を聞くことができなかった。しかし、町史編さん室の調査によると、日和山頂上の中央のカメ塚は弁天丸の建てたものであるという（表1 NO. 40－2、写真81）。北側のカメ塚は、弁天の祠の横のカメ塚と同じく、大日丸が建てたものであるという（表1 NO. 40－3、写真82）。『松崎町史だより』にもこれ以上詳しい情報は出ていない。岩地には八幡丸、大日丸、岩地丸、弁天丸というカツオ漁船があった。八幡丸は、土佐沖から千葉沖まで出かけて、カツオ、サンマなどを捕る船であったが、ほかの船もほぼ同じ形態であったようである。八幡丸以外のカメ塚も、おそらく、自分の船の大漁を願って建てたものであろう。八幡丸のカメ塚も昭和四〇年代以降は祀っていないようであるが、船が解散するにともなって、カメ塚の祭祀も行われなくなっている。現在では、日和山の頂上は木が茂って海は見えず、カメ塚も藪の中に埋もれている状態であった。[21] 集落の中で何人かの方にうかがったところ、最近は日和山に人は行かないということであった。

写真83　日和山弁天横のカメ塚（表1 No.41）（2013年8月撮影）

・日和山頂上のカメ塚（表1 NO. 40－1）

1（正面）万年塚　昭和十二年六月　八幡丸船中

高さ　一一七cm

幅　六七cm

奥行　四cm

2（正面）亀塚（表1 NO. 40－2）

高さ　八〇cm

幅　五八cm

奥行　七cm

3（正面）亀塚（表1 NO. 40－3）

高さ　七六cm

幅　三一cm

奥行　一九cm

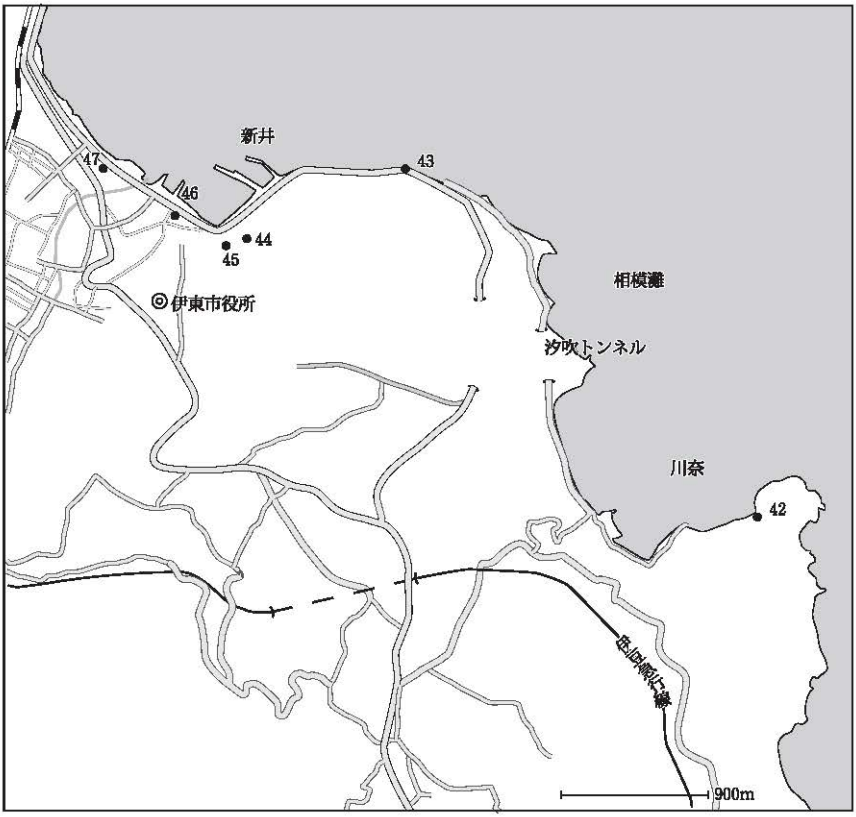
・弁天堂横のカメ塚（表1 NO. 41）

（正面）亀

高さ　三八cm

幅　二六cm

奥行　一二cm



地図５　伊東市のカメの墓

伊東市川奈にウミガメの墓があることは伊東市在住の民俗学者であった木村博氏に教えていただいた。[22] 川奈は江戸時代から漁業が盛んな地域で、ボラ・カツオ・マグロ・カツオなどを捕っていた。とくに、イルカの追い込み漁は伊東市富戸と並んで知られていた。

川奈の湾の入り口に夷子神社がある。神社の隣に造船場があり、その横にウミガメを埋葬する場所がある（写真84・85・86・87・88）。この場所は、かつては磯伝いに歩かなければ行けないところであったといい、現在でも細い道路の行き止まりとなっている。通常は地元の人も行くと

写真84　川奈のカメの墓（表1No. 42-1）（1998年6月撮影）

写真85　川奈のカメの墓（表1No. 42-2）（1998年6月撮影）

写真86　川奈のカメの墓（表1No. 42-1）（2013年8月撮影）

カメは亡くなると、打ち上がって死んでいる。カメが死んでいると、「杉本さんのところへ持っていけ、そうすれば祀ってくれる」、といわれていた。自分がいける以前から同じ場所にいけて（埋めて）いた。墓のある場ところではないが、平成二五年（二〇一三）八月の調査時には、ウミガメの墓のすぐ前に海水浴客が多数みられた。平成二五年調査時には、地上に立っている自然石六三個、木の柱二本、塔婆一本が確認できた（表1NO.42[23]）。

ウミガメの埋葬をおこなってきたのは杉本藤五郎氏（大正六年生まれ）である。平成一〇年（一九九八）に杉本藤五郎氏に話をうかがった。

所は小網代という。

昔は船で伊東まで魚を売りに行った。そのとき、大きなカメが流れていたのを見つけて持ち帰って葬り、木の柱を建てた。昭和九年のことで、自分が建てた最初であった。自分ではカメさんは何十回も埋めた。頼まれたのは二、三回か。「ウミガメの霊さん、どうぞ成仏してください」といって拝む。今は寺に頼みに行かず、自分で拝むだけ。月二回、一日と一五日に杉本家だけ酒、お洗米、お菓子、果物をもって参る。正月にはカメさんのところにもワラでお飾りをする。

定置網は藤五郎氏の父が始め、藤五郎氏は二九歳から網を始めたという。藤五郎氏は平成一一年（一九九九）に亡くなっていたが、平成二五年（二〇一三）には息子の正仁氏（昭和二二年生まれ）にも話をうかがった。

写真87　川奈のカメの墓（表1 No.42-2）（2013年8月撮影）

写真88　カメの墓に散乱するウミガメの骨（2013年8月撮影）

自分も定置網をしている。父がしていたのも定置網。上は開いているが、袋の部分に入ると息ができないので、力がつきて死んでしまう。カメが死んでいると、土に埋める。今でも埋めている。年に五、六頭はある。

茶色のカメが入る。黒いのはいない。大きいのも小さいのも入る。定置網は一年じゅうやっている。カメが入る時期は関係ない。一〇日前にも袋の中にカメが入って死んでいたので、土に埋めた。線香、お神酒、お菓子をあげて、前に石を置く。今まで何百体と埋めている。埋める場所は決まっている。カメを埋める場所は、造船場の横の道の下。港湾の一部だから漁協の土地になる。山の上にはホテルがある。昔からここにカメを埋めている。自分以外は埋めない。ほかの人が参ることもない。あちこちに穴を掘って埋める。掘ると、前に埋めたカメの骨が出てくる。父から受け継いだので、守らなくちゃいけない。ほかの人はやらない。ほかの人は、カメが死んでいても、死骸を海に流す。父は、若いころ、父と一緒に作業していたとき、カメが泳いできたので、船の上から甲羅にさわった。それから信念を持ったと、聞いている。それは、父が定置網を始める前で、イカ釣りとかいろんな作業をしていたときだった。カメが入って、酒を飲ませたり、土に埋めたりすると、一週間から一〇日ぐらいの間に、魚を捕らせてくれる。漁をさせてくれる。川奈の定置が台風で網をやられたり、碇をやられたりする。そういう破損は一回もない。大きい網が切れても、自分とこの小さい網は切れない。カメはありがたいと思う。信じるかどうか分らないが、実際にそういうことがある。埋めると、蓮慶寺に頼んで、お経をあげてもらう。木も立てている。腐れば新しい木を立てる。一日と一五日に、線香、お神酒、お菓子をあげる。

川奈でのウミガメの墓はこのほかには確認できなかった。三嶋神社宮司の稲葉一氏（大正三年生まれ）によると、「カメの墓は昔は手前の小屋の下にあった」という。若干、場所は移動している可能性はあるが、現在地に近いところに昭和初期からウミガメの墓があったことになる。川奈の場合、ウミガメの供養習俗が継続されたことは、杉本藤五郎氏の個人的な信心によるところが大きいようである。息子の正仁氏は父の想いを受け継いで、現在もウミガメ供養を継続している。遠江、駿河、伊豆で見てきたとおり、漁民によるウミガメ供養は衰退してきている。そうしたなかで、川奈の事例は現在も埋葬を継続しているという点で貴重なものである。正仁氏は筆者が訪れ

た直前にもウミガメを埋めたというが、掘り起こした際、以前に埋めたウミガメの一部が出てきたようである。カメの墓にはウミガメの骨や甲羅が散見された（写真88）。なお、正仁氏になっても木柱は定期的に建てているが、木柱に書いている字は分からなかった。平成一〇年（一九九八）、蓮慶寺（日蓮宗）住職にも話をうかがったところ、「杉本藤五郎志海亀之霊　如是菩提　発菩提心」というような文字を書いて、昭和五九年ごろに木角柱塔婆を建てたことがあるという。

・川奈のウミガメの墓（表1NO．42）

（一九九八年調査時）

木柱（倒れている）　高さ一三〇cm
　　幅　一〇cm
　　奥行　一〇cm

木柱　高さ一七四cm
　　幅　一〇cm
　　奥行　一〇cm

（二〇一三年調査時）

木柱（右）高さ　一四三cm
　　幅　一一cm
　　奥行　一一cm

塔婆　高さ　八三cm

写真89　蛭子丸のカメの墓（表1 No.43-1）（2013年8月撮影）

写真90　蛭子丸のカメの墓左側のカメ形石（表1 No.43-2）（2013年8月撮影）

新井の東端にあたる海岸にウミガメの墓がある。この墓についても、木村博氏に教えていただいた。のちに『伊東市の石造文化財』にも掲載されている〔伊東市史編さん委員会　二〇〇五〕。道路端に「内山余一君紀念碑」、「稲葉良吉君紀念碑」という石碑が並んだ区画があり、その前方にカメ形の自然石の上に「大漁亀」と刻まれた昭和七年（一九三二）に建てられた自然石が載っている（表1 NO. 43－1、写真89）。また、その左にはカメ形にした自然石が置かれている（表1 NO. 43－2、写真90）。平成一〇年（一九九八）の調査時には、蛭子丸の船元が作ったということが分かり、石井佳子氏（昭和三年生まれ）から夫の父親がカメの墓を作ったということを確認した。しかし、詳細については聞くことができなかった。平成二五年（二〇一三）の調査時には、石井佳子氏の夫

幅　七・四cm
奥行　〇・八cm
木柱（左）高さ　一五六cm
幅　一一cm
奥行　一一cm

伊東市新井にもウミガメの墓が複数ある。新井も川奈と同様、江戸時代からイルカ・ボラ・カツオ・マグロ・サンマなどを捕ってきた地域である。

である石井英雄氏（昭和二年生まれ）に話をうかがうことができた。

父が蛭子丸でボウケ網をしていたとき、カメが網に入った。自分が子どものときであった。たまたまカメが入って死んだのか、死んでいたのか分からない。カメがボウケに入ることはあんまりない。粗末にできないので、持ってきて祀った。父親は船元であった。祀ったところはカメの墓という。カメを祀って、石も乗組員が探してうちで作った。三五、六人の乗組員がいた。若い衆が石を探していた。カメの墓の周囲の枠は業者がやったか。内山余一の記念碑があった。その前に作った。広場になっていた。記念碑はもっと奥にあった。道を作るのに記念碑は前へ持ってきた。カメの墓は動いていない。（左側のカメの形をした石も蛭子丸か、という問いに）もうひとつあるというのは知らない。

写真91　蛭子丸のカメの墓から手石島を望む（2013年8月撮影）

漁師は毎月一日と一五日に神さんへお参りする。乗組員の幹部の奥さんは、毎月一〇日に、安全と漁を祈願してリュウゴンサン、新井神社、弁天さんに参った。漁撈長の奥さんが音頭とってお参りした。七、八人お参りした。うちの場合は、このときにカメにもお参りした。ほかの船は知らない。参った人もあるか。蛭子丸をやめてからも、手を合わせたり、あげものをあげたりしていた。今は祀っていない。

ボウケ網の船元が、網に入って死んだカメを祀ったものであった。遠江のように、カメ塚とは読んでおらず、カメの墓と呼んでいる。祀ったあとも大漁を願う儀礼がおこなわれていたが、現在では祀られていない。

・蛭子丸のカメの墓（表1 NO．43－1）

（正面）大漁亀　昭和七年七月三十日　新井　蛭子丸

石碑高さ　六三cm

幅　三五cm

奥行　一一cm

カメ形高さ　三九cm

長さ　一一〇cm

幅　九二cm

台高さ　二一cm

・蛭子丸の左側のカメ（表1 NO．43－2）

カメ形高さ　四七cm

本体長さ　一三六cm

頭長さ　二九cm

尻尾長さ　三五cm

幅　一〇二cm

伊東市新井の弘誓寺（曹洞宗）にもウミガメの墓がある（表1 NO．44、写真92）。これも木村博氏に教えていただいた。「亀墓地供養塔」と刻まれた、中野音次郎が明治四三年（一九一〇）に建てた墓石がある。平成一〇年（一九九八）調査時には墓石を確認したが（写真92）、平成二五年（二〇一三）には弘誓寺住職にも一緒に探してい

写真 92　弘誓寺のカメの墓（表1 No.44）（1998 年 6 月　撮影）

ただいたが、見付けることができなかった。カメの墓を建立した中野音次郎の孫にあたる中野みちこ氏（昭和一五年生まれ）には、平成一〇年、二五年ともに話をうかがうことができた。

音次郎はまごじいさん（祖父）。船で行ったとき、死んだカメを拾ってきた。石塔を建てて祀った。船が入るたびに、カツオなどをあげた。魚を捕ってくるたびに魚をあげていた。あげると必ず漁をした。「漁亀」だという。みちこ氏は、墓参りをすると、必ずカメの墓に線香をあげていた。地蔵さんのところに祀っていた。最近なくなったので、どこにいったのだろうと思っていた。ほかの人が参ることはない。ほかの人がカメを祀っているのは知らない。

（音次郎は何の船に乗っていたか、という問いに）ボウケ船に乗っていた。一王丸に乗っていた。音次郎は網元ではない。

中野家で祀っており、ほかの人は参らないし、この墓のことは知らない。しかし、現在では墓石が移動し、中野家の方も参ることはなくなっている。

・弘誓寺のカメの墓（表1 NO. 44）

（正面）明治四拾三年三月五日　亀墓地供養搭　立之施主中野音次郎

高さ　七一 cm

幅　二三 cm

奥行　一三cm

伊東市新井の西町不動にもカメの墓がある（表1 NO. 45）。これは『伊東市の石造文化財』に掲載されている（伊東市史編さん委員会　二〇〇五）。筆者は平成二五年（二〇一三）八月に二度、西町の不動を訪れたが、カメの墓らしきものは見つけることができなかった。『伊東市の石造文化財』によると、昭和一五年に大胡という人物が建てたと刻まれているという。この情報をもとに西町周辺で話を聞いた。坂下治衛氏（大正一四年生まれ）は以下のように語る。

写真93　竜宮神社のカメの祠（表1 No.46）（2013年8月撮影）

西町の不動の石段を上がった左側にカメの墓がある。（大胡という人が昭和一五年に建てたそうだ、大神丸かというと）大神丸ではない。もう一人の大胡。この家は下駄屋をしていた。息子は学校の先生。磐田のほうへ引っ越した。漁師も下駄屋も一緒に行事をした。（碑が見つからなかったというと）あっちへやったりこっちへやったりしていた。カメの墓といっていた。詳しいことは聞いていない。

伊東市史編纂室に保管されている石造物調査の調査カードを見せていただいたところ、「亀碑」という石碑の写真も掲載されている。場所は新井の稲崎神社となっている。『伊東市の石造文化財』では西町不動と記載されたが、本来は不動と別の場所なのかもしれない。今回の調査ではこれ以上、探すことはできなかった。

伊東市玖須美の龍宮神社にもカメを祀った祠がある（表1 NO. 46、写真93）。これも木村博氏に教えていただいた。近くに住む田中憲一氏（大正九年生まれ）に話をうかがった。

龍宮神社の下へカメを埋めた。昭和三〇年ごろか。夏、カメが死んで上がり臭くなっていたので、何人もで持って埋めた。伊東玖須美漁船組合が中心でした。釣り専門だった。集まって漁協になった。アカガメだった。カメは海の神の使いということなので、ほっとくわけにはいかないということで葬った。遊び場を作るために場所を海側に少し移動した。

写真94 「霊亀祠」（表1 No.47）（2013年8月撮影）

・竜宮神社（表1 NO. 46）

全体高さ　一八九cm
屋根幅　一一一cm
台　幅　一〇二cm
　奥行　一〇二cm

伊東市松原の海津見神社にもウミガメを祀った祠がある（写真94）。これは『伊東市の石造文化財』に掲載されている〔伊東市史編さん委員会 二〇〇五〕。「霊亀祠」と書かれた石の祠で、「松原漁船中」が建てたものである。筆者の調査では、聞き取りはできなかった。

・松原の「霊亀祠」（表1 NO. 47）

（正面）霊亀祠　松原漁船中
高さ　五五cm

屋根幅　二五cm
奥行　三九cm
台　高さ　五八cm
台上高さ　一三cm
幅　三〇cm
奥行　二六cm

伊豆では、以上のように、沼津市、松崎町、伊東市でウミガメ供養習俗を確認した。とくに、松崎町、伊東市では、同一地域に複数のウミガメ供養塔が存在している。遠江、駿河と同様、供養習俗は、死んでいるウミガメがいると必ずおこなわれるものではなく、流行性があるようである。たとえば、南伊豆町子浦の小久保安治氏（昭和五年生まれ）によると、「死んでいるカメが浮いていることもあるが、どうもしない。」という。

五　考察

1　静岡県におけるウミガメの民俗の特徴

静岡県は旧国ごとに民俗に差があるといわれる。したがって、ウミガメの民俗についても、遠江、駿河、伊豆に分けて取り上げてきた。

産卵地における民俗知識は、遠州灘一帯と伊豆半島で確認できる。台風や波の予測をするために、ウミガメの産卵位置を探る、というものが多い。産卵地では、産卵を見守るという習俗もある。

ウミガメに関する伝説は、遠江にとくに多い。神や仏がウミガメに乗って上陸した、津波の際にウミガメに助け

表1　静岡県のカメ塚・カメの墓一覧表

番号	所在地	埋葬・建立場所	呼称	墓塔表題	形態	地上高cm	埋葬・建立時期	ウミガメの発見状態	埋葬・祭祀者	ウミガメの種類	現状	文献	備考
1	静岡県浜松市坪井町	東光寺境内		南海靈亀碑	六角形石碑、カメ形の台座	81	文化7年（1810）秋に漂着、文化8年（1811）8月1日建立	海岸で死んでいたウミガメを埋葬。	東光寺住職		現存。祭祀。	野本1988、静岡県1991、浜松市石造文化財調査会2001a・b、小島2003・2005、田口2011、八木2007、依田2007	2001年現地調査。
2	静岡県浜松市舘山寺町深井	浜名湖の入り江の波打ち際→道路脇		亀塚	石碑	74	文政5年（1822）	大津波の際に、カメの知らせで住民は避難。その後、カメがたどりついて死んだために埋葬。	地区民		現存。	浜松市博物館のご教示。浜松市長公室広報課1966、瀧美1981、御手洗1985、愛称標識設置委員会1992浜松市石造文化財調査会2001、八木2007	2008年現地調査。
3	静岡県浜松市松島町		正覚坊カメサマ		石地蔵、祠	75	昭和20年（1945）ごろ	海岸に上がったカメを若者たちが食べる。	祈禱者		現存。	浜松市博物館のご教示。でんでんむしの会1980、浜松市石造文化財調査会2001、八木2007	2013年現地調査。
4	静岡県磐田市福田町向岡	集落から海に通じる浜道（現在は寺田家の屋敷地に取り込まれている）	カメヅカサマ		塚→石碑		昭和24年（1949）以前に埋葬、昭和42年（1967）9月に石碑建立	天竜川の堤防が決壊して死んだカメを、小高い土地に葬って松の木を植えた。地曳網にかかったので葬ったともいう。	寺田宝平ほか3名と住職		現存。	野本1988、静岡県1991、宮田1991、福田町史編さん委員会1999、小島2003・2005、田口2011	2013年現地調査。
5	静岡県磐田市福田町福田	観音寺境内					昭和42年（1967）9月に石碑建立		寺田昭平ほか4名と住職		現存。	野本1988、静岡県1991、福田町史編さん委員会1999、小島2003・2005、田口2011、八木2007、依田2007	2013年現地調査。
6	静岡県袋井市浅羽町西同笠		カメの松		松		明応7年（1498）もしくは安政1年（1854）	津波で打ち上げられた木端の中にカメが死んでいた。カメを埋葬。木端の一部を鎮守に祀る。	津波で妻を亡くした男性			野本1988、野本1990、静岡県1991、田口2011、八木2007、依田2007、しずおかの文化新書編集部2012、野本2013	2013年現地調査。
7	静岡県掛川市大須賀町新井		カメヅカ								消滅。	静岡県1991、小島2003・2005、高野2010、田口2011	
8-1	静岡県御前崎市浜岡町佐倉	中部電力浜岡原子力発電所		亀塚大明神	石碑、カメ形石造物	79	明治16年（1883）5月30日、昭和46年（1971）春に移設してカメ形を設置	明治時代に地元の漁民が漂着したウミガメを祀る。原子力発電所が建設される際、移設してカメ形を設置。	漁民→原子力発電所		現存。祭祀。	浜岡町史編さん委員会2004、高野2010、田口2011、田口2012	2013年現地調査。
8-2					檜で囲った墓		昭和46年（1971）以降	沖合の冷却装置から入り込んで死んだウミガメを埋葬。	原子力発電所		現存。祭祀。		
9	静岡県御前崎市白羽新神子	浜田稲荷（海岸の松林の中）	カメヅカ		石		昭和40年（1965）ごろ	浜で死んだウミガメを発見して埋葬。その後、キツネを埋葬し、浜田稲荷として祭祀。	大池良一の母親		消滅。	カメ塚所在地、カメ塚資料、高野2010、田口2011	2013年現地調査。

番号	所在地	埋葬・建立場所	呼称	墓塔表題	形態	地上高cm	埋葬・建立時期	ウミガメの発見状態	埋葬・祭祀者	ウミガメの種類	現状	文献	備考
10	静岡県御前崎市白羽新神子										不明。	カメ塚資料	2013年現地調査。
11	静岡県御前崎市白羽白浜	海岸の松林の中（中西川の西側、カツオ節工場の近く）					昭和40年（1965）ごろ		第1日光丸（埋葬したのは女性たち）		消滅。		2013年現地調査。
12	静岡県御前崎市白羽白羽	亀松亭		亀	石碑、カメ形石造物	137	昭和54年（1979）秋の彼岸	子ガメの供養。	海野千代女（レジャー開発会社社長）		現存。	カメ塚資料	2013年現地調査。
13	静岡県御前崎市白羽白羽	海岸の松林の中（中西川東側）		大圓鏡智尊為海亀霊位供養之塔	木柱	155			光昭丸		現存。	高野2010、田口2011、田口2012（これらの文献では、所在地を白羽の尾高としているが、正しくは白羽の白羽になる）	2013年現地調査。
14	静岡県御前崎市白羽中原	砂原浜の松林の中					昭和50年代（1975～1984）	ウミガメを埋葬。	漁民		不明。	カメ塚所在地、カメ塚資料	2013年現地調査。
15	静岡県御前崎市白羽中原			亀塚大明神	石碑、祠	58 189（祠）	慶応2年（1866）6月16日・23日、平成6年（1994）1月に祠を建設		彦八船・長兵衛船（漁民）		現存。	カメ塚所在地、カメ塚資料、静岡県教育委員会文化課県史編さん室1990、静岡県1991、小島2003・2005、依田2007、高野2010、田口2011	1999年、2013年現地調査。
16	静岡県御前崎市白羽薄原	小僧山か									不明。	カメ塚所在地	2013年現地調査。
17	静岡県御前崎市白羽薄原		カメヅカ		木柱か？						消滅。		2013年現地調査。
18	静岡県御前崎市御前崎広沢	原発道路の丘側		かめの墓	木柱		昭和40年（1965）ごろ		第1日光丸（埋葬したのは女性たち）		消滅。	カメ塚所在地、カメ塚資料	2013年現地調査。
19	静岡県御前崎市御前崎広沢										不明。	カメ塚資料	2013年現地調査。
20	静岡県御前崎市御前崎広沢										不明。	カメ塚所在地、カメ塚資料	2013年現地調査。
21	静岡県御前崎市御前崎下岬	堤防から少し離れたところ	（亀塚）		墓標		昭和62年（1987）12月16日の少し前	漂着したウミガメを埋葬。	鈴木作一・下村甚市		消滅。	松林1988	2013年現地調査。
22	静岡県御前崎市御前崎下岬	ウミガメ孵化場		カメの墓（木柱）子亀塚（石碑）	木柱→石碑	122（石碑）	昭和61年（1986）12月6日、平成14年（2002）石碑に建て替え	子ガメの供養。			現存（石碑）。	カメ塚資料、高野2010、田口2011、田口2012	2013年現地調査。
23	静岡県御前崎市御前崎下岬	元根の山（海岸の松林の中）			木柱				船主の家（女性が祀っていた）		消滅。		2013年現地調査。

番号	所在地	埋葬・建立場所	呼称	墓塔表題	形態	地上高cm	埋葬・建立時期	ウミガメの発見状態	埋葬・祭祀者	ウミガメの種類	現状	文献	備考
24	静岡県御前崎市御前崎大山	波切不動堂敷地→2002年ごろから個人宅に移設		亀塚	石碑	83	明治36年（1903）6月6日		沢入幸左衛門船（漁民）		現存。	カメ塚所在地、カメ塚資料、静岡県教育委員会文化課県史編さん室1990、静岡県1991、小島2003・2005、高野2010、田口2011	1999年現地調査。
25	静岡県御前崎市御前崎大山？										不明。	カメ塚資料	
26	静岡県御前崎市御前崎西側	曽根家屋敷跡	大洲霊神		塚→祠	111	昭和37、8年（1962、63）の夏	浜で死んでいたカメを埋葬。	曽根家の女性		現存。	カメ塚所在地、カメ塚資料、静岡県1991、小島2003・2005、高野2010、田口2011（所在地を女岩としている文献もあるが、正しくは御前崎の西側になる）	1999年、2013年現地調査。
27	静岡県御前崎市御前崎西側	松尾長作家	カメヅカ		石→祠	60	昭和32年（1957）ごろ	カツオ漁で発見。カメノマクラとともに拾い上げる。	松尾長作（第8日光丸、カツオ漁、船長、父親が漁撈長、漁民）		現存。	カメ塚所在地、カメ塚資料、静岡県1991、宮田1991、小島2003・2005、高野2010、田口2011（所在地を女岩としている文献もあるが、正しくは御前崎の西側になる）	1999年、2013年現地調査。
28	静岡県御前崎市御前崎女岩	小野田家の下（カメノマクラとボーダイの前）					昭和30年（1955）ごろ	浜で死んだカメを発見し埋葬。	栄福丸（船主、埋葬したのは女性たち）		消滅。	カメ塚所在地、カメ塚資料	2013年現地調査。
29	静岡県御前崎市白羽新谷										不明。	カメ塚所在地、カメ塚資料	2013年現地調査。
30	静岡県御前崎市白羽新谷										不明。	カメ塚資料	2013年現地調査。
31	静岡県御前崎市御前崎新谷										不明。	カメ塚資料	2013年現地調査。
32	静岡県御前崎市御前崎新谷	海岸の松林の中			石→木柱		昭和35、6年（1960、61）ごろ	浜で死んだカメを発見し埋葬。	光昭丸（埋葬したのは女性たち）		消滅。	カメ塚所在地、カメ塚資料、浜岡町史編さん委員会2004、高野2010、田口2011（これらの文献では、所在地を久々生としているが、正しくは白羽の新谷のエイゴになる）	2013年現地調査。
33	静岡県牧之原市波津	元波津駅から南の松林の中	カメの墓		土饅頭			鉄道にはねられたカメを埋葬。			消滅。	相良町文化財専門委員会1969	2013年現地調査。
34	静岡県牧之原市大江	萩間川の河口		亀	祠、石碑→石碑	65,5	大正8年（1919）7月	鉄道にはねられたカメを埋葬。			現存。	小山1942、相良町文化財専門委員会1969、亀崎2013	2013年現地調査。
35	静岡県焼津市石津	浜（ハチベエサンの石碑の近く）						死んだカメを埋葬。			確認できず。	静岡県教育委員会文化課県史編さん室編1993、焼津市史編さん委員会編2007	2013年現地調査。
36	静岡県焼津市浜当目	墓地			石祠、カメ形石像物	117	昭和62年（1987）		八千代丸、三国丸（船元、漁民）		現存。（2013年にはカメ形石造物はなくなる）	川口2002、焼津市総務部市史編さん室2003、焼津市史編さん委員会編2007・2008	2005年、2013年現地調査。

番号	所在地	埋葬・建立場所	呼称	墓塔表題	形態	地上高cm	埋葬・建立時期	ウミガメの発見状態	埋葬・祭祀者	ウミガメの種類	現状	文献	備考
37	静岡県焼津市浜当目	浜（船小屋跡の横）	カメノハカ	南無八大龍王尊属亀之霊供養墓	石碑	132	昭和28年（1953）5月19日建立		事代丸、七右衛門丸（船元、漁民）		現存。	川口2002、焼津市総務部市史編さん室2003、焼津市史編さん委員会編2007・2008	2005年、2013年現地調査。
38	静岡県沼津市松長	林の中							植木屋			沼津市教育委員会文化振興課編1999、沼津市史編さん委員会・沼津市教育委員会2002	
39	静岡県沼津市三津	厄神社境内			塚→堂			漂着したウミガメを埋葬。その後、移住してきた女性がカメの観音を祀る。	不明→土屋絹子（移住者）		塚はなくなっている。観音に乗ったカメが夢枕に立った女性が三津に移住後、観音堂を建立。	沼津市歴史民俗資料館1976	2005年、2013年現地調査。
40-1	静岡県松崎町岩地	日和山頂上		万年塚	石碑	117	昭和12年（1937）6月	八丈島付近で死んだウミガメを発見し、持ち帰って埋葬。	八幡丸（カツオ漁、漁民）		現存。	野本1988、静岡県1989、静岡県1995、松崎町教育委員会町史編さん委員会1999、小島2003・2005、高野2010、田口2011	2013年現地調査。
40-2				亀塚	石碑	80			弁天丸（カツオ漁、漁民）		現存。		
40-3				亀塚	石碑	76			大日丸（カツオ漁、漁民）		現存。		
41	静岡県松崎町岩地	日和山の弁天の横		亀	石碑	38			大日丸（カツオ漁、漁民）		現存。	松崎町教育委員会町史編さん委員会1999、高野2010	2013年現地調査。
42-1	静岡県伊東市川奈	寛子神社の脇	カメサン		自然石（63個）2013年現在	5～104	昭和19年（1934）ごろから現在に至る		杉本藤五郎・正仁（定置網、漁民）		現存。埋葬継続。		1998年、2013年現地調査。
42-2					木柱（2本）2013年現在	143156							
42-3					塔婆	83							
43-1	静岡県伊東市新井	忠魂碑の前	カメノハカ	大漁亀	石碑、カメ形石像物	123	昭和7年（1932）7月30日		蛭子丸（棒受網、漁民）		現存。	伊東市史編さん委員会2005	1998年、2013年現地調査。
43-2					カメ形石像物	47			漁協？		現存。		
44	静岡県伊東市新井	弘誓寺	カメノオハカ	亀蕉地供養塔	石碑	71	明治43年（1910）3月5日建立	死んだカメを拾ってきた。	中野音次郎（棒受網の乗組員、漁民）		現存。		1998年、2013年現地調査。
45	静岡県伊東市新井	不動		亀碑	石碑	32	昭和15年（1940）6月28日建立		大胡		確認できず。	伊東市史編さん委員会2005	2013年現地調査。
46	静岡県伊東市玖須美	龍宮神社			祠	189	昭和30年（1955）ごろ	カメが死んで上がった。	漁協	アカガメ？	現存。		1998年、2013年現地調査。
47	静岡県伊東市松原	海津見神社		霊亀祠	石祠	126			松原漁船中（漁民）		現存。	伊東市史編さん委員会2005	2013年現地調査。

※御前崎市のカメ塚の所在地については、これまで間違った情報で記載されているものがある。今回は、御前崎市教育委員会の協力により、正確な所在地を確認した。
※カメ塚所在地、カメ塚資料で記されているカメ塚の位置を確認しながら現地調査を進めたが、話としても確認できなかったものもある。そうした事例も含めて一覧表にした。

られた、などというものである。また、駿河では江戸時代、ウミガメは恐ろしい海の神のような存在であった。

ウミガメを捕獲し、食用にする習俗は、江戸時代から明治時代にかけては、遠江地域で確認できる。昭和時代に入ると、遠江の浜松市、駿河地域の焼津などで食べたという人がいる程度である。浜松市ではウミガメを食べた若者たちが変死したといわれてカメを祀るようになり、焼津市でもウミガメを食べるとよくないという言い伝えも広がっていた。遠江の御前崎市、伊豆の南伊豆町、伊東市などでも、他地域の漁民との交流の中で、ウミガメを食用にする習俗の存在は知っている。しかし、昭和時代には静岡県ではウミガメを食用にすることはほとんどなかったといえる。ただし、ウミガメの卵を採取し、食用にする習俗は昭和時代になっても遠州灘を中心に広がっていた。

これに対して、ウミガメが網にかかって生きていた場合、酒を飲ませて放流するという習俗があった。この習俗は静岡県全体に広がっている。産卵のために上陸したウミガメにも酒を飲ませて放すこともあった。放すときに、甲羅に大漁祈願の文字を書くという習俗は、広くはみられず、伊豆の伊東市のみで確認できた。

一方、ウミガメが網にかかって死んでいた場合や、海岸に打ち上がって死んでいた場合、埋葬して供養する習俗も多数存在する。とくに遠州灘では、「亀塚」と呼ぶ場合が多い。こうしたウミガメの供養習俗について、静岡県全体で四七か所、五三事例確認できた。[24] 地域別でみると、遠江では三四か所で三五事例、駿河では四か所で四事例、伊豆では九か所で一四事例となる。以上から、ウミガメ供養習俗は遠江に集中していることが分かる。遠江では、とくに御前崎市に集中的に分布するものの、浜松市から牧之原市までの沿岸部にカメ塚は点在している。しかし、駿河では焼津市と沼津市、伊豆では沼津市、松崎町、伊東市のみで確認されている。特定の地域に集中する傾向があることが分かる。時代的にいえば、袋井市の事例は中世にさかのぼるが、これは伝承以外の資料では確認できない。江戸時代のカメ塚は、浜松市に二例、御前崎市に一例みられる。明治時代のものは、御前崎市で二例、伊東市で一例みられる。牧之原市で大正時代のものがあるが、あとは昭和時代のものである。なお、静岡県では食用

後の供養習俗は確認できなかった。

ウミガメがまとわりついている流木を拾い上げて祀るという習俗については、カメノマクラと呼ばれている。遠江の御前崎市、駿河の焼津市のみで確認できた。

津波とウミガメに関する伝承があるのも特徴的である。浜松市には、永正ごろ（一六世紀初め）の高潮で、ウミガメに助けられたという伝説がある。袋井市には、明応ごろ（一五世紀末）の大津波の際に、子どもがウミガメに助けられたとしてウミガメを祀ったという伝説がある。静岡県は、歴史的に繰り返し津波が襲ってきた地域であり、ウミガメも津波によって漂着することがあったために、このような伝説が生み出されたと思われる。

以上のように、静岡県では、食用から供養まで多様なウミガメの民俗が存在したことが分かる。とくに、遠江には食用も含めて、多くの事例が確認されている。伊豆でも、産卵に関する民俗を含めてさまざまな事例があるが、駿河は最もかかわりが薄いようである。

2　全国的な位置づけ

ウミガメに関する民俗知識は、全国的にみると南西日本で豊富で、東北日本ではあまりみられない。静岡県では、アカウミガメの産卵にともなう民俗知識が多いが、海上、海中でのウミガメに関する民俗知識は少ないようである。

浜松市や袋井市にはウミガメに助けられたという伝説がある。類似した伝説は他地域でもみられる（藤井二〇一二c）。南西諸島では、ウミガメに助けられたためにウミガメを食べないという伝承になっている。ウミガメ食の禁忌伝承である。『今昔物語集』などの古代の説話集では、ウミガメを助けたことがあったためにウミガメに助けられたという内容になっている。いわゆる報恩説話である。したがって、静岡県のウミガメに助けられたと

いう伝説は、食の禁忌でも、報恩説話でもない。

酒を飲ませて放流する習俗については、鹿児島県奄美地方から東北地方まで全国的に広がっている。東北地方などでは、甲羅に文字を書いて放すこともあったが、静岡県では、甲羅に文字を書く習俗は伊東市のみで確認できた。

ウミガメ供養習俗については、現在までに全国で二三二か所、三一六事例確認している〔藤井　二〇一四〕。このうち、静岡県は三八か所、四四事例確認していた（その後、追加して四七か所、五三事例となった）。全国的にみて、供養習俗が顕著な地域のひとつといえる。静岡県の西隣の愛知県では、知多半島にウミガメ供養習俗が集中している。しかし、渥美半島では聞き取りで一例確認できた程度である。遠州灘のウミガメ供養習俗と、知多半島の習俗には連続性は認められない。反対に、東隣の神奈川県では、二宮町から横浜市にかけて分布している。伊豆半島のウミガメ供養習俗は神奈川県の供養習俗とも、連続性は低いようである。

ウミガメがまとわりつく流木を拾い上げる習俗については、鹿児島県屋久島から青森県にかけて点々と分布している。静岡県では、御前崎市と焼津市に分布している。これらはカツオ漁などの漁業が盛んな地域であった。漁民の交流による民俗知識の伝播が考えられる。

以上のように、全国的にいえば、静岡県のウミガメの民俗は、食用など利用に関する民俗が少なく、産卵に関する民俗知識や信仰に関する民俗が多いということになる。ただ、後述するように、ウミガメの民俗が変化したこともうかがえる。

3　静岡県における地域差の背景

a　生態との関連

静岡県の沿岸海域には、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、オサガメが回遊するが、このうち、とくに産卵に上陸するアカウミガメの回遊が多いと思われる。回遊の状況については、詳細なデータがないため分からない。しかし、静岡県では奥まった内海は存在せず、ほぼ太平洋に面した外海であるため、地域によって、大幅な差はないのではないかと思われる。漂着についても、地域によって差があるかどうかは分からない。

静岡県の沿岸ではアカウミガメの産卵地が各地にみられる。とくに、長大な砂浜が広がる遠州灘一帯はとくに上陸・産卵も多い。これに対して、駿河湾沿岸から伊豆半島にかけては、砂浜自体が限られるため、アカウミガメの上陸・産卵も遠州灘に比べると限られている。遠州灘のウミガメの民俗が、駿河湾や伊豆半島に比べて多様であり、事例も多いのは、駿河湾や伊豆半島よりも上陸・産卵が多いため、人々がウミガメに出くわす機会が多かった、という理由が考えられる。接触する機会が多かったため、ウミガメは食用の対象にもなり、台風・波の被害や魚群の位置を教える存在であり、また、ときには神であり、人を助ける存在にもなり、供養の対象にもなった、といえる。

b　生業との関連

ウミガメの産卵にかかわる民俗知識について、野本寛一氏は漁民との共生関係として説明していた。とくに、地曳網漁をおこなっている地域であれば、ウミガメの産卵場所で台風や波を予測し、船を引き上げる目安にしていたと指摘する。たしかに、遠州灘一帯では昭和三〇年代ごろまで地曳網漁が盛んであった。この当時は、船は砂浜に引き上げていたため、漁民にとって台風や波の対策は重要であった。したがって、地曳網漁の漁民がウミガメを大事にしたという点はうなずける。御前崎市白羽地区で江戸時代にカメ塚を建てたのは地曳網漁の漁民であった。

南西諸島をのぞいて、静岡県と自然環境や生業が類似している四国や紀伊半島などと比較した場合、カツオ漁が

盛んな地域ではウミガメを捕獲して食用にするが、地曳網漁が盛んな地域ではあまりウミガメを捕獲しないという傾向がある。静岡県においても、カツオ漁が盛んな地域ではウミガメの捕獲、食用も盛んであったのではなかろうか。御前崎市では江戸時代に二度もウミガメ捕獲禁止令が出ているのは、それだけ沖合での捕獲も活発におこなわれていたということを示している。

これまで筆者が指摘してきたとおり、カツオ漁とアカウミガメ漁については関連が認められる〔藤井二〇〇三〕。つまり、四国や紀伊半島では三月から五月ごろ、カツオ漁をおこなう際、産卵のために沿岸にやってくるアカウミガメに出くわすことが多くなる。カツオを探しているときに海上に漂っているアカウミガメを発見することがしばしばある。このようなとき、高知県や和歌山県では、アカウミガメを銛で突き捕り、漁民たちで共食することで、カツオの大漁を願うのである。御前崎でも、カツオ漁の時期に、カツオの大漁を願って、アカウミガメを突き捕っていた可能性がある。ただし、聞き取りの範囲では、静岡県ではカツオ漁の際にマンボウを突き捕る習俗があった。御前崎市などでは、解体したマンボウの皮は洗米などをつけて海へ流し、マンボウの再生と魚の大漁を願うという儀礼をおこなっている。たとえば、御前崎市の松尾長作氏は、「片方の皮にお洗米や酒をかけて、「また漁させてくれよー」などといって流す」と語る。これは、和歌山県におけるウミガメ解体後の儀礼とほぼ同じである。静岡県では、昭和時代においては、ウミガメよりもマンボウを突き捕り、カツオなどの大漁を願っていたようである。

ウミガメがまとわりついている流木を拾い上げる習俗についても、カツオ漁との関連が考えられる。海を漂う流木に魚群がつくことは民俗知識として漁民に知られている。静岡県ではこれをキツキ（木付き）と呼んでいる。こうした流木にウミガメも一緒に漂っていることがある。とくに、カツオ漁の漁民は、カツオの魚群を知るために、流木を探すことがあった。このときに一緒にいるウミガメは、魚群の位置を教えてくれる存在であった。ウミガメ

を捕獲せずに、ウミガメと一緒にある流木を拾い上げることで、大漁を感謝し、願ったのである。

c　神社・寺院・宗教者・信心家の影響

御前崎市の駒形神社の神はウミガメに乗って上陸したという。この伝説がいつから存在するものかは不明である。しかし、こうした伝説があることで、御前崎や遠州灘一帯において、ウミガメを大事にするものである、という意識に影響を与えていることもたしかであろう。

山口県長門地方のウミガメ供養習俗を分析した際、民間信仰を重んじる曹洞宗の教えが、ウミガメ供養習俗に影響を与えている可能性を指摘したことがある〔藤井　二〇一二a〕。静岡県も曹洞宗の多い地域であるため、ウミガメ供養習俗に影響を与えている可能性はある。とくに、カメ塚の多い御前崎市では、御前崎地区の海福寺、白羽地区の増船寺、宗心寺、紅雲寺ともに、すべて曹洞宗となっている。浜岡原発のカメ塚供養をおこなっている御前崎市佐倉の官長寺と龍泉寺も曹洞宗である。表1 NO. 5のカメ塚がある磐田市福田町の観音寺も曹洞宗である。松崎町岩地の斎藤伊勢右衛門が檀家総代を勤めていた同町石部の禅宗院も曹洞宗である。伊東市では最古になる明治時代の墓（表1 NO. 44）がある弘誓寺も曹洞宗である。曹洞宗が多く存在する地域にカメ塚が多いということは、死んだカメを供養するにあたって、曹洞宗寺院が何らかの影響を与えたことが推測される。

また、全国的にみれば、宗教者の助言によってウミガメを祀るようになったという事例が多数ある。御前崎市でも、表1 NO. 26の「大洲霊神」は、宗教者の助言で祀られるようになった。浜松市の表1 NO. 3の事例は、宗教者に伺いを立てて祀るようになった。沼津市の表1 NO. 39も、移住してきた女性によって、もとからあったカメが祀り直されている。しかし、こうした宗教者の影響は静岡県においては限定的である。これらの事例が広く知られている様子はなく、ほかのウミガメ供養に影響を与えているとはいいがたい。

d　民俗の変化

静岡県におけるウミガメの民俗の変化は、二つの時期がある。ひとつは、江戸時代から昭和時代にかけて、もうひとつは昭和時代後期から平成にかけてである。前者は静岡県全体でゆるやかに起こった可能性があるが、後者の変化はとくに御前崎市において起こったものである。

現在は、遠州灘を中心にウミガメの保護活動が盛んな地域となっているが、静岡県においてもウミガメやウミガメの卵を食用にする習俗は広がっていたようである。おそらく、静岡県でもウミガメの肉や卵の食用は古くからおこなわれていたと思われる。それが、次第に捕獲しない、食べない、というように変化してきたようである。劇的に変化したものではなく、ゆっくりと時間をかけて変化してきたと考えられるが、資料などで確認することはできない。明確に変化が分かるのは御前崎市である。御前崎市では江戸時代に二度もウミガメ捕獲禁止令が出ていた。これは、江戸時代中期には沖合、砂浜での捕獲が盛んにおこなわれていたということを示している。御前崎市では、明治時代にウミガメの缶詰が作られていることから、江戸時代にウミガメの捕獲がなくなったわけではなさそうである。ところが、昭和時代になると、御前崎市ではウミガメの卵を採取する程度となっていた。つまり、江戸時代から昭和時代にかけて、ウミガメとのかかわりに大きな変化があったと思われる。

ここで、他地域の事例と比較してみる。和歌山県田辺市、愛知県半田市、千葉県銚子市などでは、ウミガメを食用にした祟りという言説が広まり、それによってウミガメの食用習俗が急速に衰退している。こうした事例と比較すれば、静岡県においても、ウミガメを食べた者が海難事故に遭ったり、変死するなどのできごとが起こり、ウミガメの祟りである、という言説が広まってウミガメの食習俗が衰退したと推測される。しかし、静岡県においては、今のところ、江戸時代から明治時代にかけて、祟りに類する事件や伝承は確認できていない。浜松市で昭和二〇年ごろにウミガメの祟りという言説がみられるが、この事例が周辺地域に知られておらず、この事例からの広

がりは認められない。

一方、御前崎市と焼津市ではウミガメがまとわりつている流木を拾い上げて祀る習俗が顕著である。この習俗は、江戸時代に船乗りによって広がりはじめ、その後、漁民によって全国に伝播するという特徴があった。静岡県では昭和時代の事例以外は確認できず、また、分布地が漁業の盛んな御前崎市と焼津市であるため、明治時代以降に他地域の漁民によって伝えられたと考えられる。このカメノマクラは、カツオ漁の際に、カツオの大漁を願って拾い上げられるものである。ウミガメと流木がいるときに、ウミガメは捕まえず、流木のみを拾い上げている。カツオの大漁を願ってアカウミガメを突き捕る高知県や和歌山県の事例と比較すれば、御前崎や焼津のカメノマクラは、ウミガメの代用品として拾い上げていると考えられる。江戸時代までは御前崎でも大漁の願いをこめてウミガメを突き捕っていたが、ウミガメを捕獲することがよくないと考えられるようになり、次第にウミガメの捕獲から、カメノマクラを拾い上げるように移行してきたのではないかと思われる。昭和時代には、御前崎ではカメノマクラを拾い上げ、マンボウを突き捕って大漁を願っていた。以上が、江戸時代から昭和時代にかけての変化である。

昭和後期から平成にかけての変化は、御前崎市を中心にした遠州灘で起こっている。この時期の変化のひとつは、ウミガメ保護活動の活発化である。昭和四〇年代から御前崎ではウミガメの産卵を保護しようとする動きが出てきていた。最初は個人的な活動であったと思われるが、次第に学校や自治体を巻き込んで、県や国の天然記念物に指定されるようになっていく。御前崎のウミガメ保護活動は他地域の小学校でも取り上げられるようになった。全国的なウミガメ保護活動と連携するようになり、さらに遠州灘一帯にウミガメ保護活動が広がっていく。

御前崎をはじめ、遠州灘一帯では、現在でもウミガメの死骸が複数上がっている。しかし、保護活動が盛んになってからは、個人で埋葬することはほとんどなくなり、自治体や保護団体、水族館などに連絡をし、ストランディングの記録をとってから埋葬するようになってきている。つまり、ウミガメは信仰の対象として漁民が個人で

埋葬供養することがなくなってくると同時に、ウミガメは保護・観察する対象へと変化してきたといえる。

もうひとつの変化は、死んだウミガメを供養するカメ塚やカメノマクラが次第に祀られなくなっているという傾向である。いずれも、遠洋漁業の衰退と関係している。カメノマクラはカツオ漁の際に、大漁を願って拾い上げて祀るものであるため、カツオ漁がなくなると、祀る意義がなくなる。現在も、船主の家などで残っているが、次第に忘れられている。また、カメ塚についても、祭祀をやめる傾向がある。筆者が調査した平成一一年（一九九九）から二五年（二〇一三）にかけての間でも、カメ塚は明らかに見つけにくくなっている。表1 NO. 13や表1 NO. 32は平成二一年（二〇〇九）の高野氏の調査時にはまだ祀っていたが、平成二五年（二〇一三）には祀られなくなっている。表1 NO. 32については、平成二四年（二〇一二）の暮れに船をやめたため、カメ塚の祭祀もやめたことが分かった。さらに、祀っていた方々が高齢化しているために祭祀の継続が困難になっているという理由もある。また、漁業関係者が作るカメ塚は昭和六〇年ごろを最後にみられなくなっている。まさに、現在進行形でカメ塚祭祀がなくなっている状況である。また、カメ塚は船単位で祀るという傾向があるため、かつてあった場所も、漁業関係者、とくに役員をしていた年配の人たちの記憶のなかに残っているのみとなっている。かつて三〇か所ほどあったという御前崎のカメ塚の正確な分布は今となっては確認できない状態である。

ところが、御前崎において、現在も祭祀が続けられているカメ塚が存在する。孵化場の「子亀塚」（表1 NO. 22）と浜岡原子力発電所の「亀塚」（表1 NO. 8）である。これらの祭祀者は、御前崎でこれまでカメ塚を祀ってきた漁業者ではない。「子亀塚」は、御前崎において、孵化場が設置されたあとで作られたものである。「子亀塚」は孵化場の後ろにあり、決して目立つ存在ではない。産卵会、放流会などに訪れる観光客がよく目にするものではないと思われる。しかし、現在では、産卵時期が始まる五月上旬、ウミガメ保護監視員が供養祭に参加して供養祭がおこなわれている。この様子は、毎年、地元の新聞などに掲載されており、御前崎の恒例行事となってい

る。ウミガメ保護活動の開始を告げるのが、この供養祭であるといえる。ウミガメ保護活動がおこなわれる限り、子ガメ供養は続けられるのではなかろうか。

もうひとつの原発のカメ塚については、明治時代に地元の漁民が作ったものである。漁業の衰退とともに、忘れられ、祀られなくなっていたものを、原発の建設時に発見された。原発では地元の人が大切に祀っていたものを祀っている。また、原発では冷却装置に入って死んだウミガメを新たに供養している。御前崎市では、昭和四〇年代から五〇年代にかけて、地域の労働形態は漁業から原発へ大きく変化した。漁民が祀るカメ塚は忘れられ、祀られなくなってきたが、原発においてカメ塚を祀り続けているという点は大変興味深い。原子炉が止まっている現在、冷却装置に入って死んでしまうウミガメはなく、新たにカメ塚は作られてはいない。しかし、原発が存在する限り、カメ塚の供養は続けられると思われる。

おわりに

静岡県では、民俗学研究者によって、環境の民俗というテーマが早くから意識されていた。ウミガメの民俗というものも、複数の研究者が関心を寄せている。ただし、そこで取り上げられたのは、民俗知識、伝説、信仰に関する事例であった。昭和時代後期には、そのような民俗が広がっていたことによる。ところが、時代をさかのぼれば、利用習俗も顕著であり、民俗が変化してきたことがあらためて分かった。筆者がかつて分類したウミガメの民俗に関する類型でいえば〔藤井　二〇一二b〕、静岡県のウミガメの民俗は信仰心意優勢型や利用心意優勢型ではなく、心意葛藤型に位置づけられる。静岡県は、信仰習俗のみが顕著なわけではなく、利用習俗と信仰習俗が混在するなかで、利用と信仰に関する心意の葛藤がみられる地域であったといえる。逆にいえば、民俗の変化がたどれるというのは、特定の習俗が顕著なのではなく、さまざまな心意が葛藤しつつ、民俗が変化してきたからというこ

ともできる。

筆者は、ウミガメ保護活動が活発になった地域は、心意葛藤型の地域であると指摘したことがある〔藤井二〇一二b〕。また、ウミガメ供養習俗が集中するのも、信仰心意優勢型ではなく、実は心意葛藤型の地域であることも指摘した。さらに、ウミガメがまとわりつく流木を拾い上げる習俗も、心意葛藤型の周縁であることも指摘した。静岡県の場合、これらがすべて当てはまるのである。つまり、周辺に食用にする習俗が存在するからこそ、自分たちは食べないということを主張する意味があるのであり、意図的に食べない供養習俗が広まるということもある。四国や南西諸島の例をみると、産卵が多いから保護活動が盛んになるとはいえない。静岡県では、食用習俗が広がっていたからこそ、供養習俗が顕著になり、さらに保護活動も盛んになったと考えられる。

そして、静岡県におけるウミガメの民俗を調査して、あらためて実感したのは、ウミガメの民俗が近年急速に変化しているということである。筆者は、ウミガメの食用習俗は急速に衰退していると考え、南西諸島などの捕獲・食用習俗の調査を急いできた。結果として、静岡県のような供養習俗が顕著な地域での調査・研究は後回しになっていたのである。しかし、筆者が一五・六年前に調査したときと比べても、供養習俗は急速に忘れられ、なくなりつつあることが分かった。代わりに、孵化場での子ガメ供養と、原発におけるカメ塚供養が継続していることも分かった。機会があれば今後、再び静岡県を訪れて、ウミガメの民俗がどのように推移しているのか追跡してみたい。

(注)

(1) 筆者は平成一〇年(一九九八)九月、第五七会学術大会日本宗教学会(龍谷大学)において、「海上他界との媒介者・ウミガメ」と題する発表をおこなった際、フロアにいた宮田登から「ウミガメの墓はいつごろから

見られるのか」という質問をいただいた。宮田登は、おそらく、ウミガメ供養習俗の歴史性などにも関心があったと思われる。

(2) 高野氏の卒業論文については、御前崎市教育委員会において閲覧させていただいた。

(3) http://www.kamemanjyu.com/（かめや本店ＨＰ）。

(4) 河原崎氏は旧御前崎町の人ではなく、旧浜岡町佐倉の出身であった。教育委員会によると、最初は一人で保護を始めたのではないかという。

(5)「浜松藩領佐浜村庄屋古橋家文書」にカメの伝説があることは、浜松市博物館の宮下知良氏から教えていただいた。また、宮下氏から浜松市博物館に保管しているマイクロフィルムの該当部分のコピーを提供いただいた。

(6) 宮下知良氏によると、永正の年号であるが、筆写の年代は不明であるという。

(7) 御前崎市の駒形神社の秋の祭礼では、新生児の氏子入りの儀礼として、カミコロガシというものがおこなわれている。神社の拝殿において、母親から子どもを受け取った氏子総代は、子どもを左右に転がすように動かすという〔静岡県教育委員会文化課県史編さん室　一九九〇〕。筆者が調べてきたところでは、南西諸島などでは上陸したウミガメをひっくり返して捕獲する方法があった。また、九州などではウミガメにまたがらせて子どもの成長を願う地域もあった。そのような南西諸島の捕獲習俗や、その他の産卵地の習俗に照らし合わせれば、駒形神社のカミコロガシは、上陸してウミガメを捕獲していたときに、海の大きな生き物であるウミガメにあやかって子どもの成長を祈っていた名残とも考えられる。

(8) 明治時代に編纂された『日本重要水産動植物図解説』などでは、正覚坊とはアオウミガメのこととしている〔大日本水産会　一九一〇〕。

(9) 浜松市の石造物調査は、各公民館でボランティアを募り、市民が調べたものであった。その調査票である

「石造文化財調査個票」は浜松市立中央図書館所蔵であり、目録としてまとめて刊行したものが『浜松市石造文化財所在目録』である。「石造文化財調査個票」は浜松市立中央図書館より複写を送っていただいた。

(10)「お寺さん縁起帳」は、『浜松民報』に連載された記事で、東光寺は昭和三五年（一九六〇）八月六日に掲載された。浜松市立中央図書館から該当部分のコピーを送っていただいた。

(11) 現在のウミガメ保護監視員にうかがうと、かつてウミガメ保護監視員をしていた方は、昔は三〇ぐらいのカメ塚があった、という話を聞いていたという。しかし、話を聞いた方が実際に確認できたカメ塚は一〇いくつであったという。

(12) 中日新聞の「共生の時代へ　ウミガメを追う」という連載は、平成一三年（二〇〇一）三月二一日付から開始している。なお、中日新聞社から筆者にもカメ塚に関する問い合わせがあり、平成一三年（二〇〇一）五月一〇日付の記事には、筆者のコメントが掲載されている。

(13) 御前崎市教育委員会にてコピーをいただいた。

(14) 御前崎市教育委員会から提供いただいた「カメの墓」の写真（写真40）は、「御前崎町役場」と印刷された紙にカラーのプリント写真が貼られたものである。メモとして、昭和六一年（一九八六）一二月六日と書かれている。御前崎市教育委員会から提供いただいた「カメ塚資料」には、「カメの墓」の同じ写真が掲載されている。ここには、昭和六二年（一九八七）一月二五日建立と書かれている。二か月近く建立日時がずれることになるが、本稿ではよりオリジナル資料と思われる、プリント写真のメモを建立日時としておきたい。

(15) 静岡鉄道駿遠線は、藤枝市から袋井市までを走る軽便鉄道であった。前身である藤相鉄道は大正二年（一九一三）、中遠鉄道は大正三年（一九一四）開業で、前線開通後、昭和四五年（一九七〇）に廃止された。

(16) 野本氏はおそらく話者の言葉通りアオウミガメと記しているが、ウミガメの生態を考えれば、伊豆半島で産卵していたのはアカウミガメと思われる。

(17) 松崎町、伊東市で調査をおこなったのは、ウミガメの供養塔があることが分かっていたからである。南伊豆町はウミガメに関する情報はなかったが、伊豆半島の最南端であるために調査した。

(18) 新潟県柏崎市の黒船館で閲覧した。同じく、黒船館所蔵の「下田図譜」にも、ぶら下げられたウミガメがアメリカ人によって解体される絵が描かれている。

(19)『静岡県史　資料編二三　民俗　一』には、「産卵のためにやってきた亀が何らかの事故で死んだものを祀ったのである。」と書かれているが〔静岡県　一九八九〕、松崎町史の調査や筆者の調査で間違いであることが分かった。その後、『静岡県史　別編一　民俗文化史』では、岩地の斎藤伝吉氏からの聞き取りをもとに、沖で死んだアカウミガメを拾い上げてカメ塚を作って祀った、と記されている〔静岡県　一九九五〕。

(20) 筆者の問い合わせを契機として日和山のカメ塚調査が行われたようである。一年後に『松崎町史だより』に日和山のカメ塚がまとめられた際には、筆者からの情報をもとにして、全国的にもカメ塚が分布していることが記されている〔松崎町教育委員会町史編さん委員会　一九九九〕。

(21) 平成一〇年（一九九八）に町史編さん室が撮影した写真では、冬であったということもあろうが、亀塚は藪に埋もれていない（写真79）。平成二一年（二〇〇九）六月の高野氏の調査の段階では、頂上はすでに相当茂っていたようである。平成二五年（二〇一三）八月の調査の段階では、筆者は町史編さん室撮影の写真をもとに、場所を特定して万年塚を探した。万年塚は藪の最も奥の部分にあったため、高野氏は見つけることができなかったと思われる。

(22) 木村氏は、「動植物供養の民俗」という論考の中で、ウミガメの供養にも触れていた〔木村　一九八八〕。し

かし、ここには具体的な事例がまったく書かれていない。そこで、木村氏に問い合わせた結果、木村氏の地元である伊東市にウミガメの墓が多数あるということを教えていただいた。平成一〇年（一九九八）の調査では、すべて木村氏に案内いただいて回った。

(23) これについては、平成一〇年（一九九八）調査時と二五年（二〇一三）調査時でも墓の数が異なっており、また、正確な数を数えることができない。実際の事例としては、杉本藤五郎氏と正仁氏の語りからすれば一〇〇事例以上になる。ここでは、明らかに形態の異なる自然石、木柱、塔婆として事例を三つに分類しておくにとどめた。

(24) 昨年まとめた「日本列島のウミガメ供養習俗」では、「カメ塚所在地」、「カメ塚資料」に記されていて、筆者が確認できなかった事例については取り上げなかった〔藤井　二〇一四〕。十分検証できていないが、本稿ではこのような事例についても、記録として伝える意味をこめて一覧表として掲げた。

（参考文献）

愛称標識設置委員会編　一九九二　『庄内地区愛称標識　なまえとその由来』　庄内地区愛称標識設置委員会
渥美実　一九八一　『シリーズ・わたしたちの散歩道　五　浜松の伝説　下』　ひくまの出版
阿部正信　一九七七　『駿国雑志』　吉見書店
石川純一郎　一九八七　「人獣交渉の民俗」『静岡県民俗学会誌』九
伊東市史編さん委員会編　二〇〇五　『伊東市史調査報告　二　伊東市の石造文化財』　伊東市教育委員会
上島義弘・河原崎芳郎　一九八〇　『御前崎小学校観察クラブの記録　ウミガメ先生奮戦記　アカウミガメを追って』　ひくまの出版

大沢啓志編　一九五四　『御前崎村誌』　御前崎村
大沢六之丞　一九七九　『おまえざきの伝説と文化財』　御前崎町教育委員会
御前崎町編　一九九七　『御前崎町史』　御前崎町
御前崎町編　一九九一　『御前崎町史　資料編　栗林澤一論文集』　御前崎町
御前崎町教育委員会編　一九八三　『ウミガメのふるさと御前崎』　御前崎町教育委員会
御前崎市教育委員会編　二〇〇五～二〇一三　『静岡県御前崎市文化財年報』Ⅰ～Ⅸ　御前崎市教育委員会
御前崎町郷土史研究会　一九八六　『ふるさとの岬』　御前崎町教育委員会
「角川日本地名大辞典」編纂委員会編　一九八二　『角川日本地名大辞典　二二　静岡県』　角川書店
神谷昌志　一九九一　『遠江古蹟図絵』　明文堂出版社
亀崎直樹・通事裕子・松沢慶将編　二〇〇二　『日本のアカウミガメの産卵と砂浜環境の現状』　日本ウミガメ協議会
亀崎直樹編　二〇一三　『日本ウミガメ誌二〇一三』　日本ウミガメ協議会
川口円子　二〇〇二　「焼津の歴史あれこれ　四四　亀のお墓」『広報やいづ』平成一四年一二月一日号
川崎文昭　一九九九　「生類憐み令と海亀の民俗　―安間英男氏所蔵文書による―」『常葉学園大学研究紀要（教育学部）』一九
河村太美雄　一九八六　『御崎ものがたり』　私家版
菊池政和　一九九八　「阿蘇江善寺蔵『近世善悪華報録』研究と翻刻」石橋義秀ほか編『仏教文学とその周辺』和泉書院
北原吉右衛門　一九九二　『漁方雑話』　私家版

木村博　一九八八　「動植物供養の民俗」『仏教民俗学大系　四　先祖祭祀と葬墓』　名著出版
小山枯柴編　一九四二　『遠江の伝説』　安川書店
相良町文化財専門委員会監修　一九六九　『さがらの伝説百話』　相良町教育委員会
静岡県編　一九八九　『静岡県史　資料編二三　民俗　一』　静岡県
静岡県編　一九九三　『静岡県史　資料編二四　民俗　二』　静岡県
静岡県編　一九九一　『静岡県史　資料編二五　民俗　三』　静岡県
静岡県編　一九九五　『静岡県史　別編一　民俗文化史』　静岡県
静岡県編　一九九六　『静岡県史　別編二　自然災害誌』　静岡県
静岡県教育委員会文化課県史編さん室編　一九九〇　『静岡県史民俗調査報告書　一三　下岬の民俗　榛原郡御前崎町』　静岡県
静岡県教育委員会文化課県史編さん室編　一九九三　『静岡県史民俗調査報告書　一八　石津の民俗　焼津市』　静岡県
しずおかの文化新書編集部編　二〇一二　『千年に一度の大地震・大津波に備える』　財団法人静岡県文化財団
静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学コース編　二〇一二　『平成二四年度フィールドワーク実習報告書　静岡県御前崎市浜岡佐倉』　静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学コース
清水達也・山本誠彦・村山正良　一九九三　『生命がうまれる海辺　ウミガメの浜を守る』　くもん出版
大日本水産会　一九一〇　『日本重要水産動植物図解説』　大日本水産会
高野梨央　二〇一〇　「〝ウミガメを祀る〟文化」東海大学海洋学部海洋文明学科卒業論文
田口理恵・関いずみ・加藤登　二〇一一　「魚類の供養に関する研究」『東海大学海洋研究所研究報告』三二

田口理恵編　二〇一二　『魚のとむらい　供養碑から読み解く人と魚のものがたり』　東海大学出版会
土屋喬雄・玉城肇訳　一九五五　『ペルリ提督日本遠征記　四』　岩波書店
でんでんむしの会編　一九八〇　『遠州浜』　私家版
中村洋一郎　一九八八　「イルカ漁をめぐって」静岡県民俗芸能研究会『静岡県・海の民俗誌　―黒潮文化論―』　静岡新聞社
沼津市教育委員会文化振興課編　一九九九　『沼津市史編さん調査報告書　一三　松長の民俗』　沼津市教育委員会
沼津市史編さん委員会・沼津市教育委員会編　二〇〇二　『沼津市史　資料編　民俗』　沼津市
沼津市歴史民俗資料館編　一九七六　『沼津市文化財調査報告書　九　沼津内浦の民俗』　沼津市教育委員会
沼津市歴史民俗資料館編　一九七七　『沼津市文化財調査報告書　一二　沼津静浦の民俗』　沼津市教育委員会
野本寛一　一九八七　『生態民俗学序説』　白水社
野本寛一　一九八八　「海上信仰」静岡県民俗芸能研究会『静岡県・海の民俗誌　―黒潮文化論―』　静岡新聞社
野本寛一　一九九〇　『神々の風景　信仰環境論の試み』　白水社
野本寛一　一九九四　『共生のフォークロア　民俗の環境思想』　青土社
野本寛一　二〇一三　『自然災害と民俗』　森話社
浜岡町史編さん委員会編　二〇〇四　『浜岡町史　民俗編』　浜岡町
浜松市石造文化財調査会編　二〇〇一a　『浜松市の石造文化財』　浜松市教育委員会
浜松市石造文化財調査会編　二〇〇一b　『浜松市石造文化財所在目録』　浜松市教育委員会
浜松市長公室広報課編　一九六六　「堀江村の亀塚」『広報はままつ』一九六六年六月下旬号
浜松市立伊佐見公民館・わが町文化誌編集委員会編　一九九七　『わが町文化誌　湖と花と緑の里　いさみ』　浜松

市立伊佐見公民館
浜松市立五島公民館・わが町文化誌編集委員会編　一九九八　『わが町文化誌　太陽と潮風　五島遠州浜』　浜松市立五島公民館活動推進委員会
浜松市立庄内公民館・わが町文化誌編集委員会編　一九九五　『わが町文化誌　碧い湖と緑の半島　庄内』　浜松市立庄内公民館
福田町史編集委員会編　一九八三　『史跡をたずねて　私たちの福田』　福田町教育委員会
福田町史編さん委員会編　一九九九　『福田町史　資料編　民俗』　福田町
藤井弘章　一九九八a　「ウミガメの墓　―和歌山県内の事例報告―」『和歌山県立博物館研究紀要』三
藤井弘章　一九九八b　「紀伊半島南部におけるウミガメ漁とその食習俗」『日本民俗学』二一五
藤井弘章　一九九九a　「ウミガメと流木にまつわる漁撈習俗」『エコソフィア』四
藤井弘章　一九九九b　「マンボウの民俗　―紀州藩における捕獲奨励と捕獲・解体にまつわる伝承―」『和歌山地方史研究』三六
藤井弘章　二〇〇一　「地域差と時代差からみたウミガメの民俗　―海村・離島追跡調査から―」『成城大学民俗学研究所紀要』二五
藤井弘章　二〇〇三　「海洋民研究における環境民俗学的視点」増尾伸一郎ほか編『環境と心性の文化史　下　環境と心性の葛藤』勉誠出版
藤井弘章　二〇〇五　「知多半島のウミガメ埋葬・供養習俗」『名古屋民俗叢書　四　生活環境の変化と民俗』
藤井弘章　二〇〇六　「ウミガメ捕獲習俗からみた卜甲調達の地域と技術」東アジア怪異学会編『亀卜　歴史の地層に秘められたうらないの技をほりおこす』臨川書店

藤井弘章　二〇〇八　「対馬・壱岐におけるウミガメの民俗　―亀トの里とウミガメ―」『民俗文化』二〇
藤井弘章　二〇〇九　「動物食と動物供養」『人と動物の日本史　四　信仰のなかの動物たち』吉川弘文館
藤井弘章　二〇一一　「隠岐・山陰沿岸のウミガメの民俗」『民俗文化』二三
藤井弘章　二〇一二a　「山口県のウミガメの民俗　―長門地方の祭祀・供養習俗を中心に―」『民俗文化』二四
藤井弘章　二〇一二b　「民俗　ヒトとウミガメの関係史」亀崎直樹編『ウミガメの自然誌』東京大学出版会
藤井弘章　二〇一二c　「ウミガメにまつわる報恩説話と禁忌伝承」『万葉古代学研究所年報』一〇
藤井弘章　二〇一三a　「江戸時代におけるウミガメ祭祀の成立過程　―宮城県七ヶ浜町の伝承と新出資料の比較を通して―」『近畿大学大学院文芸学研究科紀要混沌』一〇
藤井弘章　二〇一三b　「愛知県のウミガメの民俗」『名古屋民俗』五九
藤井弘章　二〇一三c　「東北地方太平洋沿岸のウミガメの民俗　―東日本大震災後の追跡調査を踏まえて―」『民俗文化』二五
藤井弘章　二〇一四　「日本列島のウミガメ供養習俗」『動物考古学』三一
藤原正人編　一九七三　『明治前期産業発達史資料　勧業博覧会資料　二一』　明治文献資料刊行会
松崎町教育委員会町史編さん委員会編　一九九九　「岩地の日和山の亀塚」『松崎町史だより』二二
松崎町教育委員会町史編さん委員会編　二〇〇〇　「南海にねむる漁船の記録」『松崎町史だより』二九
松林久蔵　一九八八　『御前崎で産まれたアカウミガメ』　私家版
御手洗清　一九八五　『遠州七ふしぎの話』　遠州伝説研究協会
宮田登　一九九一　「黒潮と民俗信仰」宮田登ほか『海と列島文化　七　黒潮の道』小学館
焼津市総務部市史編さん室編　二〇〇三　『焼津市史民俗調査報告書　二　浜当目の民俗』　焼津市

焼津市総務部市史編さん室編　二〇〇四　『焼津市史民俗調査報告書　三　浜通りの民俗』　焼津市
焼津市史編さん委員会編　二〇〇七　『焼津市史　民俗編』　焼津市
焼津市史編さん委員会編　二〇〇八　『焼津の歴史あれこれ』　焼津市
八木洋行編　二〇〇七　『しずおかの文化　二〇〇七年秋号』　財団法人静岡県文化財団
依田賢太郎　二〇〇七　『どうぶつのお墓をなぜつくるか　ペット埋葬の源流・動物塚』　社会評論社

（付記）
浜松市では、鈴木育子氏（東光寺）に話をうかがい、宮下知良氏（浜松市博物館）、浜松市立中央図書館のお世話になった。磐田市では、深川一成氏（観音寺）に話をうかがった。御前崎市では、小野田武氏、沢入辰美氏、沢入康夫氏、沢入由枝氏、鈴木圓司氏、服部巽氏（駒形神社）、増田義雄氏、松尾長作氏、柳沢こよ氏（以上、一九九九年調査）、大池茂夫氏、大澤茂美氏（御前崎市ウミガメ保護監視員）、小野田市雄氏、小野田ふさ氏、神代邦夫氏、下村和子氏、下村甚市氏、下村政道氏、鈴木紀捷氏（御前崎市ウミガメ保護監視員）、高田正義氏（御前崎市ウミガメ保護監視員）、高塚清氏、高塚みさ氏、高塚みち氏、高山国臣氏（駒形神社）、増田昭子氏、松林悦子氏、松林千寿代氏、吉村孫俊氏（以上、二〇一三年調査）に話をうかがい、一九九九年には松井秀浩氏（御前崎市教育委員会）、二〇一三年には赤掘秀樹氏（中部電力浜岡原子力発電所総務部総務課）、小野田一磨氏、斎藤正敏氏（白羽公民館館長）、坂本浩長氏（御前崎市教育委員会）、鈴木和明氏（御前崎市教育委員会）、村本薫氏（御前崎市教育委員会）、はまゆう旅館、民宿岬のお世話になった。二〇一四年の論文作成時には、石川由樹氏（御前崎市教育委員会）のお世話になった。牧之原市では、長谷川倫和氏（牧之原市教育委員会）、松下善和氏（牧之原市教育委員会）のお世話になった。焼津市では、山田常吉氏に話をうかがい、栗田潤美氏（焼津市歴史民俗資料館）、薮

内駿河男氏のお世話になった。沼津市では、久保田典子氏（沼津市歴史民俗資料館）、山田知美氏（沼津市歴史民俗資料館）のお世話になった。松崎町では、斎藤氏に話をうかがい、松崎町史編さん室のお世話になった。南伊豆町では、小久保安治氏に話をうかがい、南伊豆町教育委員会、旅館波勝路のお世話になった。伊東市では、石井佳子氏、稲葉一氏（三嶋神社）、太田小千代氏、杉本藤五郎氏、田中憲一氏、富永静孝氏（海蔵寺）、富永花枝氏、中野みちこ氏（以上、一九九八年調査）、石井英雄氏、坂下治衛氏、杉本正仁氏、中野みちこ氏、深澤隆孝氏（弘誓寺）（以上、二〇一三年調査）に話をうかがい、一九九八年には木村博氏、二〇一三年には金子浩之氏（伊東市史編纂室）、河合拓氏（JFいとう漁業協同組合）のお世話になった。このほか、各地域でお名前をうかがわなかった多くの方々にも話を聞いたり、お世話になった。このほか、黒船館、日本ウミガメ協議会、野本寛一氏、橋口尚武氏のお世話になった。

なお、（　）の中は、調査当時のものである。

また、写真については、注記のない限りはすべて筆者の撮影である。